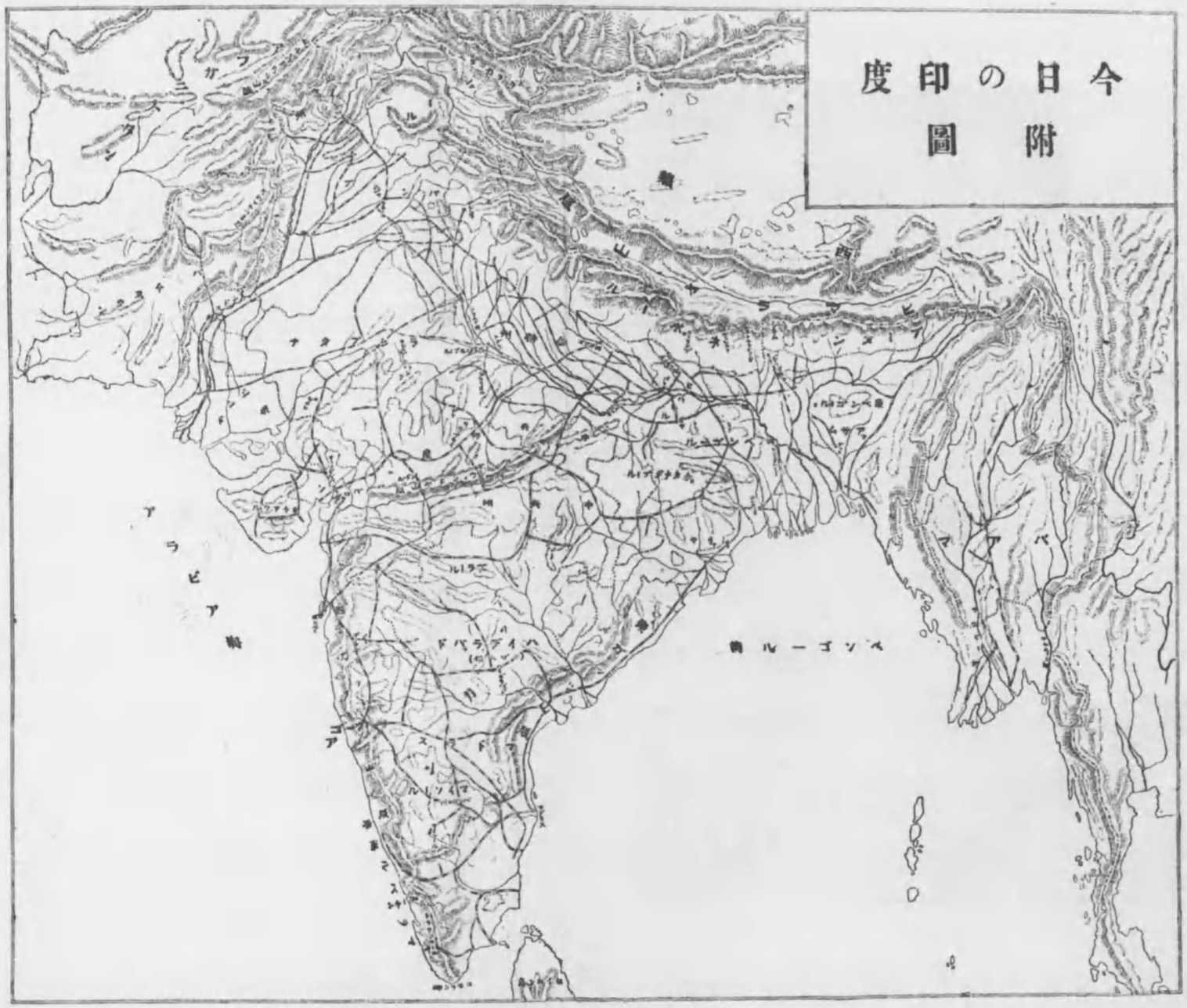
360
198
360-198
12005014122298

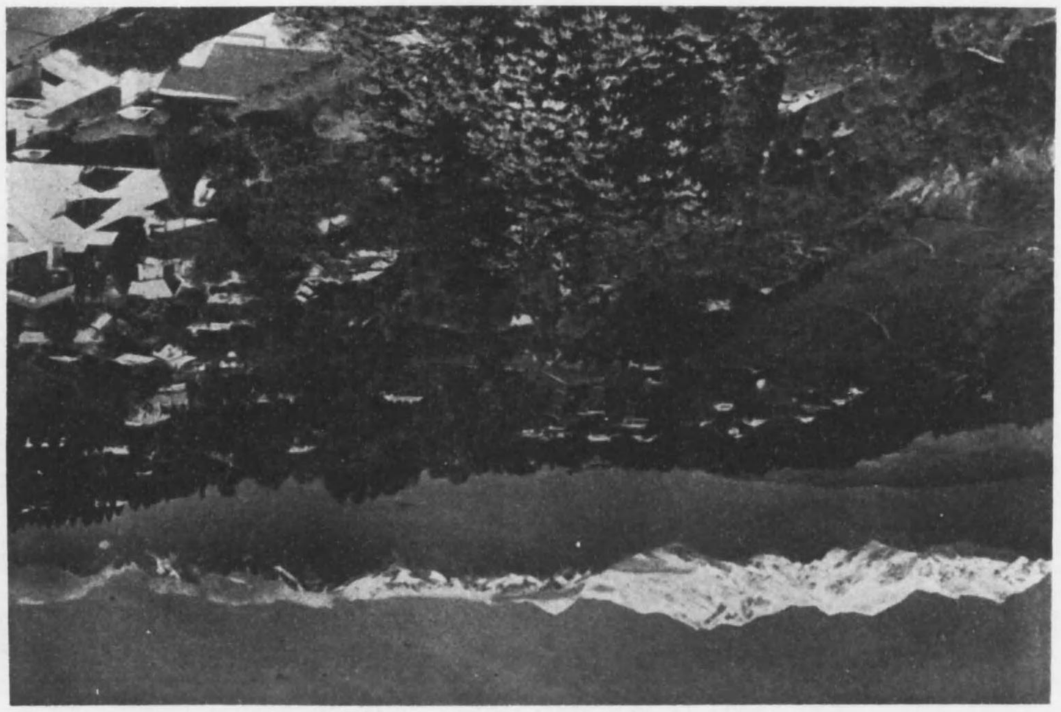
テト1F-27
360-198

今日の印度

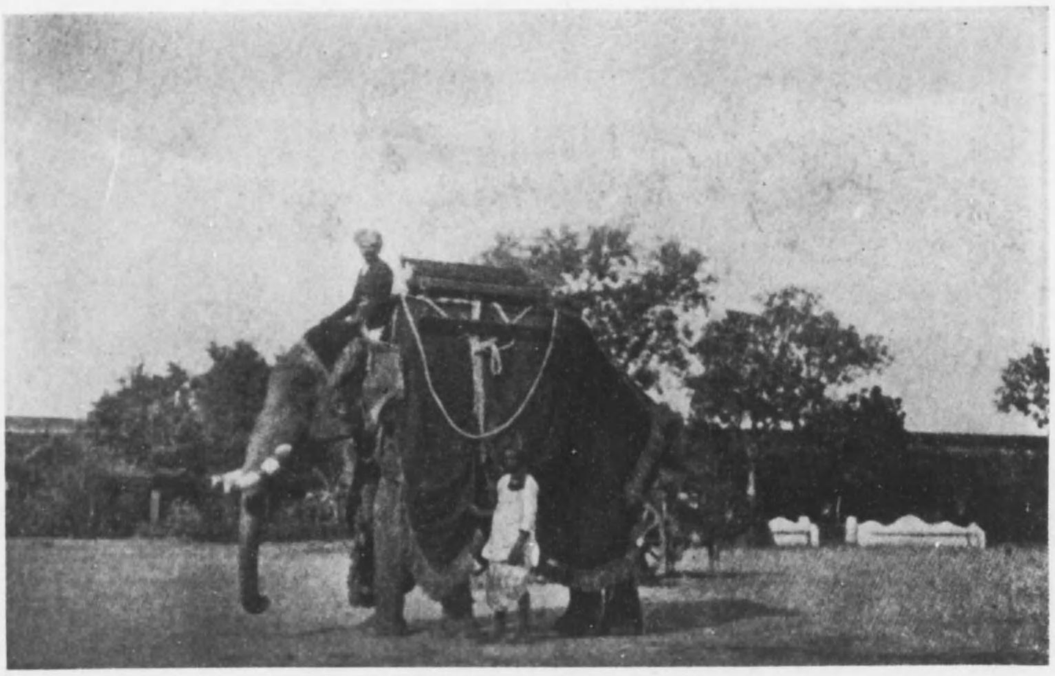
山上天川著

大正
4.9.14
内交


今日の印度
附圖



（原爆記念碑）　市ノ川ジーゲるあに島の尺千七拔海中脈山ヤヲマヒ

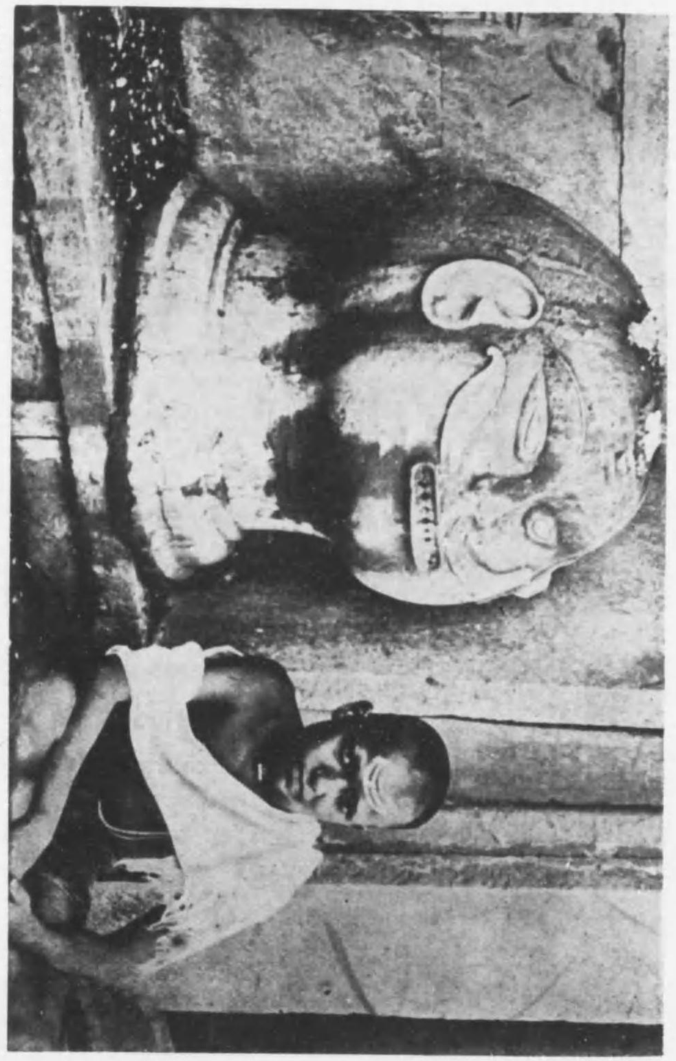


象の用乘官長令司軍度印

（五七頁參照）

焚火の間にある印度の苦行者

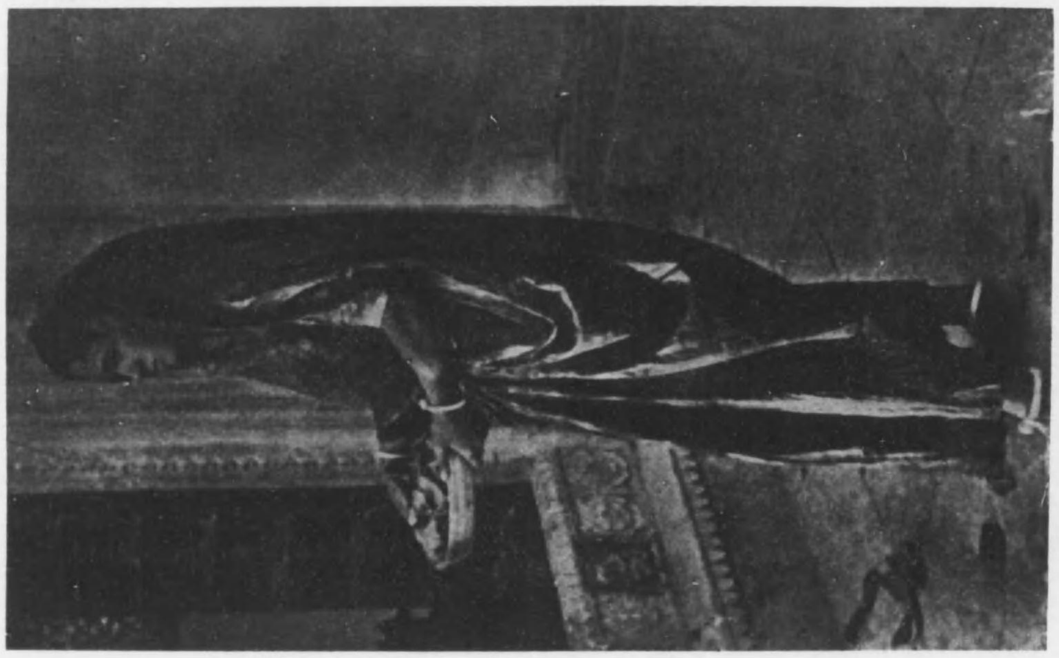
釘上の苦行　（五七頁參照）



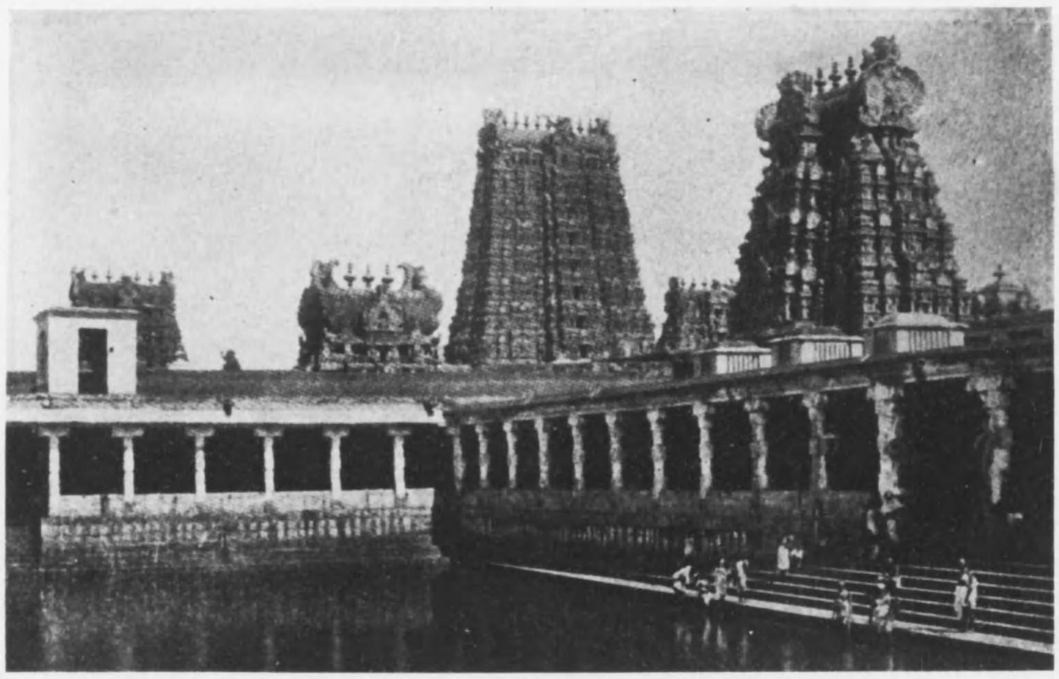
頭の魔妖

り な戦記の者拝崇ッシはるけ描を線横に額前の年少

（原番教宗の裏印）



印度教徒婦人のシヴァ神詣で　（二五三頁參照）



印度マヅラの金蓮池及び印度教の寺院

毒蛇使ひの圖

笛を吹けば壺中のコブラ其の音にチャームせられ躍り出りす

序

ヒマラヤ山下、ガンヂス河畔、世界文明の先驅と東洋思想の淵源をなせるもの是れ印度の文明ではないか。五千年の歴史ある倉稟に藏收せる內容の豐富なるには世界の識者をして驚歎の眼を放たしむるのである。此一大寶庫を打開するに氣付かざるが如きは迂の極ではあるまいか。想ふに今後我國の發展策としては南進北進共に可ならん、去れど吾人は寧ろ西進して日印の親交を增進するの急務たるを知る。

我國固有の文明は、佛敎が將來せられて其幽玄なる敎理に由り、文華の發達を催促される事は歴史の示す所ではないか。かゝる密接なる關係を有する當對國の研究を等閑にすると云ふ道理はあるまいと思ふ。

予は約七ヶ年、印度に錫を留め曹洞宗大學留學生としての研究學科の外、其思想生活及び社會風習等の事象に就て常に注意を拂ひ多少得る所が有つた、是

れ吾人が嚮きに東京朝日新聞社の要求に應じ「今日の印度」一篇を寄稿し管見の一部を發表せし所以である。素より世間にありふれたる横の文字を縱に書き直したるものとは聊か類を異にして居る積りである。

斯篇始より上梓するの意無かりしも、偶ま建部博士の慫慂を享け且つ朝日編輯長安藤氏の勸告に依つて此に發刊するの運に到りしを欣び謹で其の厚意を感謝す。若し夫れ現今印度の討究に對し斯の書を繙て幾許の資する所あらば著者の光榮之れに過ぎたるはない。終に臨み予が渡米不在の爲め本書刊行に當て責任の全部を負擔しくれたる清籟君、又面倒なる校正には竹城、一秋兩君を煩はせしことの多大なるを想ひ深く謝意を表する次第である。

米國桑港に於ける萬國佛教大會へ列席の爲め横濱解纜の前夜深更

大正四年七月九日

著者識す

目次

一 緒言……一—七

二 印度と日英……八—一二
亞細亞銀行頭取……八
權力的結婚……九
燈臺下闇し……一〇

三 印度の不穩……一三—二四
印度人の覺醒……一三
渦卷の中心……一九
英人の印度人虐待……一五
偉大なる教育の力……二一
印度人威張り出す……一八
大なる疑問……二三

四 印度の教育……二五—四五
教育機關……二五
街燈の下で讀書……二七

五 印度人の思想生活……四六—六六

自然界と思想……四六
我とは何ぞや……四七
南無阿彌陀佛……四八
非歴史的……四九
火から水へ……五一
幕の内の嬪妾……五三
交際期節……五四
兩極端の思想……五六
苦行者の眞狀……五七
肉慾充足派……五八
半獸主義全印度を風靡す……六一
印度佛教のお代り……六二
女根崇拜宗……六五
色魔の世界……六五
英語の知識……二九
大學卒業生の傾向……三一
日本と印度留學生……三三
宗教と教育……三五
地勢と教育……三〇
英領と藩王國……二九
兩性と教育……二九

六 印度の言語……六七—八五

梵語と印度語……六七
中國の地域……六八

自然語……七七
現代印度語の分類……七八
現代の印度語……八〇
吠陀梵語と古典梵語……六九
名前と職業……七一
二大語系……七三
梵語の意義……七六

七 印度の社會組織……八六—一〇四

印度救濟の一策……八六
階級團と制裁……八七
階級別と食器……八九
職業と階級……九〇
不羈國一致……九一
階級の惡利……八六
階級的法律……八七
四姓の區別……八九
天下の愚法……九〇
學者と王者……九一

八 印度の政治……一〇五—一二三

政治上の區劃……一〇五
中央と地方……一〇八
印度の都會……一一〇
政總の官制……一〇五
總督大臣任期……一〇六
事務大臣職權……一〇七

慾張の中央政府……一二三
二種の官吏……一二六
歳入と歳出……一二三
印度人の勢力增進……一二八
非常文縟禮……一二四
政治上の最大缺點……一二三

九 印度の軍政……一二四—一三七

鬼將軍と印度の軍政……一二四
印度の兵數……一三一
モ卿の調和的政策……一二七
自炊をする兵隊……一三三
人望總督ミントー卿……一二八
一擧兩得の雇兵制……一三四
藩王國の兵士……一三〇
軍費問題……一三五

十 政治運動……一三八—一四八

危險思想……一三八
スワラーシ……一四三
スワデーシー……一三九
政治運動と新聞……一四六
日本商の大失敗……一四一

十一 藩王國……一四九—一六四

ネーチーブステート……一四九
ハイデラバッド……一五〇

バロダ國……一五二
トラヴンコール國……一五八
マイソール國……一五四
ラジプタナ……一五九
コーチン國……一五六
ニポール國……一六〇
カシユミール國……一五七
中央印度……一六一

十二 印度の宗教……一六五—二〇三

宗教的國民……一六五
パーシー……一八七
ヒンヅーの語義……一六六
教義梗概……一九〇
ヒンヅーの數……一六八
パーシーの勢力……一九一
改宗運動……一七〇
回教徒の死生觀……一九二
印度教徒の增加率……一七二
回教徒の分布……一九四
梵教會……一七三
歷史と分布の關係……一九五
梵教會の大成者……一七六
基督教……一九七
ブールヤ教會……一七八
耆那教……一九八
シーク教……一八二
耆那教の將來……二〇〇
佛教……一八四
生氣崇拜教……二〇一

宗教的統一……二〇一
十三 印度の文學……二〇四—二四七
〔近代文學の特徴〕……二〇四
韻文と散文……二〇八
三種の對象……二〇九
ラーマ文學……二一〇
ラーマーナンダ……二一一
カビール……二一二
ダーブー……二一三
アーディグランド……二一四
ツルシーダース……二一四
ラーマの冒險の湖……二一七
クリシュナ文學……二一〇
兩性渇仰……二一一
叙述の内容……二一三
サトサイヤ……二一五
キッデヤーメティ……二一六
オリッサ地方……二一七
マラタ地方……二一八
ラジプタナ……二一九
ドラキディアン……二二〇
宗教的文學……二二〇
ツルガー……二二一
ムクンダ・ラーム……二二二
其他の詩人……二二三
西部ヒンディー語……二二六
梵語の百科辭典……二二七
ウルヅー文學……二二八

ベンゴール文學……二二一
歐西文化の移入……二二一
ラーマ・モハン・ライ……二二三
偶像崇拜教……二二四
散文學の父……二二五
デヴエーンドラ・ナート・タゴール氏……二二六
十四 印度の女子……二四八—二六七
寵の鳥……二四八
地獄行き……二四九
極樂詣り……二五〇
出産祝ひ……二五一
兒童の教育……二五一
シヲ祭……二五二
クリシュナ祭……二五四
英雄崇拜……二五四
瓦人操縦法……二五六
結婚媒介業……二五七
見合ひ式……二五八
洗禮の式……二五九
結婚式……二六〇
早婚?……二六五
夫婦の關係……二六六

附錄　ヒマラヤ記……二六九—三一三
（附＝達賴喇嘛會見記）

目次終

今日の印度

山上天川著

一　緒言

印度は古今東西あらゆる人類の社會生活史を究尋すべき好個の博覽會場である。看よや！

上下茫々五千歳、人類の有ゆる智識と有ゆる經驗とを一幅の活畫として眺め得らるゝもの之れ即ち印度ではないか。

然り！　人類の原始的なる社會生活の現狀を目擊し得らるゝも印度なれば、

最新文明のそれを了會し得らるゝも亦印度である。

加之國家の興亡起滅の原因を究め得らるゝも印度なれば、亡國の慘狀と興國の元氣とを默識神通し得らるゝも亦印度である。

面積一百八十萬二千六百五十七方哩、縮みあがるやうな寒さと、燒かるゝやうな暑さとを、一國の內、數日の間に、味ひ得らるゝもの、之れ即ち印度ではないか。

然り！　露西亞を除ける歐洲大陸全體の地面よりも廣く、一年三百六十日、常に單衣一枚も尙ほ且つ暑さに堪へざる地も印度なれば、百年三萬六千日、絕えずストーブを要する處も亦印度である。

然り而して今や、鐵路縱橫に通じ、昨日詩村(Simla)にストーブを擁して、ホット・ウィスキーを呑んで暖を取りし人も、今日はデリー(Delhi)のパンカ(扇風器)の下に、コールド・ドリンクを呼んで、腹の中から冷しても、尙ほ且つ汗を

流すのも亦印度である。

生靈三億一千五百萬、天下の有ゆる人種と有ゆる民族とが錯雜混交して、一個尨大の國家をなせるもの之れ即ち印度ではないか。

然り！　地球上に棲息する人類總數の五分の一、我が日本人の約六倍なる多數の印度人中には、黑ン坊あり白ン坊あり、赤ン坊あり黃ン坊あり、鼻高きあり鼻低きあり、髮毛味噌色なるあり墨色なるあり、眼鳶色なるあり鳶色ならぬあり、顏馬の如く長きあり盆の如く圓きあり、身體二斗臼の如く肥えたる男女あるも印度なれば、河童の乾物の如く痩せ細りたる人の子あるも亦印度である。

加之鼻下長先生あり鼻下短先生あり、五色の酒呑む位は朝飯前のお茶漬位に心得居る新らしき女あるも印度なれば、女部屋にたて籠りて他の男の顏見るさへ恥かしがる古き女あるも亦印度である。

若し夫れ是等さま〳〵の人種民族が混交亂會して、百種千樣の合ひの子を產

み出せるに到つては、印度救濟難の隨一に數へざるを得ぬ。現代印度の諺に曰く『黑人と白人とは等しく神樣の造り玉ふ所、されど合ひの子は英國兵士の造り出す所なり』と。

山は高し二萬九千有餘尺、國は幾度か興り幾回か亡びたれど、千古萬古消えやらざる雪をいたゞき、巍然として塵境を超出し、嚴乎として下界を睥睨するヒマラヤ（Himalaya）の峰は、今も昔も印度にありて、宇宙の眞理の恒久不變なるを默示して居るではないか。

河は長し一千五百數十哩、統治の主權者は幾回か移り幾度か代りたれど、千古萬古洋々として盡くることを知らざる恒河及びインダスの流は、人生の煩勞苦悶を洗ひ清涼の法味を布施する大聖哲の敎說と人格との不滅なることを暗示して居るではないか。

然り！　坤圓球上、現代思想界の原野に繁茂せる種々なる宗敎や樣々なる哲

學の樹木は、その花實より莖芽枝葉に到るまで甚だ立派なものに相違ないが、彼等の根本觀念の從來する所を究盡すれば、皆これヒマラヤの麓恒河々畔の聖哲又は思索家の敎說を布演し修飾せるものに外ならない。數十世紀の間、人類の思想をして生氣あらしめ靈動せしめ向上せしめた大宗敎も大哲學も其の源は矢張り印度に歸せざるを得ない。

國家としての印度は數百年前已に滅亡して、徒らに過去の榮華を語る計りだ！　國民としての印度人は、數世紀前より隷屬の民と落ちぶれ果てゝ、空しく昔の光榮を顧みる計りだ！　されど宇宙の謎を解き、絕對界の神秘を發くべく數千年間の努力によりて、彼等が生み出せし深遠高大の思想や敎說は、今尙ほ獨立獨步の權利を領し、以て天下の人心を支配し啓導して居る。

泰西印度學者の泰斗たるマックス・ミューレルやドキッセンなどが、印度を以て世界に於ける哲學思想發展の源頭となし、歐洲の樣々な哲學や色々な思想は悉

く其の源を吠陀や優波尼沙土及び佛教等の中に見出されざるなしと道破せるもの、蓋し至言と謂つべきである。

若し印度にヒマラヤ山なく恒河なくインダス河なかりせば、かくも長命偉大なる人格を出し、かくも深遠高大なる思想を産むことが能きなかつたかも知れない。山高からざれば谷深からず、源深からざれば流れ長からず、流れ長からざれば地大ならざる底の消息は、實に印度の地勢と思想史とがよく之れを説明して居る。

物質的にも精神的にも天下最富の寶庫として、若しくは天下に冠たる美人として、世界各國の色男を垂涎三尺ならしむるもの、之れ即ち印度ではないか？

然り！　棉あり亞麻あり阿片あり、金あり鐵あり寶珠あり、藍あり米あり石炭あり、茶あり菜種あり藥草あるも印度なれば、虎あり鰐あり毒蛇あり、象あり豹あり白狐あり、獅子あり鹿あり猿猴あり、鸚鵡あり孔雀あり極樂鳥あるも

亦印度である。

若し夫れ思想界の産物としては、唯物論あり唯心論あり、觀念論あり進化論あり、佛教あり印度教あり、回々教あり拜火教あるも印度なれば、肉慾派あり苦行派あり、自然主義あり浪漫主義あり、厭世主義あり樂天主義あり、社會主義あり無政府主義あるも亦印度である。

故に現代印度の政治界、軍事界、教育界、宗教界及び思想界等百般の社會生活の狀態に到りては、特殊の研究と深刻の觀察と相俟たなければ完全なる叙述をなすことは能きない。以下項を分けて之を述べやう。

二　印度と日英

亞細亞銀行頭取

世界各國の人民中日本人ほど、印度人から同情せられ信頼せられ尊敬せらる國民はあるまい。印度人は日本人を見れば、恰も百年の知己にでも會つたかの如く直に懐く、故岡倉覺三氏の「亞細亞は一なり」(Asia is one)との道破は、今尚印度社會に一の名言として持て囃されて居る。然り而して「亞細亞の牛耳を取るものは日本を措いて外にない、日本！　日本！　汝は實に株式會社亞細亞銀行の頭取であらねばならぬ」とは印度人一般の思想である。然し印度の識者は、若し日本が某々國のやうに領土的野心を包藏するならば、亞細亞銀行と云ふ株式會社は到底ものにならぬと思つて居る。隨分永い間虐められた印度人が、自分の信頼尊敬する日本をして呑噬の慾を逞くせしめたくない、弱いもの

虐めの民族たらしめたくないと思ふのも無理はない。

權力的結婚

印度人の日本人に對する同情と信頼と尊敬の念は上記の如くであるから、印度の御亭主殿が、在印の日本人に對して心からなる好感を有たれぬのは、蓋し智者を俟つて而して後知るべきではあるまい。然り！馬鹿者にあらざる限り、自分の細君が他の男に對し、頻に色目を使つたり、秋波を送つたり、或は餘りに打ち解けた態度で話したりするのを見せつけられたら、決して面白く感ぜざるのみか、胸中盛んに嫉妬の焔を燃やすのは蓋し當然であらう。否境遇さへ許さば蹴り且擲り飛ばしたい氣もするだらう。經濟關係や自家存立の事情さへ許さば、早速離婚を宣告したくもなるだらう。然し英國と印度との關係は必ずしも合意的の結婚ではなく、戰勝者の權力を以て成立せしめた結婚である。嫁は早く逃げ出さうとするし、亭主は逃がすまい逃がすまいと心を碎いて居る間柄

であるから、少々細君が駄々を捏ねたり拗ねたりしても、宥めたり賺かしたり叱つたりして取り逃がさぬやう要慎せねばならぬ。

印度は千九百四五年頃から、大分駄々をこねた報酬として、印度政廳立法府の改革を贏ち得た。今に歐洲の大戰亂でも濟んだら、復何とか難癖をつけて駄駄を捏ねるかも知れない。先年はベンゴール州やブーナ市の印度教徒が中心となつて駄々を捏ねたが、今次はバンジャブ州や西北國境州の回教徒が中心となつて駄々を捏ねるかも知れぬ。天下無雙の財産家の娘を細君にもてる我が同盟の友は、寢ても醒めても心配の絶ゆる暇はない、羨ましくも亦氣の毒である。

燈臺下闇し

印度は日英同盟の大要素の一である、若し英國が印度を領有して居なかつたならば、日英同盟は決して成り立たなかつたであらう。されば我々日本人は是非とも印度の事情を知悉して居なければならぬ筈だ。否！日英同盟と云ふ重大

な要件が起らぬ前から、日本人は、歴史的特に日本文明史の討究上、他の文明國に先んじて、よりよく印度を了解して居なければならぬ。然るに事實は全く之に反して世界の文明國民中、日本人ほど印度の事情に無知識な國民はない。日本人の或者は印度を一種の骨董品視して、現代の新生命の上には沒交渉なるが如く考へて居る。彼等の或者は印度を呼ぶに天竺の語を以てし、娑婆世界から餘ッ程遠い所にでもあるものゝ如く考へて居る。日本人の或者は印度は昔こそ文明の花を咲かせたれ、今は半開の野蠻國で、黒ん坊の蠢動しつゝある國だから、研究する價値も何にもないと考へて居る。

新しいものを好むは人情の常なれば、日本人の大多數が古い印度を知らぬのも無理はない。が、徒らに新奇を逐ひ模倣をこれ事とするのが、日本人の日本人たる譽でもあるまい。須らく溫故知新の端的を辨じて、自ら新しいものを作り出す底の氣慨を養ふて貰ひたいものだ。況や印度は日英攻守同盟の大要素の

一となれるに於てをや。近世の外交史上、日本國民の國際生活史上に特筆大書せらるべき一大要件たる、攻守同盟の要素の如何なる狀態に於いてあるかさへ知らずに暮せる國民は呑氣なるかな。燈臺下闇しにも程こそあれだ！

加之、印度は日本の商賣の上から考へて見ても、我が大華客の一人である。然り最も確なる大華客の一員である。支那と云ふ國は、政治上の關係から、ともすると直に日貨排斥と來る、實に厄介千萬な間柄である。然るに印度は英國の領土である限り、萬一日英同盟の破棄せらるゝ時節が到來すると假定しても印度人の方から進んで日貨排斥なんどを企つる憂ひは全くない。我が國の實業家諸君が、眞面目になつて印度を研究し印度人を相手にしさへすれば、必ず面白い成績を擧げ得るに相違ない。暑いから厭やだの、寒いから嫌ひだのと贅澤を云つて居ては、迚も目覺しい發展は望まれない。

三　印度の不穩

印度人の覺醒

印度の不穩と云ふ言葉は、今から十年ほど前に出來た文句であるが、印度人が眞個に覺醒し初めたのは、今を去る十九年前、アビシニア人が伊太利人に打ち勝つたのを見てからのことである。即ち謂ゆる印度の不穩の前兆は、印度大陸三億の生靈が阿弗利加のアビシニアンが歐洲人たるイタリアンを打ち破つた時に起つて居るのである。歷史の敎ふる所によれば、亞細亞人は十七、十八、十九と約三世紀の間、歐洲人の勢力の爲め壓倒せられて居た。而して印度三億の生民は被壓伏者の隨一であり標本であつた。隨つて彼等は亞細亞人は到底歐洲人の勢力に拮抗することは出來ないのかなと、怨恨の涙を呑んで居たのである。

然るに千八百九十六年に、アビシニア人が伊太利人と戰つて大勝利を得たも

のだから、亞細亞人と雖も奮發さへすれば、必ず歐洲人の勢力を凌駕することが出來る、一生懸命に力行さへすれば、少くとも歐洲人と競爭の位置に立つことが出來ると云ふ考へを起すに至つたのである。而して彼等は、「吾々と雖も奮發さへすれば、必ずしも自治自立することは不可能でない、奮發せい、奮發せい、奮發の前には獨立自由の光明が見えて居るぞ」と提唱するに到つた。

加之一千九百四五年に亙る日露の役に於て、海陸到る處に、東方の小島國が西歐の大强國を打ち破つたのを見た印度人等は、有頂天になつて亞細亞勢力勃興の新機運を喜び、愈益亞細亞人の前途は有望多端なりとの念を强め、遂に謂ゆる印度の不穩なるものを釀成するに到つたのだ。以上は我輩の意見でなく、「印度の不穩の原因動機は何ぞや」との疑問に對する英國政治家一般の答案である。

此處にも我々は萬有相關の大眞理を事實の上に讀破することが出來る。日本

は決して印度の不穩を釀成せしめやうと思つて、露西亞と戰つた譯ではない。が印度人が日本の勝利を見て、亞細亞人も偉いぞ、歐洲人ばかりが人間ぢやないぞと覺醒するやうになり、更に其の念を高めて、多年の壓制から脱れんとし、遂に自治自立の運動を敢てするやうになつたのだから仕方がない。時間は悠久だ、悠久の時間中には、天下は廻り持ちだと云ふ眞理が、幾度となく繰返さるるに違ひない。

英人の印度人虐待

我輩の調査し得たる所によれば、今から二十年前までは、英人の印度人を壓制虐待することは非常なものであつたらしい。カルカッタのやうな大都會の眞中に於てゞさへ、印度人は英人の前には人間並に大きな顔して濶歩することは出來なかつた。若し印度人が肩で風切つて大道の眞中を歩いてゞも居たら、早速英人の爲に蹴飛ばされ言語道斷の慘めな目に遭ふのであつた。早い話が、印

度人の大多數は二十年前までは人間として取扱はれて居なかつたのだ。歐洲人にあらざれば人にあらずと云ふ樣な有樣であつたのだ。今でも印度の極々田舍に行つて見れば、國道の眞中の坦々たる所は役人樣のお通りになる道で、其の兩側の凸凹になつた部分が印度人即ち人民共の道と定つて居る。此の一事だけでも亡國の民の如何に慘めなるかゞ納得されやう。比較的に人間の自由を尊ぶと云はるゝ英人にして尙且斯の如しである。若し印度が英人以外の歐洲人の手に歸して居たら、印度人は何んなに非道い目に會はされたか知れない。予は印度の片田舍を訪ふ毎に、「あゝ亡國の民たらんよりは寧ろ死するに如かず」としみ〴〵感せざるを得なかつた。今左に其の實例を一つだけ擧げて置く。

予は明治四十五年の二月、佛誕生の聖地に詣づべく、ノーガル（Nowgal）停車場から牛車を雇ふてバードプール（Birdpur）村に通ずる國道を旅行した。其時我が牛車の馭者が、坦々たる大道の眞中を行かずに、片側の凸凹路を選んで

牛を進めるから、何せ大道の眞中を行かぬかと叱るやうに詰問した。すると馭者先生、あれはお上のお役人樣方のお通りになる道ですから、吾々人民は通れません。若し通行したら、擲られた上に科料に處せられますと答へた。そこで予はおれも役人だから眞中を通つて、早く牛を急がせよと命じたら、馭者先生怪訝な顏して予を眺め、巡査に會つたら御役人たる證據を見せて下さいよと云つて、漸く國道の眞中を行き初めた。道の一里も進んだかと思ふ頃、四ッ辻の樣な所に巡査が居て、我牛車の方に近寄り、何せ眞中を通るかと馭者を叱りつけた。そこで、予は直に査公に向ひ、吾輩はカルカッタ大學のプロフエッサーだ！虛言と思ふなら此名刺を見よと云つたら、査公は忽ち態度を改め、擧手不動の敬禮をなし自らの無禮を謝した。

壓制でも虐待でも習慣になつて了へば、最早壓制とも虐待とも感ぜられなくなる。特に無知識の階級に於て然りである。

印度人威張り出す

然るに十年このかた、英人の印度人に對する態度が丸で一變したい――勿論前記の如き極々の片田舎は別だが――今では印度人の方が却て大威張りで、歐洲人の勢力を壓倒し初めた。こは勿論比較的に人智の進歩した地方に於ける現今の狀態である。然り而して謂ゆる印度の不穩なるものは、敎育い普及したベンゴール(Bengal)州民や、歷史的に尙武勇敢の氣象に富めるマラタ(Maratha)種族やパンジャブ(Punjab)州の一地方民等が、諸地方から相呼應して起した渦卷の暴風なのだ。千九百四五年頃から、千九百八九年頃までの間に、此の渦卷の犧牲となつた英人は決して少くない。又此の渦卷の中心となつた印度の名士で、或は殺されたり或は監獄に投げ込まれたりしたものも決して少くない。而して英國の保守黨員中、その人ありと知らるゝカーゾン卿が、印度統治で失敗したのも此の渦卷の爲めであるし、卿の後を承けたミントー伯や、モーレー卿

が、印度統治問題の解決で、印度人間に稍人氣を集め得たのも此の渦卷の爲である。換言せば印度政廳の立法府の改革されたのは、所謂印度の不穩と云ふ大渦卷の勃興によりて產み出された賜物なのである。

渦卷の中心

ベンゴール州を中心として起つた不穩の渦卷と、プーナを中心として起つた暴風とは、彼等が期する所の結果は同じで在つても、その由つて來れる所は甚だ異つて居る。試みに印度大陸の地圖を一見せよ、ベンゴール渦卷の中心たるカルカッタと、マラタ渦卷の起點たるプーナ(Poona)とは、東の端と西の端とに隔たつて居る。即ち一はベンゴール灣に臨み、他はアラビア海に面し、印度三角洲の最も廣大なる部分の兩端に離れて居る。又歷史の上から兩民族の性情を觀察せば、地理上の相異よりも、更に一層甚だしい相異がある。即ちマラタ族はモーガル帝國の創立以來、始終謀反の旗を飜へした首長である。而して彼

等は英國の勢力に反抗し、英人を畏縮せしめ、餘程長い間英國の旗下に服するを潔よしとせなかつた巨魁である。然るにベンゴール人は、ブラッセーの役で、たゞ一度戰つた丈で、難なくモーガル帝國の手から英國の手に轉がり込んだ民族である。ベンゴール人は主君を取り替へる事は何とも思つてゐない民族であつた。

事態かくの如くであるから、ベンゴール州民は印度各州の民族中、最も卑怯な無氣力な無節操な人種として賤しまれて居た。今の英領印度中で、英國が最も容易く取つた地方はベンゴール州とバアマである。彼等は戰爭らしい戰爭は丸で出來なかつたと謂つてもよい。之に反してプーナを中心とせるマラタ族は非常に英人を苦しめ、彼等を征服する爲に英國の拂つた犧牲は頗る多大なるものであつた。而して彼等は之を前にしてはモーガル朝廷を畏縮せしめ、之を後にしては英人を苦しめ得た歴史を回顧し、それを印度の華とし、今尚一種の誇

りとして居る。されば彼等が印度の不穩の渦卷の一中心となつたのは決して怪しむに足らない、彼等は腕に覺があると自信して居るのだ。

偉大なる教育の力

然るに卑怯無氣力なベンゴール人が、如何にして英國の上下を震驚せしむる底の大渦卷の中心となり得た乎、是大いに吾人の考究を要する點である。英國の政治家は此原因の探究穿鑿に腐心した結果、ベンゴール暴風の第一原因は教育の普及智識の增進にありと云ふ結論に到達した。誰が何と云つても、現今印度各州の腦髓となれるものはベンゴール州である。かくベンゴール州民が僅の時間の間に、一躍して印度の首腦となり得たのは、民族の頭腦が遺傳的に明敏なりしにもよらうけれども、英國が印度の首府をカルカッタに置き、最も早く大學を立てたと云ふ事實が、ベンゴール州の教育普及に與つて力あることは否まれまい。先代タゴール氏は一箇年に三千五百圓の利子の上がる數萬圓の金を

大學に寄附し、其利息全部を講師一人の報酬に充て、毎年拔群の法學者を選んで十二回の講義をなさしむべく、タゴール法學講座なるものを大學に開かしめた。プレミチャンドラ氏も亦同額の金を大學に寄附して、毎年各分科大學卒業生に競爭試驗を課し、一番の成績を擧げ得たものに三千五百圓の奬學金を與ふることにした。其の他大學在學中の學生に與ふる奬學金の寄附者が澤山出來たため、一二三番まで位の學生は毎月の學費を差し引いても大分あまる程の奬學金が貰へるやうになつて居る。隨つて學生の勉强心が仲々向上して來た。人智の開發するのも決して無理はない。

かくて印度政廳は一番御し易かつたベンゴール人が、今や却て一番御し難くなつた。玆に於いて明治四十四年の秋、英國皇帝の印度帝國戴冠式に臨御を好機として突然皇帝の口を借り、カルカッタからデリーへ遷都の詔を下さしめた。政府側に於ける遷都の口實は種々あるけれども、遷都斷行の最大動機はベ

ンゴール州民の勢力を殺ぐためである。これと同時に印度政廳の文部省では、寄宿制大學創設の急務を名として、東部ベンゴールのダッカ市に一の大學を建つる議案を通過せしめた。こは即ちカルカッタ大學の勢力を殺ぐための妙策苦心案なのだ。兎に角ベンゴール人は初めは處女の如く、終りは脫兎の如き勢ひを現して來た。而して印度の不穩の大旋風を捲き起した。敎育の力、智識の力、時勢の力と云ふものは偉いものである。

大なる疑問

一時凄じい勢ひを以て印度全土を席捲した不穩の旋風も、千九百十年頃から餘程穩かになつて居る。が、此の平靜は印度社會の根柢から、實際に平和從順の狀態に歸復せることを物語るものであらうか？。モーレー卿やミントー伯の自由黨的思想によりて立案された讓步と壓迫の混合政略は、眞個に印度の國事犯的謀叛者の氣勢を取り鎭め得たのであらうか？、英領印度の大火事は、現總督

ハーディン卿の機略縱横なる消防力によりて、火元から消し盡されるであらうか？、蓋しこれ大なる疑問である。吾人は此の疑問に解答し得るとは言はない。が、印度の現狀を諸方面から觀察し叙述して見やう。若し夫れ印度の將來を讀破するの一事に到つては、讀者諸君の明敏なる頭腦の判斷に任せたいと思ふ。

四　印度の教育

教育機關

印度の教育機關は極めて變則である。即ち高等教育の機關は比較的に完備せるに反し、普通教育のそれは極めて不完全である。換言せば印度には官立の立派な大學が五個あるが、小學校は丸で寺小屋式で殆ど學校の體裁を備へて居ない。尤も大學と云つても日本の大學のやうに獨逸式に則れる者でなく、英國式の大學であるから、コレーヂなるものは所々方々に散在して居る。例せばカルカッタ大學と云つても、夫れに屬するコレーヂは必ずしもカルカッタにのみ在ると定つては居ない。又官立のコレーヂ丈しかカルカッタ大學の管轄内に入れぬかと云ふに決してさうでない。矢張り私立のコレーヂも一大學の管轄に屬し入學試驗も進級試驗も卒業試驗もコレーヂに於て行はず、皆大學のセネート・ホ

ウスで行ふのである。而して我國の所謂中等教育も矢張り諸所に散在するコレーヂで施して居る。

然るに印度には小學校らしい小學校は十指を以て數へる丈しかない。而も其の立派な小學校の月謝は、五六圓の高額であるから、貧乏人の子弟は縱令カルカッタのやうな立派な小學校のある都會に居ても、迚も入學せしむることは出來ない。

又印度には義務教育の制度が設けてない。印度政廳の立法府民選議員の一人たるゴークレー氏の如きは、五六年前から議會の開會毎に、毎年々々義務教育實施法律案なるものを提出さるゝけれども、今に通過しないらしい。勿論議場に於ける議論では常に民選議員の方が勝つて居るが、いざ採決となると常に無言實行？官選議員の方が勝つのである。民選議員は頭腦に於て優れて居ても、官選議員よりも頭數が少いから敗れるのは當然だ。蓋し是れ屬國の屬國たる所

以でであらう。

然し英國が印度に布いて居る教育制度は、殖民政策上餘程考究の餘地があるやうに思はれる。即ち大學制度を美にし小學制度を不備にして居る英國の遣り方は必ずしも成功とは云へまい。されば英領印度の教育制度を移し來つて朝鮮の教育制度に適用するが如きは餘程考へものだ。

街燈の下で讀書

印度全體を通じて概論すれば、自ら手紙を書き返事を讀むことの能きるものは千人につき五十九人しか居ない。然し乍ら自ら文字は書けないでも印刷した書籍の讀めるものはもつと澤山居る。と云へば印度の事情に通せない人には妙に聽えるだらうが、事實さうだから仕方がない。この書物は讀めても文字は書けないと云ふ妙な現象は、印度社會の宗教的信仰の上から生み出されたものである。我が日本にも之と同樣な現象がないでもない。即ち佛教信者の中には御

經は讀めても文字は書けない人は隨分あるやうだ。

印度で最も勢力ある宗教は印度教と回々教である。此の二大宗教徒は各立派な聖典を有つて居る。即ち前者は世尊歌を初めとし、二大叙事詩マハーバーラタ及びラーマーヤナを通俗の聖典とし、後者はコーランを聖書として居る。然り而して印度教徒はマハーバーラタやラーマーヤナを讀誦するを以て大なる功德ありと信ずるのみならず、聖典の讀誦を聽聞してすら大變な御利益があると信じて居る。之と同樣に回教徒も亦コーランを讀誦し聽聞するを以て大なる功德ありと信じて居る。此故に印度には書籍は讀めても文字は書けない人間が少なくない。予は屢〻印度人のボーイが書籍の讀めない仲間に對して、街燈の下に——貧乏だから油が買へない爲め——趺坐をかき、繪に書いたやうな美しい聲で、ラーマーヤナを讀んで聽かせて居る活畫を見て、印度は流石に古い國だ、詩的な國だと感じたことがある。

兩性と教育

我輩は前に印度には千人につき五十九人しか讀み書きの能きる人間は居ないと云つたが、之を男女兩性に割り當つれば、男子は百六人女子は僅に十人となる。換言せば多少文字ある女子は、男子十人につき一人弱しかない。更に之を年齢の點より觀察するに、十五歲以下の兒童を省き、讀み書きの能る男子は千人につき百四十九人、女子は十三人の割り合ひとなる。而して更に之が細別を見るに、女子の方では十五歲より二十歲までのものが千人につき二十一人、二十歲以上のものが十二人、男子の方では十歲以下のものが千人につき十二人、十歲より十五歲までのものが九十五人、十五歲より二十歲までのものが百四十四人、二十歲以上のものか百五十九人と云ふ割り合ひである。

近代になつてから、印度社會の教育は大分普及しつゝある傾向を示して居るけれども、男女兩性間の差等が餘りに大なることに注意せねばならぬ。這は確に

印度人の女子に對する觀念が、極めて頑冥固陋なるに歸因して居る。西洋では女子教育が普及し進歩し過ぎて、脱線的婦女子の多きに苦しみ、印度や支那では女子教育がゼロなため、引き込み思案的の婦女子の多きに困つて居る。女子教育と云ふことは永久に一個のスフィンクスとして經世家の頭腦を惱ます問題かも知れぬ。

英領と藩王國

更に之を英領印度と、印度の諸地方に散在する藩王國に於ける教育普及の程度を比較して見るに、英領の社會が藩王國の社會よりも遙に進んで居るやうである。されど這は當路者の教育に熱心不熱心を定むる標準ともならねば、人民の教育觀を定むる輕重の標準とする譯にも行かぬ。何となれば所謂英領印度の地は地味概ね肥え地勢も概ねよいけれども、諸藩王國は比較的に地味概ね瘦せ地勢も亦隨つて惡いからである。早い話が英國は地味地勢のよい所を選び取つて

惡い所だけを藩王に與て居るのだ。

諸藩王國の中でもコーチン(Cochin)王國だのトラヴァンコール(Travancore)だのバロダ(Baroda)王國などは、有教育者の割合が英領印度を凌駕して居る。特に女子教育普及の程度に於て、印度國中第一位を占めて居るのはコーチンである。而して教育普及の度の最も低い地方は、カシュミール(Kashmire)である。同地方には千人に付讀み書きの能きるものが兩性合して十二人しか居ない。之に反して讀み書きの能きる人間の最も多い地方はバアマ(Burma)である。蓋しバアマは純粹の佛教國にして、男子でも女子でも自由に教育を受くることが能きるし、男女七歳にして席を同じうせずと云ふが如き馬鹿氣た習慣も有たないからである。勿論バアマと雖も我國のやうに立派に完備した小學校がある譯ではない。學校の大多數は寺小屋式で、お寺の和尚さんが先生である。そしてバアマには一の大學もないから文字ある人民の多い割合に、正式の大學

教育や中等教育を受けたものは極めて少い。數年前からバアマ大學建設の運動は起つて居るが、何時ものになるやら分らない。加之バアマ人の頭腦と純印度人の頭腦とを比較考量するに何うも前者は深い學問などを研究するに適する頭腦を有つて居ない樣だ。之を要するに英領印度は諸藩王國よりも概して人智が發達し教育が普及して居るのは事實だ。

地勢と教育

地勢の上から教育普及の程度を判ずるに、印度大陸中南方の印度洋へ臨める海岸地方は、中部及び雪山山麓地方よりも遙に進んで居る。即ち前者の地方には讀み書きの能きるものが千人につき百十二人乃至二百四十八人の割合なるに反し、後者の地方には六十一人乃至八十五人しか居ない。而して海岸地方に於いては原始印度人たるドラヴィダ人種（Dravidian）と蒙古人種の勢力が強く、中部及び山麓地方にありてはアールヤ（Ârya）人種の勢力が強い。

歷史の教ふる所によれば、所謂印度文明の建設者はドラヴィダ人種でもなく蒙古人種でもなくアールヤ人種である。此故に昔の歷史から云へばドラヴィダ人種や蒙古人種の勢力ある地方よりも、アールヤ人種の勢力ある地方が教育が普及して居なければならぬ筈だが、事實は全く其逆を物語つて居るのは何故だらうか？今その理由を考察するに大要左の如き因緣がある。

古代の印度文明は主として恆河河畔に沿ふて出來たものだが、所謂印度の闇黑時代を通過せし後の近代文明は、主として海岸に沿ふて打ち建てられつゝある。換言せば古代文明の形成者たる太古のアールヤ人種も中世の回教徒も、印度の西北國境の方から侵入し來りしに反し、印度近代文明の主動者たる歐洲人特に英人は南方の海岸地方から侵入したものである。尙ほ之を言へば海岸地方に屬するベンゴール（Bengal）州やマドラス（Madras）州や孟買（Bombay）州は中部及び山麓地方よりも、海陸交通の便利もよく、又その機關も早く備はり、

隨つて外國人と接觸する機會も多く刺戟も烈しいから人文も進み敎育も普及するのである。

又印度近代の都會と上古及び中古の都會の所在地を一瞥するに、王舍城でもパータリプットラ（現名パトナ）でも、ワラナシー（現名ベナレス）でも、デリーでも昔の大都會は皆悉く中部若くは山麓地方の恆河河畔に沿ふて建てられて居るが、カルカッタ市でもマドラス市でもボンベイ市でも印度近代の大都會は皆悉く海岸地方に建てられて居る。隨つて大都會及び其の附近が人智も進み敎育も普及すべきは理の當に然るべき所である。

之を要するに印度の文明は、其の太古なると近代なるとを問はず、孰れも水に關係せる點は同一なれども、一は中部及び山麓地方の恆河河畔に於て開け、他は南方の海岸地方に於て開けた點が異つて居る。水と文明とは切つても切れぬ親類緣者なりとは古い眞理と見える。然し今や英領印度の首府は海岸地方の

カルカッタ市より、昔の昔大昔の帝都なりしデリー市に遷されたから、今後數十年の間には印度の中部地方も敎育が普及して面目を一新するに相違ない。然り而してデリー市を中心として印度の中部地方及び山麓地方の人智が開くれば、英領印度政廳はベンゴール州のカルカッタ市から逃げ出したやうに、又ぞろ何處かへ逃げ出さねばなるまい。此の次はアフガニスタン（Afgnuistan）か中央亞細亞に遷すがよい。斯くて印度大陸は英國の御蔭で敎育が普及し再び印度文明の花を咲かすことが出來るかも知れぬ。

宗敎と敎育

宗敎と敎育との交渉關係及び宗敎的敎育を如何に取り扱ふべきかは、久しき以前より印度の統治上英國政客の頭腦を惱ましつゝある問題である。蓋し印度の社會は昔より今に到るまで、學問、政治、商業、農業其他百般の日常生活が皆宗敎的信仰と相關係せないものはないからである。されど今は此の問題を

論議すべき場合でないから、今日の印度に於ける各宗教の信徒間に如何なる割合を以て教育が普及して居るかの事實を一瞥するに止めやう。

今日の印度には種々様々の宗教や宗派があつて隨分入り亂れて居るが、思想系統の上から要約すれば、印度教、回々教、拜火教、耆那教、佛教、基督教及びシーク教の七宗教に分類することが出來る、然り而して是等諸宗教の信徒の社會を、教育普及の程度の高下に隨つて排列すれば、第一拜火教徒、第二耆那教徒、第三佛教徒、第四基督教徒、第五シーク教徒、第六印度教徒、第七回教徒と云ふ順序になる。

第一拜火教徒と云ふのは昔の波斯人のことである。彼等はアラビヤの回教徒が右に劒を提げ左にコーランを携へ、命が惜いか信仰が惜いか、若しコーランの信者とならぬならば殺すぞと云ふ亂暴な權幕で彼斯に侵入した時、國を棄て財産を棄てゝ印度に移住し、昔ながらの信仰と習慣とを持續しつゝある民族で

ある。斯て彼等はパーシーと云ふ特殊の社會を形成し、專ら商業に從事し先天的なる商業の民として天下に信用を博して居る。此パーシー即ち拜火教徒は孟買市に於ける經濟界の重鎮と云つても過言ではない。吾人がパーシーの社會を見て感心に堪へない現象は、彼等の仲間中から一人の乞食、無職業者、娼婦及び鰥寡孤獨の徒輩をも出さぬことである。彼等は官憲の力や他の宗教信者の御世話をからずに、養老院、感化院、授産場、孤兒院及び病院等を建設し、以て自らの社會から無賴漢、娼婦、乞食の類を一人と雖も天下に放浪せしめないやうに仕組んで居る。

印度には到る處に癩病患者が路傍に匍匐して居る。併しその中にパーシーは一人も居ない。印度には澤山の鰥寡孤獨が或は乞食となり又は無賴漢となつて天下を放浪して居る。併しパーシーは其中に一人も居ない。又印度には上中下の娼婦が到る處に巣をなして居る、併しパーシーは其の中に一人も

居ない。世界廣しと雖も斯の如き立派な社會を形成せるものは恐らくはパーシーの外には一もあるまい。教育の普及する豈怪しむに足らんやだ！、統計表によれば讀み書の能きるものは一千人につき男子七百八九十人、女子六百四十人の割合を示して居る。之をパーシー社會全體の上から見れば無教育者は男子は五分の一弱、女子は三分の一強である。

第二の耆那教徒は主として貿易の業に從事して居る。これ亦印度の經濟界に大なる勢力を有する宗教社會である。されど教育普及の程度はパーシー社會より遙に劣つて居る。即ち讀み書きの能きるパーシー五人に對して耆那教徒は二人半弱しか居ない割合である。

第三の佛教徒間に於ける教育普及の程度は耆那教徒と殆ど伯仲の間にある。即ち讀み書きの能きる男子は千人につき四百人強、女子は五十人と云ふ割合である。

第四の基督教徒社會は歐洲人、合の子及び印度人等よりなつて居る。而して印度政廳の一番統御に窮して居るのは、合の子の基督教徒である。彼等は國家だの國民だのと云ふ觀念は丸で有て居ない。其の名の示すが如く中ブラリンである。今この基督教徒間に於ける教育普及の割合を見るに、千人につき男子二百八十人、女子百四十人の比例を示して居る。

第五のシーク教は印度教と回々教から派生した宗教である。謂はゞ女性的平和的なる印度教に加ふるに、軍國的男性的なる回々教の分子を以てしたやうな宗旨である。隨つて此教徒は印度社會で最も勇敢獰猛なるがために印度政廳も其統御に餘程手古摺て居る。今此社會に於ける教育普及の程度を見るに、讀み書きの能きるものが千人につき男子百十人、女子二十人の比例を示して居る。

第六の印度教徒は所謂印度生民の最大多數即ち約七割を占めて居るが、教育は極めて普及して居ない。即ち千人につき文字ある男子が百八九名、女子十五

名の割合を示して居る。最後に第七の回々教徒の社會を見るに讀み書きの能きるものが千人につき男子七十人、女子七八人の割合となつて居る。

英語の知識

日本人の多くは印度の何處に往つても英語さへ話せれば、十分に旅行も出來また要事も足せると思つて居られるやうだ。我輩も亦自ら印度に入るまではさう考へて居た。所が事實は全く豫想に反しカルカッタの如き大都會に於てゞすら、英語だけでは生活が出來ない。或日予は大學からの歸途、何氣なく電車に飛乘つて、書籍を讀んで居たら、まだ見たことのない場所に連れ行かれつゝあるに氣附き、早速飛び降りて査公に道を聽いたら先生は全く英語を解せない樣だつた。後でよく調べたら印度人の巡査は全く英語を知らないことが分つた。巡査既に然り況やボーイに於てをや料理人に於てをや便所掃除人に於てをや。

印度の生民大約三億一千五百萬の中、英語の知識ある者は、僅に一千七百萬

人ばかりしか居ない。即ち一萬人中男子は九十五人女子は十人しか英語の知識は有て居ない。以て英語普及の速度の如何に遲々たるかを知るに足るだらう。されば印度相手に一仕事しやうと思ふ者は先づ須く印度のエスペラントたるヒンヅスターニー語を習ふべしだ。然らずんば迚も目醒しい活動は出來ない。

大學卒業生の傾向

印度の五大學に學べるものは大概屈指の財產家の子弟である。然り財產家にあらざれば月謝が高いから大學教育を受けさせることは能きないのだ。然らば卒業生の多くは如何なる方面に向ひつゝあるか、曰く文理法科などを出た者は官吏、辯護士、會社員となるのが多い。然し印度では文科の卒業生が法科に學び、理科を出た者が文科に入り、法科を卒へて更に理科を學び、一人で二つの肩書をもてる者又もたんとする者も決して少くない。これ等がバンの問題に困らないせいでもあらうが、其の究理心に富める點も買つてやらねばなるまい。

優等の成績で大學を出たものは大概英國に留學を命ぜられるが、其選に漏れても將來見込のあるものは、私立の學會や地方の協會から、米獨佛日の諸國へ留學せしめられて居る。而して此等の諸國に留學するものゝ選擇する學科は、大概工科にあらざれば農科である。蓋し印度の五大學には工科も農科も碌なものはない。否其の設備をしないのが、印度官憲の不文律となつて居るからである。今其理由を考ふるに、若し印度に立派に完備した工科や農科が出來れば、英本國の經濟界に一大打擊となるのだ。看よ印度は英國商工業者の一大華客ではないか。而して彼等が製作品の原料は多く印度に仰いで居る。換言せば半開國から原料を安く仕入れて精製品を高く賣り附けるのが近代文明國の特色である。若し印度に立派な工科や農科の大學が出來たら、印度人は數年を出ずして自らの原料で自ら精製し他國の製品を購ふ必要がなくなる。これ即ち彼の國の工科と農科とに大學らしいものを完備せしめない理由である。然し印度人も

根からの馬鹿でない、馬鹿でないから米國や日本に留學して工科若くは農科の大學に入り、盛んに研究して國に歸り、母國の爲めに活動を試み又は試みんとしつゝある。但し英國へ留學せしものゝ外は大概官憲に奉職はしない。又其筋から採用もされない。此を以て日米兩國へ留學せしものゝ多くは私立の會社に入るか、若くは自ら新に會社を建てゝ經營せんとする傾向を示して居る。

日本と印度留學生

我が國にも先年までは六七十名の印度留學生が居たやうであつたが、今日ではその半數も居ないらしい。彼等の多くは日本は恰も理想的の天地なるかの如く想像し、日本人は非常に印度人に對して親切である、賴みとすべき國民であると信じて、印度からはる〳〵遣つて來たのだ。所が事實は案外にも豫想を去ること頗る遠く、日本人は彼等に對して左程親切でない。下宿屋と云へば羊頭を掲げて狗肉を賣る底のものが多い。加之日本の家には防寒の設備が殆ど整

つて居ない。大量大膽なるべしと信せし日本人は極めて小量小膽である。彼等の大量は強いものを容れる大量である、彼等の大膽は弱いもの虐めの大膽である。東洋の指導者たらんには彼等は餘りにその日暮しの無理想なる國民であるなどと日本人の短所缺點が見えすいたものだから、日本を棄てゝ亞米利加に走るやうになつたのである。加之彼等は日本を以て世界最強の佛敎國なりと信じて渡來した。隨つて日本に行けば、暖かなる活き〳〵した佛陀の慈懷にすがることが出來ると思つて居たのである。然るにこの豫想も全く外れて了つた。即ち佛敎僧侶の多くは葬式法事の問屋を專業として居る。佛陀の敎を說くべき神聖の殿堂は多く素人下宿屋となり貸間となつて居る。賴るべき敎會もなければ、宿るべき青年會館もないのを見て、ウンザリせざるを得なくなつたのである。印度人は先天的に宗敎的の國民であるから、宗敎の方面から慰安を與へゝコンファタブルに留學して居れるやうな設備をしてやれば、他の不自由は少々我

慢して、ドシ〳〵日本に留學するやうになる。蓋し之れ日印貿易の健全なる發展を計る最大良策にして、又日印兩國民の相互の眞精神を了解する最善の機關ではあるまいか。

五　印度人の思想生活

自然界と思想

印度思想の特徴は、一言に云へば極端性を帶びて居ることである。自ら印度に住ふて、靜かに印度社會の各方面に眼を注げば、彼等の思想生活が總ての階級を通じて極端に走せて居ることを看取せずには居られない。然らば印度人の極端性は如何にして發生せしものなるか、曰く印度の自然界が生民の思想行動をして極端に導けるものと想はれる。換言せば印度の天然それ自身が大なる極端性を帶びて居て、國民の思想に影響し遂に彼等が日常の生活をも極端性を帶ばしむるに到れるものと想はれる。

試みに印度の地勢を大觀せんか、北は萬年不消の皚々たる雪を戴けるヒマラヤ山脈を以て圍まれ、南は渺茫たる印度洋に面して世界第一のデルタ（三角洲）

を形成し、有名なる恆河の流域は一面廣漠として際涯なき平野をなして居る。從つて人間の眼を喜ばしめ、心を外界に向はしむるに足る山光水色の景が極めて單調である。凡そ人間は眼を外界に放たざれば、自然に內界に向はしめざるを得ぬものらしい。即ち客觀界に何等人間の注意を惹くに足る山光水色などの眺めがなければ、不知不識の間に主觀世界の風光を眺めたくなるものらしい。今それ印度の地勢は日本や希臘などのそれと異なり、時に應じ處に應じて人目を樂しましむるには餘りに漠々たる平野である。此に於てか印度人の注意力は外に向はずして內に向つた。內に向つた彼等の眼は先づ我なるものゝ正體を見出さんと考へ始めた。即ち「我とは何ぞや」？「自我本來の面目」は如何と云ふ問題を參究するに到つたのである。

我とは何ぞや

印度人は「我を知るものは神を知る、未だ我を知らずして神を知らんとする

は恰も靴を穿き乍ら痒をかゝんとするの愚物だ」と考へた。斯くて彼等は「我の正體と神のそれとは本來同一のものなり」と云ふ結論に到達したのである。五尺か六尺に足らぬこの個體だけが眞個に我なりとせば、我は極めて弱小なるものである、憐れなものである。又五十年か七十年の年限だけしか生きて居れないこの個體壽命を眞個の我の生命なりとせば、我は實に果敢なきものである。少水の魚の如く何の樂みもないものである。然し乍ら神人同體又は神人合一或は神より出でゝ神に歸するのが、我の眞面目なりと信ずる印度人は、五尺か六尺に足らぬこの個體だけでは眞の我でない、五十年か七十年長くて百年の短時間しか生きて居れぬこの個體の壽命のみが「眞我」の年齢ではないと考へた。

南無阿彌陀佛

我は當然神と融合すべき運命を有つて居るものであると云ふ結論の中には、「我は神と等しく、時間的にも空間的にも無量無邊である。」と云ふ意味を含んで

居る。即ち眞個の我——又は絶對我と云つてもよい——は五十年だの七十年だの、或は五尺だの六尺だのと限られたものではなく、無邊の廣さと無限の長さとを有つて居るものである。少くとも人間は斯の如き廣大無邊な信仰の上に確立して、初めて驚天動地の大活動大事業が出來るものである。南無阿彌陀佛即ち無量壽の如來に歸命すると云ふ信念は、眞我又は絶對我の觀念に立脚せる印度社會に相應しき產物である。然り！斯く廣大なる觀念絶大なる信念が、滿目渺茫たる印度大陸に發生したのは毫も怪しむに足らない。否！印度大陸の如き廣大の自然を有する地にして、初めて斯くも高大なる思想を生み出し得るものかも知れぬ。

非歷史的

自然の人心に及ぼせる影響をこの邊で喰ひ止め得たら、印度人は實に今尙世界の最大文明國民として、覇を唱へて居たゞらうに、可惜乎、彼等は尙一層の

極端まで走り過ぎたのである。如何なる風に極端に走つたかと云ふに、無邊の空間と無限の時間とを占有するもの之れ即ち我の正體である。我は已に無限の年齢を有す、何の必要あつてか、煩はしくも五十歳になつた七十歳になつたと指折り數ふるの愚を學ばんやと云ふ考へから、遂に個人各自の年齢に無頓着になつた。而して彼等は、個人の歴史たる年齢に無頓着になりしと同一の筆法で、國家の年齢たる歴史にも無頓着になつたのである。印度の非歴史國たることは有名な事實だが、其根源は矢張り自然界からの影響らしい。即ち印度社會の餘りに大陸的氣分に充ち滿たされ、廣大無邊と云ふ極端の一方に偏せるが爲め、之を小にしては個人の年齢を忘れ、之を大にしては國家の歴史をも忘るゝに到つたものらしい。

然り而して何事に限らず、物は總て極端の一方に走れば必ず弊害百出するものである。今それ印度人は釋尊の力説し給ひし「中道の敎」を打ち忘れて、極端

から極端へ走り遂に自分の國家をも亡ふに到つたのだ！所謂極樂を通り過して地獄の苦痛を嘗めつゝあるのが今日の印度人である。

火から水へ

此の外自然現象の一なる印度の氣候も亦印度人の思想行動をして極端に走らしむる仲介となつたらしい。一體印度の氣候は嚴密に云へば冷期、暑期、濕期の三期に分たるゝけれども、人類社會の思想上に及ぼす自然の影響と云ふ方面より觀察すれば、乾燥期と濕雨期との二期に分つ方が妥當らしく思はれる。

乾燥期は毎年十月より翌年の五月に至る七箇月乃至八箇月の間である。この間印度は雨と云ふ雨は一滴も降らないのが原則で、若し降つたらそはお天道樣の間違ひである。その内最も烈しい乾燥期は二月頃から四五月のムーン・スーンの始まる頃までゝある。この期間に於いては日本製の安物の漆器などはタツタ一夏で禿げつちよろになつて了う。又人間の咽喉も乾いて往々咽喉を害する

人もある。そしてこの盛暑期に於ける室内の熱度は――地方によりて大なる相違はあるけれども――今の首府のデリー市や、元の首府のカルカッタあたりで、九十七八度乃至百三四度位のものだ。若夫れ屋外の熱は百二十度以上であるから、早い話が火事場に居ると思へば大なる間違ひはない。處が五月の下旬又は六月の上旬には彼の有名なムーン・スーンがやつて來る、即ち雨期に入るのである。されど印度のは雨期と云つても、我が國の梅雨の如く、細雨霏々たるケチな女性的の雨ではない。豪雨盆を覆す底の男性的の大驟雨である。

「大雨車軸を流す」など云ふ類の形容語を、日本の雨のやうなシミッタレたものに適用するのは勿體ない。斯の如き大驟雨が降れば、今まで乾き切つて居た大氣が忽ちにして濕めり切つて了うのである。而して六七八九の四箇月間は毎日々々斯る大驟雨が二回も三回もやつて來ると思つて居らねばならぬ。兎に角昨日迄はカラ〳〵に乾き切つて居た天地が、今日はあべこべに何でも彼でも

――油斷してると人間の心までも――濕めり切つて了う。換言せば火の天地が忽然として水の天地となるのだ！火から水への氣候を極端から極端への氣候と云はずんば、天下に極端から極端へ移り行くと評すべき氣候はあるまい。この火から水への印度の自然現象も亦その生民の思想行動をして極端から極端へ走らしむる傾向の案内者となつたものではあるまいか。

暮の内の寢臺

前述の如く乾燥期には人間の咽喉まで乾く位だから、假令室内の熱が百度以上に昇つても發汗を感ずることはない。否！出る汗は人間が感ぜない内に片ッ端から蒸發して了うのである。斯く乾燥が烈しいから、夜になつても露氣などは少しもない。隨つて窓は開けつぱなしにして寢ても、毫も健康を害するが如き憂ひはない。カルカッタ市のやうな恆河流域の下國で、土地の低い地方では下級の印度人は、乾燥期中、毎晩々々寢臺を屋外に持ち出して寢て居る。若し

夫れ恆河流域の上國、即ちアップ・カントリーの住民に到つては、白人も黄人も紳士も淑女も、乾燥期中の盛夏の夜を家の中に寢て暮すものはない。むさ苦しい室内に寢るよりも、露なき空の星月夜を仰いで寢る方が、寧ろ心地よくて衛生的である。

試みに印度の上國に往つて見給へ！家の周圍の廣々しい大庭の青々たる芝原に、野酒しの寢臺が幾つも据ゑられて居る所もあれば、四方に幕を張つて其中に寢臺を据ゑてる家もある。彼の寢臺をムキ出しにし裸體にせるは獨身ものゝ寢る處にして、幕の内のそれは兩姓二人ものゝ寢る處である。

交際期節

五月下旬乃至六月上旬以後の雨期中は、假令太陽が照り輝いて居ても、外出するには必らず雨具を携帶せねばならぬ。雨具と云つても洋傘や傘を携帶するのぢやない、雨合羽一枚を手にし當期用の帽子を冠つて居ればいゝのだ。又

如何に盛夏の候と雖も紳士たるべきものは決して洋傘をさゝぬのが印度に於ける英國流のハイカラださうな。若し紳士が洋傘でもさして居たら、佛蘭西人見たやうだの、ボーイのやうだのと笑はれる。されば印度では洋服を着る紳士には三百六十五日洋傘の必要はない。然るに乾燥期中には假令天が曇つて居ても、決して雨具携帶の必要はない。即ち十月から翌年の四五月までは雨具いらずの時期である。此故に上は印度總督の園遊會より、下は小學校の運動會に到るまで、凡て多人數の集る儀式や結婚式などは、必ず此乾燥期中の比較的に涼しい十一月の中旬より翌年の二月中旬頃までの間に催さるゝ。隨つて印度の園遊會や運動會の案内狀に雨天順延の但書を見たことはない。この期間を稱して印度では交際期節と云つて居る。

兎に角印度の氣候が極端から極端へ代り行くが如く、印度人の思想生活も極端と極端とに分れて居る。

兩極端の思想

佛教の盛んなりし印度の黄金時代を過ぎて、第八世紀頃からの印度思想界は火と水との如く、極端の一方に走せ初めたが、第十二三世紀頃には全く行きづまり、所謂印度の闇黒時代を現出し、新進氣鋭の回教徒によりて一旦モーガル朝廷が建設されたけれども、之も亦一方の極端に走て腐敗墮落し、遂に英國人の乘ずる所となり、以て今日に到つたのである。心ある者は餘り深く考へないでも分る筈だが、印度の思想界には一方に極端な嚴肅主義、禁慾主義を提唱し實行するものがあるかと思へば、他方には極端な快樂主義、肉慾主義に耽溺するものがある。一方に惡平等の大慈悲を實行するものがあるかと見れば、他方に我利々々の個人主義を實行する者がある。然り而して釋迦牟尼其他の聖哲によりて力說された穩健中正の道は殆ど忘れられて了つて居ると云つてよい。斯の如く天下滔々として火にあらざれば水、水にあらざれば火と云ふ風に兩極端

の思想に分れて、亡國の慘狀を現出したのである。

苦行者の眞狀

印度には今尙ほ色々樣々の苦行をする者が居る。或は片腕を頭上に伸したまま直立し從晝至夜身動きもせざるもの、板張りの寢臺見た樣なものに數多の長釘を逆に打ちつけて其の上に坐臥せるもの、恆河の水中に終日つかり頸から上だけ出して身心の淨化を信ずるもの、或は我が國の花嫁の簪をさせるが如く左右の頰から頰へ數多の竹釘見た樣なものを刺し透せるもの、赤裸々になりて總身に灰を塗り、人間だか化者だか區別のつかぬやうな、人三化七の風をなせるもの、一箇月でも二箇月でも斷食して水ばかり呑んで生きて居るもの、兩足を縛して木の枝から逆にぶら下れるもの、其の他種々の苦行を營んで昇天の功德を得んと願へるもの殆ど擧げされない程である。一體全體禁慾苦行は元來人間の獸慾を抑制して、完全圓滿な人格とならんとするのが目的であつたのだ。

即ち克己的精神の鍛錬の爲め、若くは意志を強くする爲めの禁慾であり苦行であつた。然るに後世の印度社會はその大目的を忘却して野蠻とも迷信とも名づけやうのない風をなし、苦行そのものを大なる目的なりと考へ愈々益々極端から極端へ走つて了つたのである。

肉慾充足派

上述の如く一方には禁慾苦行の極端派があると同時に、他方には天下無類の極端なる肉慾派がある。此派の御開山をチャールワーカ（Chârvâka）と云ふ、今彼の提唱する所を約説せば、

「天上世界もなければ究竟の解脱もない。靈魂もなければ靈魂の行くべき他界もない。又四姓階級の區別に何等の權威もなければ人類の行爲に對する何等の應報もない。若し供養の食物が亡靈餓鬼の空腹を滿す力ありとせば、人は何故に旅行するに當り辨當携帶の必要があるか？その妻は居なが

ら蔭膳して良人の空腹を滿たし得べきではないか？若し地上に於て供へられた食物が、天國に住める人々の空腹を癒す力ありとせば、階下に併べられた御馳走は、何故に二階に居る人々の空腹を滿さないだらうか？天國だの地獄だの餓鬼だの亡靈だのと云ふが如き不可思議なものゝあるべき筈はない。されば諸人よ、生命のある間に、成るべく放縱逸樂を極めて暮せ、もてる丈の友達から出來る丈多くの金を借り倒して、一年三百六十五日醍醐味を喰べて暮せ、此身一度死すれば土となり塵となる。如何ぞ再び世界を訪づれて快樂に耽り得むや。山海の珍味をならべて死者の亡靈を供養するが如きは、ズルい祭司僧侶等の活計を資くる爲に過ない」云々と。

この派が印度從來の迷信の源たる生物供犧の無意義不法を罵り、極力に階級制度の亂暴を斥けし點は、印度社會の宗教心を向上せしむる上に甚だ効果ありしに相違ない。されど性慾感情の欲するがまゝに動け、人から金を借倒し

ても美味いものを喰へ、死んで了へば借りたるものも、貸したるものも同じく土芥に歸して了うものぞ。飲んで喰うて巫山戯て暮せ。放縱に暮せば暮した丈が儲けものだ。逸樂に耽れば耽つた丈が勝利だなどゝ云ふに到つては、人類の道德を破壞し、社會の秩序を紊すこと之に過ぎたるはあるまい。實に極端な肉慾主義、人獸主義と評すべきである。この派は哲學の一派としては遠の昔に亡くなつて了つた。然り學派としては亡びたけれども、この派の敎義を家庭及び社會に於て忠實に實行して居るものは今尙決して少くない。印度の王族とか大名とか富豪とか云ふ連中の十中の八九は、皆この派の熱心な信徒だと云つてよい。彼等の家庭は眞に云ふに忍びない程腐敗して居る。彼等はヒューマン・アニマル(Human animal)の醜態を暴露して平氣で居る。その好標本を具體的に現せるものは印度のデリー(Delhi)市に於けるモーガル王朝の宮殿中の湯殿である。吾人は彼の湯殿を一見して、モーガル王朝の宮中生活が、如何に腐敗墮落の極

に達して居たかを想像し得るのである。吾人は腐敗醜行の生活狀態を云ひ表はす形容詞の有りつ丈を盡しても、到底デリー宮殿中の湯殿一つをも形容し盡くすことは出來ない。

半獸主義全印度を風靡す

上の好む所下これに習ふは世の常の人情である。富貴尊榮を以て天下にときめきし印度のモーガル帝國は、上は宮中より下は庶民に至る迄國を擧げて極端なる肉慾主義、人獸主義、半獸主義の熱心なる信徒となり了りしが爲、國家は終に顚覆し他國民の喰ひ物となつて了つたのである。苟も誠心誠意、國家の隆盛國民の健全なる發展を謀らんとならば、位階勳等の高きを以て他を威嚇せず、又金力のあるに任せて放縱逸樂の半獸主義に陷らざらんことを念とせねばならぬ。曾に國家のみではない、一家庭一個人と雖も亦然りである。

印度佛教のお代り

順世派とはその趣を異にして居るが、而も竊に醜行を逞しうして、表面には全く知らぬ顔して居る宗派がある。その宗名をシャクティ（Sakti）宗又はタントラ（Tantra）宗と云ふ。此宗派は西暦第十世紀前後頃、佛教が印度社會に忘れられた後を受けて、印度社會の人心を支配し統率し初めた宗教である。

この宗旨は印度教中の眞言秘密の教にして、そが最も隆盛を極めしは、所謂印度の闇黒時代であつた。佛教の中にも秘密教即ち眞言宗なるものがあり、印度教の中にも矢張り秘密教がある。想ふに兩教中の秘密教即ち眞言宗なるものは、印度に於て婆羅門教と佛教とが、互に相競爭し抵抗し論爭しつゝありし千數百年の間に、兩者とも知らず識らず、互に接觸し發展し野合せし結果の產物たるに相違ない。此を以て日本佛教中に於てこそ、眞言宗は最も古い宗派の一に數へらるゝけれども、印度にありては最後の佛教即ち最新の佛教であつた。

即ち眞言宗なるものは大乘佛教の最も發達せし哲理に着するに、婆羅門教の神神や儀式の衣を以てせるものと云つてよい。

太陽の將に西天に沒せんとするや、暫時の間赫奕たる光明を放つが如く印度佛教も亦西暦第八九世紀頃、秘密佛教と云ふ新運動の美名の下に、一寸ばかり盛な餘光を放ちて人目を眩せしめたが、間もなく印度の地から追ひ拂はれて了つたのである。彼の弘法大師が支那に渡つて眞言佛教を日本に輸入せられし頃は、印度では將に佛教の亡びんとして居た時代である。善無畏、不空、金剛智等の三藏學者は、當代に於てこそ傑出せる阿闍利（Acârya）であつたらうけれども、大厦高樓の將に顚覆せんとするを支へ、且之を修繕改良し得るほどの大人格ではなかつたらしい。兎に角印度の佛教は眞言秘密の教を最後として、スツカリ腐敗墮落し、終に印度教の中に吸收されて了つた。これから愈〳〵印度の闇黑時代が初まるのである。

捗て加へて新進氣鋭の勇猛なる一夫多妻主義の回教徒が、印度の西北境から潮の如き勢ひを以て侵入して來るし、印度社會は、上はその先導者先覺者たるべき僧侶及び王侯大臣より、下は卑賤の奴隷輩に至るまで、遺憾なくヒューマン、アニマル（Human animal）の本性を暴露し、道德の頽廢その極に達して居たのである。

勿論非歴史國として名高き印度社會の出來事だから、印度の闇黑時代は紀元第何世紀より何世紀までと正確に語ることは出來ない。然し印度教中の眞言秘密宗即ちシャクティ宗なるものは、凡そ西暦第十世紀より第十四五世紀頃まで印度の地を風靡して居たものらしい。今でも印度社會の首腦と云はるゝベンゴール州にはこの宗派が隱然たる一大勢力をなして居る。元來秘密の教派だから吾々外國人には勿論のこと、同じ印度人でも異宗派のものにはその內幕は薩張り分らない。

女根崇拜宗

シャークティ宗を意譯すれば女根崇拜教とでも云ふべきであらう。諺にも名は實の賓と云へるが如く、女根崇拜てふ名稱それ自身が既に風壞的である。此の派にも西藏佛教のそれと同じく左右の兩黨がある。而して左黨の遺り口は我が國の天理教のそれに優るとも決して劣らぬ野卑婬猥な宗旨で、シワ（Siva）神の相方たる女神を其の本尊と仰いで居る。此の派の信者は單に理想化した女根を崇拜するのみならず、生きた實物をも亦彼等が渴仰崇拜の對象となされて居る。其の醜狀陋態は到底吾人の筆紙に盡し得る限りでない。

色魔の世界

兎に角西暦第十世紀頃から第十四世紀頃迄の印度社會は醜化し退化し腐化し敗化し、世を擧げて色魔の世界となつて居た。斯の如き宗教の墮落、道德の頽廢は即ち國民の元氣を衰亡せしめ、終に國家破滅の原因となつたのである。此の

間にモーガル王朝の大帝國が建設せられたけれども、此の王朝も前述の如く、宮中からして道德的に墮落して、世界第一の寶庫と稱せらるゝ天下最富の土地を他國人の手に委するの止むなき破目に陷つた。凡そ大にしては國家、小にしては一家の隆盛發展を謀る上に最も謹むべきは男女の關係を紊さないことである。蓋し男女の關係にして紊されれば餘他一般の道德も隨つて亂れ、終に一國一家の破滅を招致するに到ることは人間の歷史が幾回となく敎へて居るからである。

斯く印度の社會は、一方には極端な肉慾主義、人獸主義が流行して社會の根柢を腐敗せしめ、他方には極端な禁慾主義、苦行主義が蔓りて只管昇天の功德を積むに汲々たる徒輩が社會の元氣を衰亡せしめつゝある。如何に自然界より受けた影響なりとは云へ、斯くも極端に走せては國家社會の隆盛に向はう筈はない。

六　印度の言語

梵語と印度語

我國の素人筋の多くは、印度語と云へば梵語のことだ位に考へて居られるやうだが、梵語は印度語の一種に相違ないけれども、印度語は決して梵語だけではない。印度及び其邊境諸邦に於て、今現に使用せられて居る國語の數は實に四百種以上である。勿論此等四百種以上の言語は、互に全く其系統を異にして居る譯ではないが、其相異の程度は決して日本の九州語と東北語との相異位ではない。文字の綴り合せ方或は文字そのものからして全く面目を異にして居るものも少くない。我が國に於て梵語と云へるは具にはサンスクリット（Sanskrit）と云ふ、所謂東洋文明の本家本源たる印度文明を形成した中軸の言葉である。此の梵語地理の上より見れば、印度大陸は二大部に分つことが出來る。曰く

(一)中國(二)外蠻地、即ち之である、昔支那人は自分の國土を中國と誇り、其の周圍、即ち東西南北の邊境諸邦を東夷西戎南蠻北狄と貶して居たさうだが、いま印度の所謂中國及び外蠻地と云ふ分け方は、彼とは大に其の趣を異にして居る、即ち印度のは言語學者が言語地理の上から分けたので、印度人自身が自讃毀他の爲めに設けたのではない。

中國の地域

然らば其の所謂中國とは印度の如何なる部分何れの地方を指せるものなるかと云ふに、北の方は巍然として萬年不消の雪をいただけるヒマラヤ連山の麓より、南の方は炎熱燃るが如きウィンダヤ山脈一帶の地方に亙り、東の方は恆河及びジャムナ兩大河の落ち合へる地方より、西の方は今のパンジャブのサフリンド地方まで擴がつて居る。換言せば印度の所謂中國とは其の範圍頗る廣大にして恆河の本流及び支流に灌漑せらるゝ地方の大部分と、其の流域に沿へる南

北の平原を總括して居るのである。

然らば此の中國は如何にして成立せしやと云ふに、昔の昔大昔「アールヤ」民族が中央亞細亞から印度の西北境を越えて印度に侵入し來り、漸次東南に下つて先づ恆河の本流及び支流に挾まるゝ上流地方及び辨財天の本家本元たる聖河サラスワティーの邊を侵略し、更に〳〵膨脹して東南に下り梵語地理の所謂中國を形成したのである。而して彼等の有せし特殊の方言が漸次進化發達して吾々の所謂中國語なるものを生み出したのである。

吠陀梵語と古典梵語

此の梵語は三千數百年以前から學問的に攻修精練せられしものなれども、現今學者の一般に修習する古典的梵語は、西洋紀元前約三百年の頃印度に出現せし世界獨歩の大文法學者パーニニー(Pāṇini)の偉大なる精力によりて修整せられたるものである。此の故にパーニニー修整改訂前の梵語を、吠陀的梵語

(Vedic Sanskrit)と云ひ、彼の修整以後のそれを古典的梵語(Classical Sanskrit)と云ふのである、吠陀的梵語は文法が整備して居ないけれども、古典的梵語は文法の整然として一絲紊れざること世界第一と稱せられて居る。文法の精密な代り六ケしい事も亦世界第一である。

サンスクリットとは純精化せられ、若しくは精練化せられたる語と云ふ意味である。此語は太古の印度アールヤ人種が日常使用して居た種々の言語中、最も上品なものなりしことは何人も疑はざる所なれども、而も此の語が大文法家パーニニーの出現當時果して一般の人民の間に使用せられて居たか否かに就ては東西印度學者の間にマチ〳〵な異說がある。今其等種々の異說を列擧せんは此の篇の目的に副はないから省略するが、兎に角時代の降るにつれ、梵語は專ら學問上の言語となつたものらしい。換言せば印度社會に於る第二國語として敎育ある階級にのみ使用せられ理解せらるゝに到つたものらしい。されど吾人

の注意すべきは梵語は全くの死語でないことである。日本人の中には往々にして梵語は全くの死語だと速斷するものもあるやうだが決してさうではない。今でも學者と學者と會話するときは梵語を用ふる。又我々外國人が英語を知らぬ印度の學者と會話するときは、仕方がないから矢張り梵語で話した方が便利だ。否、同じ印度人でもマラタ(Marathe)地方の學者が、ベンゴール(Bengal)地方に行けば、丸で外國に行つたのと同じで、相互の言葉が通じないから、矢張り梵語で會話して居る。

名前と職業

印度社會で交際するには是非梵語の智識がいる。何せなれば印度社會には數多の職業的階級がある。而して其階級の何なるかは彼等の名前を一見すれば直ぐ分る。日本でも昔は士農工商の職業は名前で大概區別せられて居たらしい。例せば楠正成とか松平直茂とか藤原道眞とか云ふ名前は士族で、權助とか八

兵衞とか云ふ名前は百姓か町人であつた。さう云ふ風に印度では今でも其の名前を見れば、當人の職業階級の何たるかを判斷することが出來る。而して其の名前は大概梵語である。少くとも梵語から轉訛た言葉である。是故に梵語を知らぬものには――但し印度人同士ならば梵語を知らんでも分るけれど――其名前を見聞しても何階級の人なるか又は何を職業とする人なるか分らない。階級が分らなければ育ちが分らない。育ちが分らなければ顏形や身なりを見た許りでは、當人に對し馬鹿に丁寧過ぎた取扱ひをしたり、又馬鹿に敬意を失したりすることがある。身なりや顏附がいゝからとて、穢多に對して餘りに優遇すぎたら、先方はクスグッタクて堪まるまい。斯る狀態であるから印度社會をよく能く了解するには梵語を知つて居らねばならぬ。

想ふに恆河流域の上部地方に於ける太古の日用語は世界最古の聖典の一たるリグ吠陀の文をなせる言語と同一のものであつたらしい。而して其言語が學術

的に精練せられて古典的梵語となれるものと見る方が妥當なる見解ならんと信ぜられる。隨つて現代の印度語中には梵語から派生したものもあるやうだが梵語と起原を同うする姉妹語の漸次變化せるもの丶方が寧ろ多いやうである。

二大語系

梵語地理の所謂中國の西南東の三地方には、已に吠陀時代より、他の印度アールヤ人種が殖民して居たものらしいと見るのは、一般に印度學者の一致する所である。即ち梵語地理で外蠻地と稱するものは此等の諸地方を指したもので今のパンジャブ (Punjub) シンド (Sind) グジャラート (Gujarát) ラジプタナ (Rajputana) 及ビハール (Behár) などの諸地方を含んで居る。勿論地理の上から云へば今のラジプタナ地方は所謂中國に屬するけれども、此の地方の中國民族によりて、征服せられたのは餘程後世の事だから、印度語を解說する場合には、外蠻地に編入せしむるのが當然である。斯の如く印度の各地方に殖民せ

る印度アールヤ人種は、其の祖先を同うして居るけれども、各自移住の歴史を異にし、隨つて其の方言をも異にして居る。而して茲に吾人の注意せざる可らざることは、外蠻地の各方言間に於ける相互の關係は、其等の一つ〳〵が中國語に對する關係よりも一層密接なるものありて存することである。這般の事實はバンジャブ、シンド及びラジプタナ等の諸地方に於ける現代地方語の比較研究によりて證明せられて居る。

斯くて吾人は印度言語史の初期に當り、主として二派の系統ありしことを推知することが出來る。即ち一は中國語系にして、他は外蠻地語系である。又人種學的研究の結果によりて中國地方への移住民は、アールヤ民族の印度侵入團中、最後の團體なりしものなることが明かになつた。此の最後の移住團體は其の勢力甚だ強大にして、先來の同民族を壓迫驅逐したものらしい。彼は先づデリー（Delli）、カナウジ（Kanauj）及びマツラ（Mathura）等の都會を占領し

猛火の原野を燎くが如き勢ひを以て、現今の東部バンジャブ、ラジプタナ、グジャラート及びオード（Oudh）邊まで征服したのである。こは今尚同地方に於ける方言が其の基礎を外蠻地系の言語に取り、其の枝葉を中國のそれに取つて居るので容易に看取せられる。又中國の勢力範圍の中心を遠ざかれば遠ざかる程、中國語の各地方の方言の上に及ぼせる影響勢力が漸次減退して、外蠻地系の言語これに代れるを明示し、終には中國語の影響勢力は全くその形跡だも止めないやうになつて居るので分る。

東部バンジャブ地方の現代語は恆河の上流地方に於ける方言と密接の關係あるを示して居るけれども、西部に入るに隨ひ、中國語と少しも關係なき西部バンジャブの地方語なるランダーとなつて居る。又東北ラジプタナ地方の言葉はアグラ（Agra）地方のそれに酷似して居るけれども、西南方に行くにつれ多く外蠻地の原語に富んで居る事が發見せられる。オード地方は一種獨特の文明を

有つて居るけれども、これ又中國語と外蠻地語と兩語を混合せるものなることが明かに分るのである。

梵語の意義

支那及び日本にてはサンスクリット語のことを梵語と云つて居るが、我國にては僅少の專門家の外、梵語とは何ぞやサンスクリットとは何かと云ふことを知つて居るものは殆どないと謂つてよい。されば聊か專門的に傾く嫌ひはあるけれども、此に極々ザットばかり其の意味を說明して一般人の參考に供しやうと思ふ。

抑サンスクリットとは「純化し又は精化する」と云ふ意味の動詞サンスクリの受動分詞にして「純化せられ又は精化せられたるもの」と云ふ字義である。是故にサンスクリットとは自然のまゝの言葉に人工を加へて磨き上られたる國語と云ふ意味である。既に磨き上られたる言葉と云ふからには、磨き上られな

い以前の言葉、即ち自然のまゝの言葉がなくてはならぬ。其自然のまゝの言葉は何か？之を原語でプラークリット（Prākrit）と云ふプラークリットとは「自然のまゝのもの」、又は「人爲的細工を加へられないもの」と云ふ意味である。此に柱がある。此柱は元々山に樹て居たが、其を切つて來て大工が鉋をかけて磨き上たものである。まだ鉋も何もかけない山出の自然木その儘では柱と云ふ名はつかない。其の柱と云ふ名のついた時はサンスクリットに當り、自然木其儘の時はプラークリットに當るのである。

自然語

此のプラークリット即ち自然語の最も初期に屬するものは、今より約五千年前の吠陀時代に於ける印度中國の日用語であつた。然らば之に對する外蠻地の當時の言葉は何であつたか、此の事に關する記錄は何もないから確なことは分らぬけれど、多分今より四五千年前頃には、中國語も外蠻地語も非常に異つた言

葉ではなかつたらうと想像せられる。吾人は其の時代に於ける印度各地方の言葉を總稱して第一期の自然語と名づけて置く。此の時代の言語の特色は、

第一、總合的で分析的でなかつたこと

第二、子音と子音との粗野なる結合を許せしこと

第三、二重音の許容せられしこと

などである。其の後十數世紀を經て、第二期の自然語と名づくる時代が來た。此の時代には既に二重音や、子音と子音との粗雜な結合は取り除かれたけれども、矢張り總合的にして分析的でなかつたのである。

現代印度語の分類

第三期に入りて總合的の言語が進化發展して分析的の言葉となつた。印度アールヤ民族が、斯の如く多くの年所を經て益膨脹し、殖民區域を擴張するにつれて、數種の方言は愈分派して數十の方言となり、以て近世に到つたものである。

ある。加之アールヤ民族の人種も亦印度の地に住し、各自特殊の方言を有つて居るから、國語の不統一なること夥しい。今現に印度大陸の各地に使用せられつゝある國語の數は實に二百二十種の多きに上つて居る。而かもそは現今印度に話されつゝある歐洲語や印度以外の亞細亞大陸各國の言語を除外して單に所謂印度語だけの數である。而して其等二百二十種の言語は左の六大系統に分類されて居る。

(一)馬來ポリニシアン系(Malayo-Polynesian Family)——之に屬するもの二

(二)オーストロ亞細亞系(Austro-Asiatic Family)——之に屬するもの二十三

(三)西藏支那語系(Tibeto-Chinese Family)——之に屬するもの百四十一

(四)ドラヴィダ語系(Dravidian Family)——之に屬するもの十五

(五)印度歐羅巴語系(Indo-European Family)——之に屬するもの三十七

(六)分類されざる國語(Unclassified Languiges)——之に屬するもの二

是等二百二十種の國語は大別の數にして、若し之に幾多の方言を加ふれば四百種以上になるさうだ。今吾人は二百二十種の國語中、最も主要なるものゝみを擧げて此の項を結ばう。

現代の印度語

(一)ヒンディ(Hindi) と云ふ言葉は印度語で最も使用せらるゝ言語である。謂はゞ印度社會のエスペラントで、三億以上の生民中、二億三千萬人位は此語を了解し得るのである。此のヒンディ語の中には梵語より脱化せる高等ヒンディ語と、回教徒の侵入以來波斯語と亞剌比亞語を混交せる、ヒンヅスタニー語(Hindustani) 及びヒンディ語系に屬する種々の地方語を含んで居る。

(二)ベンガリー語 (Bengali) この語は印度各州の腦髓と云はるゝベンゴール州に於る約六七千萬の住民の間に使用せられて居る。而して此の語は實に立派な文學を有つて居るから吾々の研究する價値がある。今將に我國に來らんとする大詩人タゴールの詩は多く此のベンガリー語でものせられて居る。

(三)マラティー語 (Marathi) 此の語はデッカン (Deccan) 高原地方に於ける、約二千三百萬ばかりの生民の間に用ひらるゝ言葉である。而してコンカン(Konkan) 地方のコンカニー(Konkani) 語も此の語の中に含まるゝ、此の語を話すマラタ人は、實に英領印度史上に特筆大書せらるべき怜悧勇敢の種族にして、彼等も亦一種獨特の文學を有つて居る。

(四)グジャラティー語(Gujarati) この語はグジャラート地方に於ける約一千二萬人の社會に用ひらるゝ言葉である。

(五)パンジャビー語(Punjabi) これはパンジャブ州民約一千六百萬の社會に話さるゝ言葉である。

(六)カシュミリー語(Kashmiri) これはカシュミル州に於ける約三百萬人ばかりの間に通用する言語である。

（七）シンディー語（Sindhi）　此の語は印度の西北境に近きシンド地方の言葉にして生民凡そ三百萬人ばかり居る。

（八）オリヤ語（Oriya）　これはオリッサ（Orissa）地方に住する約八百萬人の社會に使用せらるゝ語にして、此の社會も亦オリヤ文學とて一種の特色ある文學を有つて居る。

以上八種の語はアリヤン語系に屬するものにして所謂印度アールヤ人種の社會が招來し又は產出せしものである。

（九）タミール語（Tamil）　此の語は南方印度のマドラス州地方及び錫蘭島の北方に於ける約一千六百萬のドラヴィディアン（Dravidian）人種の間に用ひられて居る。マドラス（Madras）市を中心として、商賣でも初めんと欲するものは是非とも此のタミール語を知つて居らねばならぬ。先年予は平田領事から賴まれて、東京外國語學校に此の語の先生を選定して印度から送つたが、志願者

が少かつた爲め今は此科は廢止になつて居るさうな。

（一〇）マラヤーラム語（Malayâlam）　此の語も亦タミール系の言葉で、トラバンコール（Travancore）及びマラバル（Malabar）海濱地方の生民約六百萬人の間に使用せられて居る。

（一一）テルグ語（Telugu）　此語は印度の伊太利語と云はるゝ程容易しい言葉でマドラスの北方とコロモンデル海濱の北部地方及びニザム（Nizam）の領地に於ける約二千萬人の間に使用せられて居る。

（一二）カナリース（Kanarese）　これは印度の舊藩王國の一なる「マイソール」と孟買州の南方及びマラバル海濱の一部に於ける約一千萬人の社會に使用せらるゝ語である。

以上四種のドラヴィディアン系の語は印度の所謂四大ドラヴィダ人種の社會に於ける言葉にして比較的に進步開化せるものである。

（一三）ゴンド語（Gond）　此の語は印度の中央州に住する原始的の野蠻民族の間に使用せられて居る。

（一四）コラリアン語（Kolarian）　これはチョタナグプール（Chota-Nagupore）地方の一部に住する未開人種の「コールス」と云ふ約三百萬人の間に通用する語である。

此等十四種の言語は、所謂印度大陸に於ける主要の言葉なるが、此外印度の境邊諸邦にはそれ〴〵特殊の國語がある。例せば、バアマのバーミース、ネポール（Nepal）國のネバーリース、アッサム（Assam）州のアッサミース等の如きは即ち其の主なるものである。

印度の社會には斯の如く數多の言語があり、各自その歴史を有して居るから仲々統一が六ケしかつた。而して今も矢張り統一が出來ない、否英國に取りては統一させない方が得策である。それは扨置き、同じ印度大陸に社會を作り乍ら

甲乙丙丁等各自その言語を異にして居るから、お互に意志の疏通を缺いて居る。即ち自由に思想の交換が出來ないから、意志が疏通せない。從つて思想の交換が十分に出來ない甲の社會と乙の社會とが一致團結しやう筈がない。一致團結しなければ獨立は到底望まれない。そこで印度には十年ばかり前から、各地方の言葉を統一する豫備として、先づ印度各地の言葉を書き現す文字を一定すべしと云ふ運動が起つて、機關雜誌を發行して居る。

七　印度の社會組織

階級の悪制

人には生れ乍らの智愚賢不肖もあれば、生れ出て後の勤惰如何によりて生ずる貧富優劣の差もある。されば絶對に階級の觀念及び習慣を排斥する譯には行かぬ。若し絶對に之を否定せば、社會の秩序は忽にして破壞されて了ふ。これ佛敎に平等即差別と差別即平等との二大理法を樹てる所以である。換言せば君臣父子夫婦兄弟長幼男女みな人間たるに於ては同一であるが、彼等の間には各その守るべき分限がある。斯の如く社會の秩序を保ち行く邊を階級と云ふならば、そは此の世に是非なくてはならぬものである。然るに印度の階級制ほど有害無益で、人類の進歩發展を妨げ、國民の幸福安寧を損傷するものは、坤圓球上全く其の類例を見ないと云つてもよい。

今日の印度では階級のことをカースト（Caste）と云ふ、カーストとは元來ポルトガル語で樣子、性質、風、種族等を意味する言葉である。然るにポルトガル人が印度に來て、印度人特有の宗敎的社會的階級の區別を見、それを呼ぶにカーストなる語を用ひたので、それ以來カーストとは印度の社會組織即ち階級制を意味する言葉となつた。純粹の印度語でカーストに當る言葉はジャーチ（Jasti）と云ひ、種族又は國民を意味す。又ワルナ（Varna）と云ふ梵語が今日のカーストに當る言葉であつた。こは色と云ふ意味の言葉で、征服者と被征服者の關係を皮膚の色で分けた者だから、終に階級を意味する言葉となつたのである。以下吾人は印度の階級的法律が、如何に印度人の日常生活を制限し束縛するかを一言しやう。

階級的法律

此の階級的法律は實に印度人の一生涯の行動云爲を取締るものである。例せ

ば汁物の啜り方、水の飲み方、食物の喰ひ方、身體の洗ひ方、油の塗り方、衣服の着方、身の飾り方、坐り方、起ち方等の細事より談話、讀書、聽聞、諷誦、冥想、詠歌及び戰爭などの事に到るまで、チャンと此の階級的法律で命ぜられてる通りにせねばならぬ。又社會的及宗教的の儀式、個人の權利及び職業、兒童の教育義務並に宗教上の勤行、罪過、破戒各個人間の交際及び絶交、穢れの清め方、不法の行爲に對する科料及び處罰など、大小の人事、みな悉く此の階級制の法律で定められて居る。其他財産の分配及び讓與相續より、火葬の仕方又その埋方、供養の營み方に到るまで、矢張り階級的の法律で定めてある。去れば此階級制は、印度教徒の一生の行事を定むる指導的原理と云ふても決して過言ではない。然らば斯かる階級的の法律は何を權威として打ち建てられしものなるかと云ふに、一部分は成文律に據り、一部分は傳說的の物語及び說話により、一部分は古代の印度社會に於ける教師僧侶等の自分等に都合よき命

令教諭により、一部分は信者等の無定見に據つて出來上つた者である。吾人は次に人類の創造に關する記事を紹介して印度に於ける階級觀念の由來を說明しやう。

四姓の區別

最高實在の神は此世界を保存せんが爲めに、その口その股及びその足より生み出せる各種の人間に對して各自特殊の義務をあてがつた。即ち(一)婆羅門(Brâhman)に對しては、吠陀(Veda))の讀誦と其教授、供犧及び供犧の手傳ひ、布施及び布施の受取り方に關する義務をあてがひ、(二)刹帝利(Kshatriya)に對しては、征服の仕方、布施、供犧、讀誦及び男女兩性間の誘惑の避け方などの義務を、(三)毘舍(Vaisa)に對しては家畜を飼ふこと、贈物を與ふること、供犧すること、經典を讀むこと、貿易に從事すること、利子を取つて金を貸すこと等の義務を、(四)首陀(Sûdra)に對しては、上記三級の人々に奉仕するに絶對的に

自己の價値を値ぶみしないで、從順に服事することの唯一の義務をあてがつたのである。これ即ち印度の四姓である。

天下の愚法

最上實在たる梵天の口より生れたる婆羅門は、吠陀聖典の正しき所有者にして一切造化の首長である。世に存するものは、凡て婆羅門の財産である。是故に婆羅門以外の生物が生命を享受し得る所以のものは、一に婆羅門の恩惠によりてゞある。法論によれば婆羅門は國家の法律の制裁を受けない事になつて居る。時として道德的法則さへも彼等を制する力はない。彼等は何等躊躇する處なく、首陀族の財産を沒收することが出來る。犯罪の處罰の如きも階級の上下によりて大なる差等がある。例せば婆羅門が一人の刹帝利族を殺した場合は、罰金五百バナ、毘舍族を殺したときは二十五バナ、首陀族を殺した時は十二バナの科料に處せらる。が、之に反して若し最下級の首陀族が、自分以上の階級

に屬する人を殺したが最後、縱令如何なる理由あるも忽ち死刑に處せらる。若し首陀族が、婆羅門に向つて高慢にも敎訓がましい事を口にしたら、國王は彼の口と耳とに熱油を注ぎ入れる。婆羅門の男子が他階級の女子と姦通すれば、唯その頭髮を切らるゝのみなれども、若し首陀族が他階級のものと姦通した場合は直に生命を取らるゝ。而して婆羅門は如何なる場合と雖も死刑に處せらるゝことはない。天下豈斯の如き愚なる敎法あらむや。印度人は釋尊の四民平等の大法を忘れて、斯ゝる愚法に迷はされたから、終ひに其の國までも亡なつたのだ。

學者と王者

日本の印度學者中には往々にして、昔から婆羅門族は、みな僧侶だつたと考へて居る人もある樣だが、這は大なる間違である。婆羅門族すべてが僧侶だつたのでなく、又現在僧侶であるのではない。其の內の或る者が世襲的に御寺の

番人としての僧侶となり、或は宮中の御用僧となり、或は富豪の家庭の雇ひ僧となつて衣食して居るが、彼等は他の婆羅門の仲間から寧ろ蔑視せられはするとも、決して心から尊敬は拂はれて居ない。去れば印度敎の僧侶が一般の社會から尊敬せらるゝのは、神に奉仕する僧侶祭司なるが故にあらずして、其の生家が婆羅門なるが爲めである。又印度には僧侶以外にグル（Guru）とて敎師を職とするものが居る。彼は其の地方々々に於ける屈指の學者である。グルは必ずしも婆羅門族たるを要せない。彼が社會に尊敬せらるゝのは、生家の貴きが故にあらずして、其の職分の尊きが爲めである。されどグルたる上に彼の生家が婆羅門であるならば、社會に優遇せらるゝこと彼れ以上のものはないと云つてよい。人若し

「學者たる狀態と、王者たる狀態とは決して同じからず。王は其國に於てのみ尊ばるれども、學者は天下到る處に於て尊ばるればなり。」

と云へる詩あるを見ば、印度社會が如何に昔より學者を尊敬せしかを知るを得ん。

印度救濟の一策

婆羅門は理想的生活として、法典に記載せらるゝ通り、一生を四期に分つて居る。四期とは一に學生時代、二に家長時代、三に冥想時代、四に出家修業時代である。されど此生活法は、現今では婆羅門社會の全體を通じて行はれて居るのでなく、餘程變更されて居る。普通一般の婆羅門は老年になり又身體が虛弱なる場合には、其の子に世帶を讓り、ベナレス（Benares）とか伽耶（Gaya）とか云ふが如き靈地に行つて、安氣恬淡に餘生を送るのが常である。又昔は婆羅門の人にして何かの商賣に從事するのは、恰も我が日本の昔の士族が、矢立を提げたり算盤を持つたりするのを武士の體面を汚すものと考へて居た樣に、婆羅門族たる者の威嚴を損するものとして排斥せられて居た。されど今では斯

る觀念は餘程なくなり、婆羅門族の人にして、商會や官省の書記ともなれば、小學校教員、醫者又は機械屋或は何かの商賣に從事して居る者も決して少くない。世が開けて普通教育が普及すればする程、昔の法典は其の威力を失しつゝあるから、此の際印度に普通教育を盛にすればする程、彼等を迷信の深淵より救ひ、健全の發達をなさしめ得る所以の一策である。

階級團と制裁

各地方に於ける各階級の人々は、社會的一團を形成し、團員中より委員を選び委員會（Dal）を組織して居る。又其の委員中よりダルパティ（Dalpati）と て委員長を選び、團員中に團の法規に背き、又は團の名譽を毀損するが如き行爲に出でたものあれば、直に委員會を開いて其の事件を商議し、委員長をして之が判決を下さしめる。團員は如何なる事情ありとも委員長の裁判に服從せねばならぬ。而し其處罰の一番重いのは、階級から除外せらるゝことで、之を英

語で out of caste と云つて居る。一度階級團より除外さるれば、團員は如何なる場合と雖も、彼と食事を共にせず、其の子女と結婚せしめざるは勿論、交際往來もしなければ朝夕の挨拶もしない。

此等階級團の或る者は、團體的制約を堅く遵守し、場合によりては委員會にて定めた規約の勢力は、國家の法律よりも強い事がある。然れども文運の進歩した都會になればなるほど、此等の古き社會的制約は弛廢し、カルカッタの樣な大都會の市民間には殆ど全く觀られない有樣である。

階級別と食器

印度教徒は銘々に特殊の食器を有て居て、甲階級のものは乙階級のもの丶食器では決して何物をも喰べない。是故に彼等が旅行などするときは、必ず一個の水呑を携帶して居る。斯る有樣なるが故に、眞正の基督教は印度人の間には仲々擴まらない。東洋各國中泰西の基督教徒が、印度ほど金を掛けて布教した

國はあるまいが、又印度ほど其効果の擧らない國もあるまい。蓋し其理由は二つある。一には彼等印度人が階級的觀念に富めるが爲め、二には彼等のグル即ち敎師が、歐米の宣敎師と敎理上の議論を戰はし、屢〻基督敎の宣敎師をやりこめるのを見聞して居るから、基督敎は淺薄で取るに足らないと頭から馬鹿にしてかゝつて居る爲めである。印度大陸中比較的基督敎宣敎の成功せりと稱せらるゝ、南方印度地方の敎會に於いてゞさへ、飲料水用のコップに、上級敎徒用と下級敎徒用、又は無階級敎徒用と少くとも二個のコップを備へ附けて置かねばならぬ事になつて居る。若し斯の如き設備をなさず、階級制を容れなければ、基督敎は到底印度の地に存立する事は出來ない。以て印度人の階級觀念の如何に深刻なるかを知るべきである。

職業と階級

昔の四姓は今や分れ〳〵て百以上の階級を形成して居る。素人の目には何が

何やら仲々分りにくい、例せば「ベンゴール」州の婆羅門は「ラウリー」「バレンダー」「ワイデイク」及び「サプタサテイ」と云ふ風に分れ、更に分岐して「クリン」「スローテイヤ」及び「ワングサヂヤ」等の階級を生じて居る。此等各階級に屬する男女は、己れの階級以外のものとは結婚もしなければ、一緒に食事もしないのが原則である。然らば何うして斯の如く無數の階級に分れしやと云ふに物變り星遷るにつれ、人間の職業が幾つにも分れ、終に職業其ものが階級と云ふ風になつたのである。例せば機械カースト、鍛冶カースト、大工カースト、洗濯カースト、床屋カーストと云ふが如くである。斯くして印度人の大多數は子々孫々父祖の業を繼いで、洗濯屋は世々洗濯屋、「メタ」と云ふ兩便所掃除は子々孫々雪隱掃除を業として居る。

前述の如く昔の四姓が今では職業階級になつたから、精密に調査すれば百以上に分れて居るけれど主要なるものは左記三十種のカーストである。

度印の日今

一、「ブラーフマン」 (Brâhman)
二、「ラージプト」 (Râjput)
三、「バニヤ」 (Baniya)
四、「バルヒ」 (Barhi)
五、「バルニ」 (Barni)
六、「チャマール」 (Chamâr)
七、「ドービ」 (Dhobi)
八、「ドーム」 (Dom)
九、「グワラ」 (Gwalla)
10、「ハーリ」 (Hâri)
11、「ジャリヤ」 (Jaliya)
12、「ジギ」 (Jugi)

組織會社の度印

13、「カハル」 (Kahar)
14、「カイバルタ」 (Kaibartha)
15、「カルマカル」 (Karmakar)
16、「カンヅ」 (Kandu)
17、「カヤスタ」 (Kayastha)
18、「クムハル」 (Kumhar)
19、「クルミ」 (Kurmi)
20、「マダク」 (Madak)
21、「マーリ」 (Mâri)
22、「マラ」 (Mallah)
23、「ナーピト」 (Nâpit)
24、「スンリ」 (Sunri)

二五、「タモーリ」(Tamoli)
二六、「タンティ」(Tanti)
二七、「テーリ」(Teli)
二八、「テーウィ」(Tevi)
二九、「ビイニヤ」(Buinya)
三〇、「カワル」(Khawar)

婆羅門族のものは、各村落又は都會に於て多く寺の堂守や或は世間的の官吏、教師、書記、若くは下士官として生活して居る。「ラージプト」も亦下士官だの諸官省や商會の書記などになつて居るものが多い。兎に角婆羅門と「ラージプト」とが、他の階級のものに比し上等職業――若し職業に上下を分ち得るならば――に從事して居る。現今印度各州の大學副總長や、高等法院の判事、その他の高級官吏は大概この二種の階級から出た人である。

如何なる片田舎と雖も、六七軒の家のある所には、必ず「バニヤ」と云ふものが居て、小さな店を出し金貸しを業として居る。「バルヒ」と云ふのは大工と左官とを兼ねた樣な職業であるから、村落あれば必ず「バルヒ」が居なくてはならぬ。地方によりては「バルヒ」の事を「ミストリー」と云ふ所もある。此「バルヒ」は家も建つれば壁も塗るは勿論、葬式に際して火葬用の燃料までも供給する。「チャマール」と云ふのは靴造りで、死んだ家畜の皮を剝て馬車屋の鞭を作つたり、靴の修繕をしたりする。而して其妻君たるものは、產婆の業を獨占して居る。「ドービ」と云ふのは洗濯屋で、「ナープティ」又は「ナビ」と云ふのは床屋である。「ドーム」と「ハーリ」とは、市街及び便所等の掃除を業とする奴で普通の住民に取りては極めて必要な人間である。「カルマカル」と云ふのは鍛冶屋で、又の名を「ローハル」とも云ふ。「クムハル」は陶器製造人で、印度人の大多數は、此「クムハル」の作つた陶器で飯をたき、又は其鉢、皿、碗に食物を盛

る。陶器と云つても、決して立派なものでなく、黄赤色の素燒である。「マダク」と「カンヅ」とは菓子屋及び菓子製造人で、印度人は菓子なしには一日も暮し得ないと云ふも過言でない程菓子好きである。統計表の示す處によれば印度人の口に這入る砂糖の量は、地球上に產出し製造せらるゝ砂糖總高の三分の一以上である。以て印度人が如何に菓子好き、甘い物好きなるかゞ分からう。彼等は餘り甘い物を食つて油斷して居た爲め、外國人から其國まで嘗められて了つたかも知れぬ。「スンリ」と云ふのは田舍の小驛に於ける酒屋さんで、「バルニ」及び「タモーリ」と云ふのは、「バーン」と云ふ植物の葉に檳榔樹の實を、石灰とこねませて賣つてる奴のこと。「タンテイ」及「ジュギ」と云ふのは機織屋さんで、「マーリ」と云ふのは寺や富豪の邸宅や大家庭の外庭を掃除したり、花を育てたり庭の芝草に水をやつたりする職業、即ち我が園丁見た樣な仕事をする奴である。「グワラ」と云ふのは牛飼ひで、「マラア」と云ふのは船乘り又は漁夫であ

る。「テーリ」は油しめを業とするもので、「テーウイ」と云ふのは專門の漁夫である。「カハル」と云ふのは駕籠かきだから、婚禮の時は是非なくてはならぬのであるが、大きな家庭には常に此の「カハル」を雇ふて置いて、兼ては「ボーイ」の代りをさせてある。「カヤスタ」は婆羅門と共に學者を出す階級で、小學敎員村長、收入役、又は大地主の祕書などは、多く此の階級のものが占めて居る。最後に「ビイニヤ」と「カワル」と云ふのは日雇ひ人足又は苦力を業とするものである。

不擧國一致

斯くの如く雜多の職業が各一種の階級となつて居るから、甲階級のものは決して乙階級のものゝ仕事に手を出さず、乙階級のものは丙階級のものゝ仕事をしない。例へば家庭に於ける雇人でも、料理人は料理のこと丈けしかしないし、「ボーイ」は「ボーイ」の仕事丈しかしない。雪隱掃除人は雪隱掃除丈けしかしな

いと云ふ風である。斯く上下の階級が極端に分れ、階級の異なるものは飯も一緒に喰はぬと云ふ有樣だから、各人の意志の疏通が出來ない。意志の疏通が出來ないから、人心が融和しない。人心が融和しないから、擧國一致など云ふ事は夢にだも望まれないのである。

八　印度の政治

政廳の官制

印度政廳に於ける行政上の最高官は謂ふまでもなく印度總督（カバーナー・ゼネラル）である。此總督の又の名を印度副王（ヴアスロイ）とも云ふ。政廳は內務、外務、軍務、文部、農務、大藏、司法及商工の八省より成り、八省には勿論各大臣を置いてある。而しながら印度政廳の大臣は英本國のそれと異り、ミニスターともセクレタリーとも呼ばないで、普通にはメムバー・オヴ何々と稱へるか若しくは何々メムバーと謂つて居る。例せば內務大臣のことをホーム・メムバーと云ひ、文部大臣のことをメムバー・オヴ・エヂュケーションと云ふが如くである。斯の如く八省に各大臣は置いてあるが、外務は總督の直轄する所となり、軍務は軍司令長官（コムマンダーインチーフ）の管轄する所となつて居る。斯くて印度の軍司令長官は各省大臣

の最上位を占めて居るから、總督府の行政會議では彼の事を特別委員と云ひ、各省大臣のことを普通委員と呼んで居る。

總督大臣任期

總督も大臣も皆一定の年期附だと云つたら、素人には一寸をかしく聞えるかも知れないが、不文律的に年期づきになつて居る。而して總督の年期は一般に五箇年間と云ふ事になつて居る。勿論五箇年以上繼續を許さないと云ふ譯ではないが、二期即ち十箇年以上は許されないのである。何せ年期を限つたかと云へば、印度のやうな所に一人の總督が十年以上十五年も二十年も居たら、不知不識の間に印度化せられ、終には印度人と腹を合せて、大謀反を起さないとも限らないからである。人間の欲望から云つたら、印度總督の如き割りのいゝ商賣はない、即ち年々澤山の俸給や交際費を貰ひ、冬はカルカッタ否な今ではデリーの金殿に住ひ、夏は海拔八千尺のヒマラヤ山脈の中にある詩村の玉樓に棲

ふのだから、洞山和尚の言ひ草ならで實際に無寒暑の天地を家とするのだ。然らば印度總督の年俸は幾何かと云ふに、二十五萬〇八百留比（日貨十六萬七千二百圓）である。而して其の交際費は勿論年俸以外である。序に謂つて置くが各省大臣の年期も亦五箇年である。大臣にまで年限を附けずともよさゝうなものだが、矢張人間は一所に長く置けば、遂に碌なことは爲ないと云ふ恐れがあるらしい。

事務大臣職權

英本國で印度の政治を管掌するものは、讀者諸君が先刻御承知の通り、印度事務大臣である。此の大臣の下には、常に十名以上乃至十四名以下の委員が居て、大臣を輔佐することになつて居る。而して此等の委員は、何れも政務官若くは事務官として、十箇年以上印度政廳に奉職し、印度の事情に精通した人でなくてはならぬ。又印度の事情に精通すると云つても昔の事情では駄目だ、現

今の印度の新しい智識を有て居なくてはならぬとの理由の下に、印度より本國に歸つてから、五箇年以内の人に限ると云ふことになつて居る。印度事務大臣は印度政廳と外國との交渉問題、印度の藩王國に對する政策及び緊急秘密の諸問題等を考量し解決する責任を負ふて居るから、其の任務や蓋し重且大なりと云はねばならぬ。然り而して此大臣は印度歳入の充當に關し、前記の委員を集めて會議を開き其の協賛を經なければならぬ。會議は五名以上の委員が出席しなければ、何等の決議をも爲ることは出來ない。

政治上の區劃

英領印度は政治地理の上から云へば十四州に分たれて居る。此十四州の英領印度と數多の藩王國とを合して我々は一口に印度と稱するのである。此等十四州の英領印度中、大なる州には知事又は副知事を置き、小なる州には理事を置いてある。知事と云へば日本の縣知事のやうに聞え、理事と云へば朝

鮮の理事官のやうに聞えるかも知れないが、什麼に小ぽけなものではない。ベンゴール州などは日本の本國全體よりか大きい。

政治上の地理的單位は郡又は區である。郡の監督長官を收税吏若しくは副理事と云ふ。英領印度には郡の數が二百七十五ある。郡の平均面積は約四千方哩で、又その平均人口は約一百萬人弱である。

知事は英國皇帝の任命する所にして、副知事及び理事は皇帝の勅許を得て印度總督の任命する所である。而して各州の知事も副知事も、印度總督と同樣に、其の下に立法會議なるものを有し、少くとも年一度は此の會議を開いて豫算其他の重要案件を附議する、斯くして徵せらるゝ歳出入は中央政府の監督の下にあるけれども、行政及び財政上の獨立の程度は時と場合によつて異なるのである。此等諸州の中、主なる知事の年俸を擧ぐれば、マドラス州知事及び孟買州知事が同額で十二萬留比(日貨八萬圓)、ベンゴール州、合併州、パンジャブ州

及びバアマ等の副知事の年俸が十萬留比（日貨六萬六千六百六十圓）である。又中央州、西北國境州、バルヂスタン及びアバマン島などの比較的に小さな州には副知事を置かずに理事官を置いてある。隨つて其の俸給も副知事のよりは少い。

中央と地方

郡の監督官憲は州の知事又は州の副知事で、州廳の監督は印度總督なることは云ふまでもないが、印度の如く大きな州になれば同じ一州の中でも、地方によりて人種を異にし人情風俗を異にして居るし、何しろ露西亞を除ける歐羅巴全體と同じ程の面積ある印度大陸であるから、一中央政府や一州廳で各地方の行政財政を十分に監督するのは甚だ困難の業である。此故に印度事務大臣モーレー卿は、中央政府と各州廳及び各郡役所との間に於ける財政行政の關係を調査し、且地方分權の制度を改善し若しくは簡易にすべき諸點を報告せ

しむる爲め監察官（ローヤルコンミッショナー）なるものを新に設けられた。然り而して前總督ミントー卿の時代に、外交、國防、課稅、通貨、關稅、郵便、電信、鐵道及び會計等の政務や本務の監督を中央政府の仕事となし、內務、警察、民事、刑事の裁判稅の徵收、敎育、衞生、灌漑、建築、道路及び監獄等の諸事務を州廳の手に委ぬることゝせられた。

印度の都會

印度には市制を施ける都會の數が實に七百五十餘區ある。此等多數の都會中大なる都會に於ける市會議員の大多數は云ふまでもなく印度人である。而して其の州の理事官は市會に對して市政の監督を任すと同時に、初等敎育費の負擔を命ずるのである。中等敎育及び高等敎育は州廳又は政廳の直轄經營する所であるが、前に詳述せしが如く、印度の初等敎育は義務敎育制度になつて居ないし、學校と云つても其の體裁內容ともに丸で昔の寺小屋式である。斯くて敎

育の普及を望まんは百年河清をまつよりも愚だ！

印度の都會は我が國の都會と同じく新舊思想の矛盾不調和を具體的に說明して居る。即ち右に三階四階の宏壯なるデパートメント・ストーアがあるかと思へば、左に竹を以て柱とし、土石を積んで壁とし、椰子樹の葉を以て屋根とせる小屋的商店がある。コンクリーせる大道をけたゝましき音を立てゝ自働車が走るかと思へば、油の代を有ぬ青年が街燈の下で美しい聲もてラーマーヤナを吟誦して居る。

慾張の中央政府

今日の印度で地方理事官の頭腦をなやましつゝある問題は、地方廳の歳入に關する問題である。蓋しそは印度政廳が餘りに地方廳の獨立歳入に制限を加へ過て居るからである。例せば利益又は收入の大なる阿片の專賣も、鹽の專賣、薄荷の專賣も、其他關稅、鐵道、郵便、電信等の收入も皆悉く中央政廳に收

め、三等收益と稱せらるゝ印紙だの收入稅だのから上る收入を以て地方廳に保留せしめて居る。此故に郡役所あたりの一般の見解は、地方廳は何うしても今少し獨立した歳入の財源を與へられ、又今少し課稅の上に自由な權利を與へられねば、地方の發達は望まれないと云ふことに一致して居る。若し夫れ地租の賦課法の如きに到つては、ベンゴール州の全部とマドラス州の約四分の一の地方と合併州の一小地方だけが一定して居るのみで、他の州は年々歳々區々マチマチである、これで人民が默つて居るから不思議だ！

歳入と歳出

千九百八年以後に於ける印度政廳の歳入は、約八億圓で歳出は約七億三千萬圓である。此の內地租が約二億圓を占め、阿片、鹽、印紙、關稅、郵便、電信、灌漑及び鐵道等より上る收入が大部分を占めて居る。

歳出の部では印度でも矢張り軍事費が最多額を占め、二億圓以上即ち地租よ

り上る收入では足らないのである。阿片專賣より上る收入は、英國議會の阿片輸出禁止問題、及び支那政府の比較的に嚴重なる阿片喫用禁止問題以來、大分減少しつゝある。

印度の負債は總額二十五億圓弱で、歳入の割合から云へば英本國の負債の半額より少ない。それに負債の大部分は餘程割りのいゝ金利になつて居る、ミッチエール・ヒックス氏の言によれば印度の財政は聯合王國のそれよりも餘程いゝ狀態にあるさうだ。

非繁文縟禮

印度の中央政府及び地方政廳に奉職する英國人の高級官吏の數は、驚く勿れ只僅に二千八百餘人である、又印度の裁判所及び行政官の職に就けるものゝ總數三千七百人の內、歐洲人の官吏は僅に百人足らずしか居ない。斯く少數の本國官吏がよくも彼の印度大陸三億數千萬の民を統御し、政務を處理し事務を

辨理することが出來るものだと云ふ考へを起さずには居られない。然り日本の官憲の如くに、人民困らせの有害無益な繁文縟禮をやつて居たら、印度中に一萬人の本國官吏を連れ來つても尙不足を感ずるだらうが、そこは流石に常識の發達した英國人だけあつて、決して七面倒な繁文縟禮をやらない。これ極めて少數の本國官吏で間に合ひ、少しも事務の澁滯を來さぬ理由である。我輩は決して一から十まで英國を崇拜する人間ではないが、非繁文縟禮即ち事務の簡易敏捷なやり方だけは、是非とも英人を眞似たいと思ふ。勿論人情や風俗習慣を異にする國土に於いて、直に英國流を直譯して植附けやうとするのは無理でもあり亦無定見でもあらう。然し朝鮮總督府などはイの一番に此の點を能く調査し參考として貰ひたいものだ。

我輩の誤聞かも知れない——誤聞ならんことを願ふ——が我が朝鮮に於ける本國官吏は、內地官吏の古手や何にかゞ多いと聞いて居る。若し果して之が事

實とすれば、そは甚だ怪しからぬことである。印度に於ける英國官吏の如きは本國で高等文官試驗に及第した上、更に印度語の六ケしい試驗を通過したものでなくてはならぬ、印度に赴任するや否や、彼等は印度語を自由に話すだけの實力を有て居なければならぬ。

二種の官吏

印度には二種の官吏が居る。換言せば印度の公務は印度文官（インデアンシビルサービス）と地方文官（プロビンシアルサービス）の二種に別たれて居る。前者には多く英國人の官吏を任用し、後者には多く印度人の官吏を採用して居る。此故に前者を英國官吏と云ひ、後者を印度官吏と云つた方が早分りだ。而して前者の俸給律と後者のそれとは、假令位置は同等であつても天地雲泥の差等がある。即ち一人の英國官吏の俸給は三人乃至四人の印度官吏の俸給に相當するのである。こゝらが屬國民の屬國民たる悲しむべき不面目であらう。勿論印度人の官吏中にも高等法院の判事とか、大學總長

若くは教授とかは英國官吏と同等の俸給を取つてる人がないでもない。由來印度に於ける英國官吏ほど高い俸給を取るものは、歐洲各國に全く其の類例を見ないのである、況や東洋諸國に於てをやだ！

ベビン・チャンドラ・パブーと云ふ人は印度革命黨の領袖株だが、彼曾てベンゴール州の民衆を煽動して曰く「今や吾人は印度を治む」と、然り若印度の中央政府及び地方政廳に就職して實際の事務を執る官吏の大多數が印度人なりと云ふ點から結論を下したら「今や印度人は印度を治む」と云つていゝかも知れない。何ぜなれば地租徵收の事務も多くは印度人が處理して居るし、區裁判所の繁雜多端な事件も多くは印度人の判事が解決するし、警察官の大多數も印度人であるからである。然し乍ら彼等は唯事務員として使役せらるゝだけで、決して自らの國家を料理する位置は得て居ないから、ベビン・パブーが幾ら威張つても、事實は決して印度人が印度を治めて居るのでない。英人から治められて居

るのである。

印度人の勢力增進

本篇の劈頭に言へるが如く、日露戰爭の結果は印度人をして大いに覺醒する所あらしめ、西にはブーナを中心とせる革命の渦卷が起り、東にはベンゴールを中心とせるストームの旋風が起つた。而して此のストームと彼の革命運動とは、英國政治家をして大いに反省し、恐怖の念を起さしむる所あらしめ、口先ばかりでなく實際政治の上に於いて、印度人を優待厚遇せざる可らざる機運を釀成するに到つた。即ち英本國にありてはモーレー卿が其の印度局會議委員として、各一人の印度敎徒と回敎徒を任命したのも此の結果であるし、印度にありては、ミントー卿が總督府會議の立法議員として、印度人中の著名な辯護士を任命したのも全く之がためである。斯くの如き高位高官は、其の數極めて少い。其れにも拘はらず、數名の印度人を採用するに到つた徑路を想到せば、如

何に印度人の勢力が增大し來つたかを納得することが出來やう。若し夫れ下級の中小官吏に到つては、年々歲々英國人や其の他の歐洲人及び合ひの子よりも純粹の印度人の方が餘程增加の割合を示して居る。一寸此處に脫線して、印度では、合ひの子のことをユーロージアンと稱へて居る。蓋しユーロービアンとインヂアンとが混合して出來た人間と云ふ意味なることを附言して置く。

印度には五十圓以上の月俸を取る官吏の椅子が約三萬ばかりある。其三萬の內五割は印度敎徒が占め、八分は回敎徒が占め、殘りの四割二分は歐洲人、合ひの子並に外國人が占めて居る。斯る多數官吏中、月に二百留(日貨百三十圓)の俸給を取る者が總數の半分以上である。若し二百留以上の月給を取る官吏の中で、印度人の占て居る割合を示せば

二百留比乃至三百留比——六割

三百留比乃至四百留比——四割三分

四百留比乃至五百留比――四割
五百留比乃至六百留比――二割五割
六百留比乃至七百留比――二割七分
七百留比乃至八百留比――一割三分
八百留比乃至一千留比――九十三人

而して千留以上の月俸を取る一千三百七十人の官吏中、印度教徒が七十一人回教徒が二十一人、即ち高級官吏の七分が印度人である。

今や印度政廳――中央及び地方を合せ――に奉職する大小の官吏の中六千五百人は英國人で、二萬一千八百人は印度人である。去れば二萬八千三百人の官吏が、英領印度に於ける約二億四千萬の人民と、藩王國に於ける約七千萬の生民とを支配し統治して居るのである。

政治上の最大缺點

現今印度の政治を通觀するに、英國は印度人に對し比較的に善政を施いて居ると謂はねばならぬ。勿論被治者たる印度人の方では色々と小言を云ひ、非難を試みつゝあることは事實だ。又眞綿で首を締めるが如き巧妙な而して裏面から見れば慘酷な政治を行ふて居るのも事實に相違ない。然し印度は何と云つても他に隷屬する國である。而して人民は自立の能力なく、自治の資格なく、獨立の權利なき隷屬の國民である。不平を並べ攻擊を事とするのは、亡國民の通有性である。假令彼等が幸ひにして獨立の民たることが出來るにもせよ、當分如何に彼等が非難攻擊を試みたからとて、治者たる英國民は自家の利益や獨立を犧牲にしてまでも、屬國の民に便宜を與へてやる譯には勿論行かない。

されど我輩が第三者の位置から公平に見て、否な如何に最負目に見ても現今の印度に於ける政治には一の大缺點がある。その缺點とは警察制度の不備であ

る。巡査の位置の餘りに低いことである。探偵の下手なことである。印度の巡査の位置は郵便配達夫以下である。斯る低い位置のものに學問あらんことを要望し、智識あらんことを希求するのは無理だ。彼等巡査が、馬車屋のお客に強請るを傍觀して置いて、後でコッソリ馬車屋から其の分前を取つたり、女將から賞與を貰ふのを當て込みにして、姪賣窟へお客の案内をしたりするのも無理はない。

勿論印度の警官は百人が百人とも、下等無學な印度人の巡査ばかりではない。都會になればなるほど英國人の警官も居る。然し英人の警官としても、兵士上りの無學文盲な奴が多く、惡い事は印度人の巡査よりも却つて多く働いて居て。人間の風上に置けないやうな代物が多い。泥棒や、人殺しの捕まらぬ方よりも、つかまる方が珍らしいと云ふ有樣だ。こんな奴等をゾロ〳〵養つて置いて、それで社會の安寧秩序を保たしめやうと云ふのだから驚かざるを得ない。先年現

總督ハーディン卿を狙撃して、暗殺しそこねた兇漢が、五千留の懸賞で探しても今尚見附らないさうだ。印度探偵の鈍腕さ加減、察するに餘りあるではないか？、我輩も曾て日探嫌疑の下に、度々探偵から尾行られたことがある。否我輩ばかりぢやない、日本の青年殊に梵語や哲學の研究に從事してるものは、大概印度の警察では日探帳につけてあるさうだ。所が印度の探偵先生は、素人の我輩にさへ、直ぐ探偵なることを看破されるほどの腕前なんだから、殆ど探偵の役は務まるまいと思はれる。少し印度の事情に慣れてからは、探偵釣りをやるのも面白い惡戯だ。若し夫れ汽車旅行の時などは、泥棒除けの御守札になるから、探偵につけられた方が寧ろ安全だ！

九　印度の軍政

鬼將軍と印度の軍政

今日の印度に於ける軍政は、今の英國陸軍大臣鬼智那將軍によりて改革完成された者である。鬼將軍の秋霜烈日の如く嚴格にして無妻主義を採れる人なることは名高い話だ。夫に就て種々の逸話もあるが、餘り脫線になるから此所には述べない。但し鬼將軍が英國に於ける武斷派政治家の第一人にして、今日の英國にとりて、是非なくてはならぬ大人物なることだけは知つて居らねばならぬ。若し今日の英國陸軍界に鬼將軍なかりせば、今回の大戰爭に英國兵を參加せしめて、兎も角も佛蘭西兵と相併んで獨兵に當らしむることは出來なかつたかも知れぬ。一國一人を以て興り一國一人を以て亡ぶと云ふが、今日の英國少くとも英國の陸軍は、鬼將軍によりて命脈を持續されて居ると云ふても蓋し大

いなる過言ではあるまい。鬼將軍は數年前まで印度の軍司令長官であつた。渠が印度に赴任するや、時の印度總督たりしカーゾン卿と印度の軍政改革の問題に關し意見を異にし、終にカーゾン卿をして總督の椅子を退き、空しく母國に歸還すべく餘儀なくせしめた、渠は仲々きかぬ氣の男である。

當時印度の軍政は總督府行政會議員の一人即ち陸軍大臣の手中に握られて居た。此メムバーに任ぜらるゝ人は常に英國著名の軍人で、印度に於ける有ゆる軍事上の問題に關する總督の顧問役と云ふ格である。勿論此の陸軍大臣の外に軍司令長官なるものゝ椅子が設けてある。此役に當る人も矢張り總督府の行政會議に於ける有力の一メムバーとして兵士の訓練、士氣の振興、軍隊の動員其他軍人の首長として必要なる職務上の責任を負ふて居る。然し此の軍司令長官は總督府の行政會議に如何なる提議をするにも、先づ陸軍省及び陸軍大臣に相談せねばならぬ樣に成つて居た。鬼將軍は此制度が氣に喰はなかつた。渠は軍

政上の各方面に各一局を創設し、司令長官をして各局の首腦たらしめんとの希望を懷いて居た、即ち軍司令長官をして印度軍政上の唯一のオーソリチーたらしめやうと考へて居た。然るに總督カーゾン卿は、鬼將軍の畫策に全然反對の意見を有て居た。即ち若し鬼將軍の意見通りに印度の軍政を改革せば、軍事に關する文官の監督權は、全く失墜せしめらるゝに到るだらうとの憂ひを抱いて居たのだ。加之鬼將軍の意見の如くせば、印度政廳は各省協和して異體同心の關係を保てる行政上の有機的組織に破綻を來し、印度の統治上に悲しむべき結果を將來するだらう。換言せば軍司令長官に軍政上の全權を握らしめなば文武併立し、一政府に兩頭目を戴く事となり、總督は文武兩政の總督にあらずして、只文官の頭目と云ふことになり、殆ど虛器を擁する作り人形と異なることなきものとなつて了うだらう、と云ふ理由で盛んに鬼將軍に反對した。されど英本國の內閣も鬼將軍の意見に贊同したものだから、カーゾン卿は憤然として

總督の位置を擲ち、本國に歸つてからも貴族院で盛んに反對の氣焰を吐いて居た。最も卿は當時已に印度總督としての五箇年の期限は切れ、第二期の五箇年の年期に入り、ベンゴール州民の勢力を殺んがため、ベンゴール州を二分して一を東ベンゴール及びアッサム州と名け、他を單にベンゴール州と呼び、兩州ともに副知事を置くやうにせしめた。印度人特にベンゴール人から盛に攻擊されつゝあつたのだから、あの時が善い退き時だつたかも知れぬ。否な本當は物議の起らない內に勇退して居たら餘程カーゾン卿も男を上げて居たらうに惜いことをしたものだ。

モ卿の調和的政策

カーゾン卿と鬼智那將軍との苦が〳〵しき論爭の中間に挾まつて、調停的妥協的政策を案出し樹立せしものはモーレー卿であつた。卿は印度の陸軍省を廢して其代りに軍務補充省なるものを新設して、文武兩雄の爭論を和解せしめた。

而して卿は此新設備は試驗的の設備にして、決して根本的に確立せられたる印度軍政上の組織と云ふ譯には行かない。何故なれば印度の軍政は英本國に取りて至重至要の問題にして、輕々に決せらるべきものにあらず、宜しく愼重審議の上に決せらるべき問題なるが故であると宣言した。斯くて卿は千九百〇九年に至り、軍務補充省のメムバーを廢したものだから、鬼將車は遂に初志を貫徹して印度に於ける軍事上の全權を握り得意滿面で所定の年期を了へられたのである。而して將軍は多分此の時印度から直だつたか又は一旦英國に歸つてからだつたか能く記憶して居ないが、兎に角此の時分に我が國へ觀光に來て大いに持て囃されて居られたやうだつた。

人望總督ミントー卿

カーゾン卿の後を承けて印度總督の職につきしものはミントー卿であつた。卿は溫厚篤實の貴公子的政治家であつたから當時恰度印度では、プーナの渦卷

やペンゴールのストームで排英思想の火の手の熾なる時なりしにも拘らず、印度の社會に好個の良總督として大いに人望を博められた。時のペンゴール州知事フレーザー氏の如きは三度も印度人から暗殺されやうとしたが、ミントー卿には誰もピストルを向けたものはなかつた。以て卿が如何に人望ある總督なりしかを推知するに足るだらう。一體人の長たらん人間は少しボットして居た方が好樣だ、惡く云へば不得要領だの盆矢理だのと云ふ形容詞を冠せられるかも知れんが、善く云へば溫厚にして包容力が大きいのである。此の意味に於て今の同志會總裁加藤男は故桂公に及ばず、政友會の原さんは故松田正久男に及ばざること遠くして遠しである。彼印度總督として近代稀に見る所の敏腕家たるカーゾン卿が、印度人から蛇蝎の如く憎まるゝのみならず、在印の英人からまで排斥攻擊せられたのは、卿の頭腦が餘りに明敏にして其腕が餘りに切れ過ぎたからである。而して卿に代つて總督たりしミントー卿が打つて變つて人望あ

うしは、其の容貌の如何にも溫厚にして又その包容力の大なりしがためである。今の印度總督ハーディン卿の如きも何ちらかと云へば切れ過ぎる方だから、ミントー卿のやうに人望を一身に集中することは出來ないやうに察せられる、特に印度のやうな國を治むるには、鈍腕では勿論よくないが餘り切れ過ぎる人では却て危險だ。

藩王國の兵士

印度の諸藩王國にも矢張り軍隊がある、其等の兵士は特に英國軍人の監督の下に養成せられ訓練せられたるものにして、イザ鎌倉と云ふ場合には、印度政廳は何日何時でも此等諸藩の軍隊を徵發することが出來るやうになつて居る。これ英國の下院議員カイル・ハーディー氏が「印度の諸藩王は英國の利益のため軍隊の經營を强請られて居るの觀あり」と喝破せし所以である。然り今日の狀態では印度の諸藩王は、莫大の經費をかけて軍隊を保有する必要はないのだ。

蓋し印度の諸藩王國が立派に獨立の體面を有して居るなら兎もかく殆ど英領印度と異なることなき隷屬的狀態に陷つて居るからである、隷屬の國が自らの金をかけて、主權を握れる國に利用さるゝと云ふことの外に、意味なき軍隊を保有し養成するが如きは、實に愚の骨頂と云はねばならぬ。

印度の兵數

千八百九十五年に於ける印度の軍隊は、ベンゴール軍、マドラス軍、孟買軍、パンジャブ軍及びバーム軍の五軍より成り、各軍の長は中將これに當つて居た。而して是等五軍に配置せらるゝ英兵が七萬四千百七十人、印度兵が十五萬七千九百四十一人であつた。千八百九十九年南阿に於いて英兵が慘々味噌をつけた時、ナタルを救はんが爲に繰出されたのは是等の印度兵だつたのである。

鬼將軍は印度軍隊の編成上に新しい組織を立てられたが、そは印度軍の主な任務は西北國境の防備にありと云ふ論據から割出された者である。而して有事

の曉には直に平時と同じ指揮官、同じ參謀の下に實戰に從事すべく、平和の時から組織を立てゝ訓練を施して置かねばならぬ。イザと云ふ場合になつてから指揮官や隊長や參謀を取り代る樣な事では、機敏な活動は出來ないと云ふ意見であつた。斯くて鬼將軍は印度の軍隊を南北兩軍の二大部に分けた。然り而してクエッタ師團、モー師團、プーナ師團及セカンドラバッド師團は南軍に屬せしめ、ペシャワル師團、ラワルピンディ師團、ラホール師團、メールト師團、ラクノー師團等は北軍に屬せしめた。

又今日の印度軍は英兵七萬八千三百十八員、印度兵十五萬八千〇五十四員、これに三萬四千の義勇兵と二萬の諸藩王國兵とを加ふれば、二十九萬の大軍となるのである。目下歐洲の戰場に繰出されて居る軍隊は主として北軍中のラクノー師團パンジャブ師團等である、若し夫の英領印度（藩王國を除き）軍の經費に到つては實に年額一億九千萬圓ばかりである。

自炊をする兵隊

英兵は勿論印度兵も亦一種の雇兵である。處が印度兵は其の食事を各々で調理して喰べて居る。即ち各自勝手に軍隊の中で自炊するのである。否な彼等は自炊しなければならぬ樣な社會組織の中に生れた生靈である。銘々勝手に自炊する兵隊これ廣い世界に珍無類とする所であるかも知れないが、印度人は宗教を異にし階級を異にするものとは決して食事を共にしない、假令同じ印度教徒であつても職業や階級を異にするものは、他人の作つた飯を喰はざるのみならず、席を同うして喰べることさへ出來ないのである、況や印度教徒と回教徒に於てをやだ。よし彼等は太陽が冷かになり月が熱かになつても、食事を共にするが如きことはあるまい。これ印度の兵隊さんがてんでに自炊なさる所以である。但し自炊と云つても日に三度米の飯を炊いて喰ふのではない、極めて簡單なものだから、太して時間も取らねば手もかゝらない。彼等が飯の作り方は

餘り冗長になるから此處には省いて置く。

一舉兩得の雇兵制

印度は農業國である。隨つて印度兵の大多數は農民であるから、毎年の農繁期には必ず幾週日の間が歸休を命ぜらるゝ、否御暇を貰ふて各自の家に歸り、主要の農務を濟ましてから復妻子に別れて軍隊生活に入るのである。蓋し此の制度は印度社會に相應しい一舉兩得の策である。何故なれば雇はれる兵士の方では、一定期間の歸鄕を許さるゝので愛しき妻子に會へるのみならず、農業に從事することによりて一家の收入を增し、雇ふ政府の方では此の歸休を許すことによりて、比較的に安い給金で壯年の男子を雇ひ入るゝことが出來るからである。印度では稻は植付てさへ了へば米は殆どひとりでに實のるから、植付後の手入は大の男が居なくてもいゝのだ。即ち田の草も除らなければ特別に肥料も施さないで米が出來るのである。

軍費問題

何處の國でも一番不生產的で而かも最も多く金のかゝるのは軍隊である。隨つて國民の間に軍備縮少の意見を吐く人が少くない。國民黨の犬養老は日本にばかり居るに限つた譯ではない。英國にも居れば印度にも居る。尤も英國や印度にはまだ一年兵役論を唱へ出した人はない。が日本の或る一派の非增師論に似たやうな議論を吐く人があるから面白い。

印度及び英本國に於ける軍備縮少論者は曰く、印度の軍隊は何國を相手として備へらるゝかと云へば、そは勿論露西亞である。然るに今や波斯問題に關しても將た又西藏問題に關しても、英露協商が成立したのだから、そんなに澤山の經費を投じて國防を嚴にする必要はない、印度の國境を犯さるゝ危險は英露の協商によりて殆ど全く艾除せられた。加之露國は先年日本と戰つて、其の創痍容易に恢復しさうにも見えないから、波斯の方面もアフガニスタンの方面

も、西藏の方面も、印度の國防は大して心配するに及ばない。こんな不急要な國防に莫大の金をかけるよりか、生産的の事業に資金を投じた方がいゝ云々と。

而して之が反對論者は說をなして曰く、戰敗の國民が再び武器を取つて立ち得ないと思ふのは大いなる誤見だ！何となれば窮鼠却て猫を嚙むの諺の如く、戰敗の不名譽を冠せられたる民衆は一般に神經が興奮するのが常であるから、そこいら中あたり散らかすのである。彼等は甲國に敗けた腹いせに乙國になりと勝たんとの志を懷かぬとも限らない。加之英露協商なるものは果して何時まで持續せらるゝか保證は出來ない。又この協商の背後に十分の武裝がなければ他國の侮を招くのみならず、協商の裏書が不十分である。武裝の裏書のない協商は、現在及び近き將來の世の中には殆ど反古紙同樣である。此故に印度の軍備は決して等閑に附してはならぬ云々と。但し今のやうな英兵や印度兵が露兵と相拮抗して兵士たる價値を示し、兵士たる面目を保ち得るや否やは別

問題である。富國强兵は吾々の理想とする所なれども、過去及び現在に於ける國社會の示す事實は常に富國弱兵、貧國强兵と云ふことを敎示して居るやうである。

十　政治運動

危險思想

印度總督府立法議會の民選議員ゴークレー氏は、近年議會の開かるゝ毎に、印度社會に於ける義務教育實施の急要を叫んで居らるゝが、印度の主權を握れる英國の官民は、これを以て危險思想膨脹の藥餌なりとし、常に反對の態度に出でつゝあることは、吾人が先に紹介せし通りである。然り彼等は印度社會に於る危險不穩の主要原因を以て教育普及の結果なりとし、若し印度に義務教育制でも實施したら、印度政廳は數年を出でずして瓦解の最後を遂げなければならぬと信じて居るらしい。然し乍ら不穩とか危險とか云ふ思想は、社會の制度が公平を得てさへ居れば、決して起るべきものではない。物平を得ざれば即ち鳴るとは昔ばかり眞理だつたのではなく、今でも又遠き將來でも不變の眞理で

ある、自ら不公平と云ふ色眼鏡を掛けて見から、世の中が物騒に見えるのだ！

スワデーシー

千九百五年頃から印度社會に起つた政治的運動が二つある。其の一は即ちスワデーシー・ムーブメントである、蓋しスワとは自らの謂ひにしてデーシーとは國を意味する女性名詞であるから、邦語に直譯すれば自國運動の義となる。自國運動とは印度社會に於いて印度人の手によりて製作せられたる物品を使用し、英國及び歐洲各國で出來た物品を使用すまいと云ふ、過激なる排英貨排歐貨運動である。此の運動は千九百五年頃から千九百九年頃まで、最も猖獗を極め、歐洲特に英國の工業界及び經濟界に大恐慌大打擊を蒙らしめた、當時印度人は品物によりては自國のものよりも、英國製品の方が價格の安いものあるにも拘らず、損失を見ながら英國品を買はないで印度品を買ふと云ふ有樣であつた。斯く排英排歐の思想より起つたボーイ・コットだから、昨年來我が國に提唱

された國産奬勵運動とは其意味が大分異つて居る、當時印度人は謂へらく、「亞細亞は一である故に日本製品や支那製品は印度製品と同じ待遇をしていゝ」、と此に於て日本品は段々印度社會に推奬せられ使用せらるゝ樣になつた。機敏なる獨逸商人の中には早速レッテルを取代へ日本製品と銘打つて盛んに印度人を胡魔化して居た。併しボーイ・コットと云ふものは大概の場合人爲的に起るものだから不自然の甚だしきものである。不自然の運動は決して永續すべきものにあらずして、必ず早晩自然の狀態に復歸せざれば止まざるものである。斯くて今では極端なる排英思想を抱ける少數人を除き、他の一般民衆は經濟の原理に隨ひ、成るべく印度製品を購入使用するけれども價額の引き合はないものまでも使用する必要はない、と云ふ自然の狀態に落ち附いて居る。若し彼の時分に我が日本人が、今日位でも印度に關する智識を有つて居たら、今頃はモット日印貿易が發達して居るに相違ないが、惜い哉、我々日本人中には印度のことを

天竺と呼び、天竺國は何國かお天道樣の近くにでもある國のやうに考へて居る人が大分多かつた時代だから、思ふ存分印度の商業界に食ひ込むことが出來なかつた。

日本商の大失敗

年月はよく記憶して居ないが何でも今から十年ほど以前に、機敏を以て自任する或一人の日本商人が、一時に何百ダースかの齒磨楊枝を印度に輸出して奇利を博しやうとした。處が其の齒磨楊枝の柄が牛の骨で出來て居たものだから一旦卸商から引き受けた小賣商人までが皆悉く其の楊枝を返戻するやうになり、機敏先生の大失敗大損失を招かれたことは、恐らく日印貿易史上に隱れたる有名な話であらう。然らば何故に其の齒磨楊枝は印度の社會に賣れなかつたかと云ふに、楊枝の柄が牛の骨で出來て居たからである、即ち我日本の商人が左に記述する印度の風習を知らず、印度人の宗教的信仰を考への中に置なかつ

たからである、極言せば印度に關する無智識の爲の失敗である。

由來印度人三億一千五百萬中の約七割を占る印度教徒は、決して牛肉を喰はないと云ふのが信仰上の一教條である。何せに牛肉を喰はないかとなれば、牛は印度人の生活上最もヘルプフルな動物であるからである。印度人は牛が居なければ殆ど一日でも安全に生活が出來ない、即ち牛の力を以て田を耕すべく、或は重荷を運ぶべく、牛の乳は酪、生酥、熟酥、醍醐等を製し、以て彼等が日常の食用に供すべく、牛糞は以て食物を煮る燃料に供すべく、其用途實に廣大である。斯も人類の生活に取てヘルプフルなる動物の肉豈夫食ふに忍びんやと云ふ思想から、牛は終に一種の神聖なるアニマルとなり、非常に鄭重に取扱はるゝ樣になつた。已に肉を食はない印度人だから其の骨を口にくはへないのは理の當に然るべき所である、吾人は印度人の牛肉を食はないと云ふ風習を見て、一概に迷信だ陋習だと罵倒する歐洲人の顰みに習ひ、徒らにハイカルを以て得意

としたくない。之を要するに我が日本人が日印貿易の健全なる發展を希ふならば、一層印度社會の根柢から調査し、研究することを怠つてはならぬ。今後の商賣は奇襲法では駄目だ、宜しく正攻法で秩序正しい態度を採らなければ、到底永續も發展も期せられない。

スワラージ

自國運動と同時に起つた政治的運動に、スワラージ・ムーブメントと云ふのがある。スワとは、前述の如く「自ら」の義にして、ラージとは「治める」、「支配する」等を意味する言葉である。故にスワラージ・ムーブメントは自治運動と邦譯してよい。されど、印度の自治運動とは、市町村制の自治を施かんが爲めの運動にあらずして、他國民たる英人の手によりて印度を治めしむるのは、不合理不自然の甚だしきものである。須らく英國の主權より脱して、印度は印度人の手によりて治められ、支配され、料理さるべきであると云ふ意味の自治運動で

ある。極言せば、名義こそ異なれ、一種の獨立運動である。

此の運動に、急進穏和の二黨がある。急進黨の頭目は、西にありてはブーナ市のチラーク氏、東にありてはペビンバブーやアラビンド・ゴース氏等であつた。が、彼等の或者は監獄に投ぜられ、或者は追放せられ、或者は佛領印度に亡命の客となり、今や直接に此の種の政治運動の牛耳を執ることは出來ない境遇に陷つて居る。併し是とても三年前のことだから、今頃は或は黄泉不歸の客となつて居るかも知れない。吾人はクリシナ・クマール・ミットラ氏の發刊にかかる『サンジバニー』誌の一節を譯出して、如何に排英的自治運動及ボーイコットの過激なりしかを紹介しやう。

『同胞諸君、吾人は諸君が英國貨物に觸れて、諸君の手を汚さゞらんことを望む。請ふ英國貨物をして倉庫中に腐蝕せしめ、白蟻と鼠の食餌たらしめよ』と。

此のクリシナ・クマール・ミットラ氏は、千九百八年にベンゴール州から追放された人である。氏と同時に追放された急進黨員、即ち印度の革命論者が八人あつた。而して氏の令嬢は印度有數の閨秀文學者であつたが、曾つて「シークの犧牲」と云ふ一小冊子を書いて、大いに印度人の爲めに氣焔を吐いた。ベンガリー紙は其の書を評して

『此の書は、水責め火責めの苛酷な迫害を忍びつゝある國民の、過去と現在と未來とを遺憾なく説破したものである。吾人は現に吾人の周圍を經過しつゝある重大なる出來事に對して、活眼を開き注意を拂ふ人々が、各自に一冊づゝ此の書を手にせざる可らざるものなることを、警告し推奬するものである。』

と云つて居る。以て、如何に此の書が印度社會にポピュラーなりしかを察すべきである。又その當時印度人が神に祈れる祈禱の頌に曰く、

『花飾の代りに人間の頭を佩用し給へる大御母チャムンダ神よ、あなたは今何處にいますか？今や苦しみ惱めるあなたの子女等は、頻にあなたを渇仰して居ます。見給へ、惡鬼共があなたの子女等を壓迫し、惡魔どもが印度を燒き盡して冷たき灰たらしめつゝあるではありませんか』と。

英人を呼ぶに惡鬼と云ひ、惡魔と云ひ有らゆる憎惡の形容詞を併べて印度人の敵愾心を挑發し、彼等の憤起努力を促したものである。

政治運動と新聞

印度人の政治思想を、向上せしめ普及せしむる上に、多くの効果を將來せるものは新聞紙である。而して印度人は、宗教により又は地方によりて言語を異にして居るから、新聞紙の文章も亦種々の言語を以て書かれて居る。印度政府は、斯く異なれる文字、異れる文章の新聞を一々檢閲せなければならないから、其の面倒さ加減は一通りでない。新聞檢閲の官吏の中には仲々怜悧な先生が居

て、只一通りの印度語を知れる英人の上長官には迚も解りそうもない部分で、而かも巧妙な諷刺的の排英思想を含める文章は取り擧げないで知らぬ顔の半兵衞をきめ込むことがあるさうだ。

宗教の上から政治思想の高下并に排英運動の多少を區別すれば、最も盛んに英人を排斥し、自治運動を鼓吹するものは印度教徒で、次が回教徒と波斯教徒である。但し此處には便宜のためシーク教徒や、アールヤ教會や、梵教會などは印度教徒の中に含めて置く。而して此等の諸宗教徒中、最も勇敢にして獰猛の氣象に富めるものは、第一シーク教、第二アールヤ教會の信者で、正統派の印度教徒は排英運動に於てこそ回教徒に勝れて居るけれども、勇敢の點に於いては遙に回教徒に劣つて居る。

又これを地方別にすれば、ベンゴール州にはベンガリー語の新聞があり、マラタ地方にはマラタ語、パンジャブ州にはパンジャブ語、マドラス州にはタミ

ール語、ビハール州にはヒンディ語の新聞がある。而して、政治思想の傾向並に排英運動の優劣も亦地方によつて異つて居る。政治思想の最も普及し且排英運動の最も盛なる地方は、矢張りベンゴール州とマラタ地方、これに次げるのがバンジャブ州に合併州及びビハール地方で、比較的に穏和な地方がマドラス州である。斯くて新聞紙の論調も上記の順序に隨つて、過激より穏和に、穏和より無氣力にと云ふ風な傾向がある。序に一言して置くが、印度の急進黨に對する穏和黨の領袖は、總督府立法議會に於ける民選議員の第一人ゴークレー氏である。君は印度有數の辯護士にして、學問あり識見ある大雄辯家である。印度の立法議會はゴークレー氏を有するが爲に生たる活氣を帶びて居る。若し君なかりせば、水の中で放屁するやうな議會になつて了ふかも知れぬ。君それ印度の爲に大に自重せられよ！

十一　藩王國

ネーチーヴ・ステート

予は假りに印度のネーチーヴ・ステートを藩王國と邦譯した。我が外務省では土豪國と飜譯してあるが、此れも適譯とは思へない。蓋しネーチーヴ・ステートとは英領印度政廳と協商の結果、印度の舊藩諸公の統治する領地の名稱なるが、時に或は印度の國境地方に國をなせる「ニポール」「カスミール」「ブータン」等の諸王國にも摘要せらるゝ名稱であるからである。勿論予の譯も決して適譯ではあるまいが、土豪國と云ふ譯よりは、幾分か上品で且原意に近くはあるまいかと思ふ。若しもつと適譯を敎へて貰へば何日でも改めるに躊躇しない。

印度の藩王國は其の數六百七十五國あるが、是等諸國の總面積は六十七萬九千三百九十二方哩即ち所謂印度帝國の全面積の三割强を占めて居る。而して是

等諸國に住する人民の總數は、七千八十八萬八千八百五十四人、即ち印度帝國全體の人口の二割二分五厘に當る割合である。

藩王國の君主は、表面上各自その國の法律を制定し、行政財政の全權を握ることになつて居るが、事實上は印度政廳より派遣せる顧問官から常に掣肘せられ、決して自由勝手にはならないらしい。加之ならず、諸外國又は諸藩王との交渉談判や、戰爭媾和の權力は擧げて英國政府の手に握られて居るから、獨立の體面は全く踏みつぶされてる譯だ。今左に六百七十五の諸藩王國中、その最も有名なるものだけを擧げて、現狀の大體を說明しやう。

ハイデラバッド

此國は印度半島の中央に位する一個の王國にして、其首府ハイデラバッドはムサ河の右岸に沿ふて建てられて居る。王は回教徒であるから、其の稱號をニザムと云ひ、西曆第十五世紀以來の舊家である。印度の諸藩王國中、勢力に於

ても領地に於ても最も强大であるから、諸藩王の集合の場合は、此國のニザムが一番上席に坐るのである。

國の面積は八萬二千六百九十八方哩で、人口は一千三百三十七萬四千六百七十六である。斯の如く此國は殆どベンゴール州と等しき廣大の面積を有するにも拘らず、人口は極めて稀薄にして、ベンゴールに於ける人口の約七分の二に過ぎない。今此の國に於ける一方哩の平均人口を見るに僅に百六十二人の割合にしか當らない。

然して此の國は自然の地理から云つても、或は住民の屬する人種の上から云つても、殆ど相等しき二つの地方に分たれて居る。テリンガーナ地方とマラトワーラ地方即ち是れである。前者は東方に位し後者は西方に位して居るが、二地方とも孰れも山岳多き土地である。併しテリンガーナ地方は大森林多く、雨量に富める砂地にして、能く米作の耕地に適して居る。之に反してマラトワー

ラ地方は多くの森林なく、又雨量も少く、土地は粘土質にして小麥及び棉の耕作にしか適せない。又此二地方を人種の上から見る時は、テリンガーナ地方の住民は多くドラウィディアン種族にしてテルグー語を話し、マラトワーラ地方の住民はマラタ種族にして、マラタ語か或はカナリー語を用ひて居る。正確に云へばマラトワーラ地方の北方ではマラタ語が勢力を有し、南方ではカナリー語が勢力を有て居る。

ハイデラバッド國には八十五箇所の都會がある。都會の住民は此の國全體の人口の一割八分を占めて居る。教育の普及せざること南方印度中の第一位を占め、讀み書きの出來るもの、男子は千人につき五十一人、女子は更に僅に四人しか居ない。

バロダ國

此の國の面積は八千一百八十二方哩にして、人口は二百〇三萬二千七百九十

八、これを一方哩の平均人口にすれば二百四十八人の割合となる。然して王は印度教徒、住民の大多數はビル種族にして、他に僅の野蠻種族が居るのみである。國の總面積の約四分の三は立派に開拓せられ、バジリ、ジョーワル及び棉などの耕作に適して居る。此國の王樣は曾て日本にも觀光にお出になつた人で、今日の印度諸藩王中最も聰明にして果斷の氣に富める御方である。渠は先年英國皇帝の印度戴冠式と云ふ晴の舞臺に、白の平常服で皇帝に拜謁し他の諸王に反して御辭儀も祿にしなかつたとかで、印度總督を初め諸大臣諸王公の心膽を寒からしめ、英本國の上下の人心を怒らし一時大變な物議を釀したことのある快男子である。

教育普及の程度は、讀み書きの出來るものが十人につき一人の割合であるが、之れを男女兩性に區別するときは、男子は六人につき一人、女子は十五人につき一人しか居ない。されど此の國は英領印度の諸地方と異なり、近年義務教育

の制度を施行して居るから、數年の後は印度有數の開化の地となるべきは吾人の信じて疑はざる處である。

マイソール國

此の國は印度半島の南方部に位し、面積二萬九千四百七十五方哩、人口五百八十萬六千一百九十三人、即ち一方哩の平均數百九十七人である。國は天然の地勢によりて二大部分、即ち山林地方及び平原地方とに分たれて居る。山林地方のことをマルナットと云ひ、平原地方のことをマイダンと云ふ。前者は國の東部を占め、後者は其西部に位して居る。

マイソールとは國の名なると同時に首府の名である。マイソール市の外に大小の都會は九十箇所あるが、その中で有名なのはバンガローである。バンガローは英國の文官及び軍隊の駐屯所であるから可なり賑つて居る。都會の住民は全國の人口の約一割一分に當り、一方哩の平均人口七千二百三十四人の割合となる。バンガロー附近より出づる片麻石は可なり高價なものである。其の上極めて容易く掘出さるゝから此國のいゝ財源の一となつて居る。又此國には「チーク」だの黒檀だのと云ふやうな色々の高價な木材があるから、諸藩王國中最も富める國の一となつて居る。氣候は最も暑い時が九十度位で、印度大陸の暑さとしては餘り烈しい方ではないけれども、人身の健康に適する土地ではない。土地は一般に肥沃なれども雨量少く又降雨が不定である。教育はハイデラバッド國に比すれば、餘程普及の程度が進んで居るけれども、南方印度の他地方に比するときは決して進んで居る方とは云へない。讀み書きの出來るものは——千九百十一年の統計——で男子九人につき一人、女子七十七人につき一人の割合である。宗教は印度教最も勢力を有し、回教及耆那教之につぎ基督教は極めて振はない。佛教も西曆前第三世紀頃一時旺であつたけれども今は殆ど見る影もない。而して此の國に住する原始土人の中には、また印度教にも回教にも

基督教にも改宗しないで原始のまゝの野蠻な宗教を奉じて居るものがある。

コーチン國

此國は印度半島の西部に位し、首府コーチンは海邊に沿ふて建てられて居る。面積は一千三百六十一方哩にして、人口は九十一萬八千百十三人、即ち一方哩の平均數六百七十五人である。斯の如く此小王國が他の藩王國に類例を見ない程、稠密の人口を有する所以は、此國が雨量に富み、土地また隨つて肥え作物の收穫極めて多きによるのである。此國の耕地面積の三分の二以上は米を作るに適し、又椰楡樹の繁殖に適して居る。而して椰楡樹は米よりも利益が多いから人民は一般に富裕である。國王はチェルマン・ペルマルの苗裔なりと稱して居る。ペルマルはケラヽ全國の統治權を握りしが、西曆第十六世紀に葡萄牙の爲めに亡ぼされ、コーチン市は一千六百六十二年和蘭人に奪はれ、第十八世紀の末葉には英國の領土となつた。國民の大多數は印度教徒で次が基督教徒、その

次が回教徒及び猶太教徒である。教育は土地豐饒の割合に發達して居ない。

カシュミール國

此の國は面積八萬四千四百三十二方哩、即ちハイデラバッド國よりも少しく大なれども、人口は僅に三百十五萬八千一百二十六人にして、ハイデラバッドの人口の四分の一よりも少い。今その一方哩に於ける平均人口の割合を見るに僅に三十七人にして、バルチスタン地方を除けば、印度の何れの地方よりも遙かに稀薄である。事態斯の如くであるから教育なども一向發達して居ない。文字ある人民の總數僅に五萬八千人と聞いては誰しも其の未開化なるに驚かざるを得まい。カシュミール人の容貌は實に立派なもので、性質も亦仲々怜悧である。世にカシュミール製作品として持て囃さるゝ毛織物や、刺繍のテーブル・クロスは皆この地方の人民の手工になるものである。此の邊は昔非常に佛教の盛なりし土地であつたが、餘程以前に回教に改宗し、今は佛教の佛の字だも知ら

ぬものが多い。

トラヴンコール國

此國は印度半島の最南端に位し、人口三百四十二萬八千九百七十五、面積七千五百九十四方哩を有す。而して此國は自然に二大部、即ち東方の山岳地方と西方の海岸地方とに分たれて居る。今此國の一方哩に於ける平均人口を見るに四百五十二人の割合を示して居るが、此國ほど地方によりて人口の稠密稀薄の差の大なる所はない。即ち西部海岸地方は一方哩に千〇八十一人住んで居るのに、東部山岳地方は一方哩僅に百五十二人に過ぎない。今その理由を考ふるに、東部地方は極めて多量の雨あるにも拘らず、地勢概ね險阻にして山岳處々に起伏し、面積の約半分は殆ど耕作が出來ないし、地質も亦比較的に瘦せ氣候も餘り健康に適せない。然るに西部地方は地勢概ね平坦にして、土地肥え灌漑の便もよく、極めて穀物の耕作に適して居るからである。此國の主要なる作物は米

なれども、其外多くの利益ある產物をも出して居る。敎育はバアマを除けば印度帝國の諸地方中此國ほど普及して居る所はない。そは總人口の約一割五分が讀み書きの能きるを見て知るべきである。宗敎は印度敎と基督舊敎が最も盛んにして、他の諸宗敎は殆ど語るに足りない有樣である。斯く此の國に基督舊敎の盛んなる所以は此の國が海外と交通の便よき海濱に沿ふて立ち、葡萄牙人だの西班牙人だの和蘭人だのが早くから出入して熱心に布敎した結果である。

ラジプタナ

此の地方には大小二十一個の藩王國がある。其の總面積十二萬八千九百八十七方哩にして、人口僅に一千〇五十三萬四百三十二、即ち一方哩の平均人口八十二人に過ぎない。而も此の地方の住民の約一割三分は都會に住して居るから、田舍に於ける人口が如何に稀薄なるかは推して知るべきである。此の地方に於ける敎育普及の程度は、中央印度地方にこそ優つて居れ、決して進歩發展しては

居ない。讀み書きの能きるもの、一方哩に男子の五十九に對して女子はタッタ二人しか居ない。二十一箇國の藩王國中最も敎育の進歩せるはシロヒ（Sirohi）國にして、其の最も遲れたるはドールプール（Dholpûr）及びトンク（Tonk）國である。此の地方にては讀み書きの能きるものが五十人につき一人の割合を示して居る。若し之を宗敎の上より區別するときは、回敎徒は印度敎徒に遲れ、原始印度人は殆ど全く無學文盲の輩ばかりである。此の地方は雨量十分ならず、土地また隨つて瘦せ、印度の他地方のやうに立派な收穫は得られない。然し乍ら駱駝及び羊等の牧畜が盛んだから、人民は一般に太した困窮はしないのである。

ニポール國

中央亞細亞高原の南方の峻坂は、東の方はヒマラヤ（Himalaya）西の方はヒンヅ・クーシュ（Hindu-kûsh）の二大山脈によりて二分せられて居る。而して

ポール國は西はカマオン地方、東はシキム國に堺し、恆河ゴグラ（Gogra）及びゴンダク（Gondak）等の大河の源泉をなして居る。此の國の面積も人口も固より正確なことは分らぬけれども、大凡五萬四千五百方哩、人口二百五十萬から三百萬までの間と思へば大差はあるまい。此の國は云ふまでもなく雪山の裾野であるから、ペンゴールの平原よりも高きこと三千呎乃至五千呎である。隨つて氣候も所謂印度半島のやうに暑くない。首府カトマンヅ（Khatmandu）は、南北の長さ十二哩東西の廣さ十哩の都會である。英國政府の派遣せる顧問官は此處に陣取つて內政外交を監視して居る。傳へ曰ふ。カトマンヅの谷は其の昔一の湖なりきと、或は事實だつたかも知れない。ニポール人は、印度人よりも丈短く鼻低く皮膚の色黃味を帶び我が日本人の相貌に能く似て居る。現今英領印度に於ける雇兵中最も勇敢にして機敏なるは、ニポール國民の一種族なるグルカ（Gurkha）族である。彼等は我々日本人に會へば、其相貌が餘りよく似て居

るものだから、大變なづかしさうな目附で眺めるのが常だ。ニポール國は他の藩王國と異なり、特殊の位置と歴史とを有て居るから、獨立權が幾分か餘計に認められて居るやうだ。但し對外問題に關しては常に印度政廳の掣肘を蒙つて居ることは云ふ迄もない。我々日本の佛教學者が梵語の原本蒐集の爲、ニポールに入らんと欲するも入ること能はざるは、印度政廳からニポール國への旅行券を下附して呉れないからである。

中央印度

此地方の總面積は八萬三千六百方哩にして、人口は正確なことは分らぬけれど、大約九百萬人位のものらしい。中央印度と云へば印度文明の中心のやうに思はるゝかも知れんが、こは英領印度政府が政治地理の上から與へた名稱で、印度文明の中心が此の地方に集つて居る譯でも何でもない。此の地方は名義だけは百三十一の小藩王又は酋長によりて支配せられて居るけれども、事實は印

度政廳の派遣する、中央印度代官なるものによりて料理せられて居る。代官はインドール(Indore)に駐屯し、ビル(Bhil)、ボーパル(Bhopal)、グナ(Guna)、グワリオル(Gwalior)、インドール(Indore)及び西部マルワ(Malwa)に副代官を置いて地方の政治を監督せしめて居る。

藩王若しくは酋長はラジプト族、ビル族、モハメダン、マラタ、婆羅門族等であるが、而し其臣民は、非アールヤン族、アラブ族、アフガン族、波斯族、蒙古族等である。斯の如く人種が混雜錯綜して居るから、言語宗教風俗の上に殆ど統一する所なく、隨つて教育の普及せざること印度第一と稱せられて居る。

是等藩王國の外に、まだ澤山のネーチーヴ・ステイトがあるけれども、一々列擧するの煩に堪えないから、左に其所屬の州名と面積とのみを記して置く。

州名	面積
孟買州	七三、七五三

中央州　二八、八三四
西北州　五、一二五
五河州　三五、八一七
ベラル　一七、七一一

之を要するに印度の諸藩王國は、餡を拔き去つた饅頭見たやうなものである。彼等諸藩王や酋長等は饅頭の皮だけ預けられて、王樣で候の、殿樣で候のと威張つて見た所で初まつた話ぢやないのだ。彼等の位置を譬ふれば、恰も我が德川時代に於ける眞宗以外の佛僧と同樣、只空位と空名とを預けられてホクホク喜んで御座る有樣である。

十二　印度の宗教

宗教的國民

若し吾々日本人に對して他國人が、「貴方はどなたです」(Who are You?)と問ふたらば、吾々は言下に「私は日本人です」と答ふるに相違ない。又吾々が歐洲人に對して、「貴君はどなたです」と尋ねたら、彼は言下に「私は英國人です」とか、「佛蘭西人です」とか、「獨逸人です」とか、或は「露西亞人です」とか答ふるに相違ない。然るに印度では、其返事の仕方が全く趣を異にして居る。即ち吾々が印度人を捕へて「貴君はどなたです?」との問を發すれば、彼は言下に「私は印度教徒です」とか、「回教徒です」とか、「波斯教徒です」とか或は「耆那教徒です」とか、必ず自己所屬の宗教の名を以てするのが常だ。此の一事を以て見ても、印度人が如何に宗教的の民族であるかを察し得らるゝ。然り印

度のことは宗教を離れては、決して根本的の調査も研究も出來ない。

印度人が殆ど先天的に宗教的民族であるとの善惡、損得は固より別問題として、吾々日本人が一層日印間の親善を計り、日印貿易の隆盛を謀るには、是非とも根本的の調査研究が必要である。而して印度の事情を根本的に調査研究するは、是非とも先づ宗教的信仰から取り調べてかゝらねばならぬ。若し我々日本人が、此方面の調査研究を等閑に附し去つたならば、未來永劫日印貿易の隆盛も望まれなければ、日印間の關係を親密にすることも出來ない。蓋し印度人の生活は生れてから死する迄、宗教を以て初まり宗教を以て終るからである。

ヒンヅーの語義

印度教徒のことをヒンヅーと云ふが、印度人が、「私はヒンヅーです」と云ふ言葉の中には三つの要素、即ち宗教と家系と國とが含まれて居る。此の故にヒンヅーたらんと欲しても、印度の國でヒンヅーの家に生れたものでなければ、

ヒンヅーたることは出來ない。換言せば、外國人外教徒は、此儘此の世ではヒンヅーに改宗することは出來ない。尙之を云へば、ヒンヅーとは生れ乍ら具有し遺傳的に繼承する生得權の問題である。但しヒンヅーが、佛教徒たり、基督教徒たり、回教徒たることは決して不可能ではない。

一言に印度教徒と云つても、其中には一元論的の信者もあれば、多元論的の信者もある。汎神教的の信者もあれば一神教的の信者もある。シヲ神を最高最上の神として崇拜する者もある。梵天を崇拜する者もあれば、ウィシヌやシヲの配偶神を崇拜する者もある。其他樹木岩石河水等に靈ありとして、其等の諸靈を崇拜するものもあれば、或は鮮血淋漓たる動物供犧を行ふて、神をなだめ慰め得と信ずる者もある。或は祈禱讃頌を神に捧ぐるを以て、宗教の能事了れりと信ずる者もあれば、宗教と云ふ美名の下に隱れて、言語道斷の醜行を敢てする秘密教會のメムバーもある。

要するに印度教と云ふ言葉の中には、右に列擧せるが如き多種多樣の教義や理論が含まれて居るから、包容の極めて大なるものなることを知らねばならぬ。吾人は前に印度教徒と云ふ言葉の中には、宗教と家系と國との三の要素が含まれて居ることを説明したが、茲に今一つの社會組織と云ふ要素を加へねばならぬ。蓋し階級制は印度教の根本的特色の一にして、人は一定の階級に屬せなければ印度教徒たることは出來ないからである。

ヒンヅーの數

印度に於けるヒンヅーの總數——千九百十一年の統計——は二億一千七百萬人餘即ち印度全人口の三分の二强を占めて居る。今これが英領印度と藩王國とに分て見れば、英領印度に於ける全人口の六割七分、藩王國に於ける全人口の七割八分がヒンヅーである。更に又ヒンヅーの印度帝國各地方に於ける散布の割合を見るに

マドラス州	八割九分
合併州	八割五分
中央州及びビハール地方	八割二分
孟買州	七割六分
アッサム	五割四分
ベンゴール州	四割五分
オリッサ	三割
チョタ・ナグプール	七割二分
バアマ	三割
マイソール	九割二分
カシュミール	二割二分

と云ふ統計を示して居る。以上列擧の外、最も奇妙な現象は、ハイデラバッ

ド藩王國が、約六世紀の間回教徒の王に統治されて居るにも拘はらず、左にコーラン右に劒の威風も、人民の固き信仰を動かすこと能はざりしものと見え、同國の住民の大多數は印度教徒なることである。然りハイデラバッドに於ける印度教徒の割合は、マドラス州を除ける英領印度の何れの地方よりも多い。

改宗運動

前にも云へるが如く、印度教の第一義諦より見れば他の宗教から印度教に改宗することは絶對に出來ない。然しながら此に一つの問題となるのは、其の昔治者の權力を以て、強いて印度教から、回教なり基督教なりに改宗せしめられたる者の子孫も、亦昔の宗旨に復歸することを許すこと能はざるか否かである。多くの婆羅門の中には無理矢理に印度教から轉宗を強請せられ、泣く〳〵治者の權力に畏服してゐるものがある。彼等は何とかして元の通りの印度教徒に歸りたいとの希望を抱き、熱心に改宗運動否な復歸運動を試みた。而して正統

派印度教徒も彼等の事情境遇を諒察し、嚴肅なる贖罪淨化の儀式を擧げて復歸を認めることに決定した。所が數代の間印度教から回教又は基督教に改宗せし結果、強ひて牛肉を喰はしめられ、今は平氣の平左で牛肉を喰ふやうになつて居ると云ふことが分つたものだから、彼等の復歸改宗は絶對に不可能の事柄となつて了つたのである。されど強請的改宗と云ふが如き野蠻なやり方は、最早過去の事實として殘つて居るのみで、今は決して人民の信仰に立ち入つて迫害を加へるやうなことはない。予は曾て印度教徒の一女と回教徒の一男と愛し合つて互に悶へて居ると云ふ事實談を聞いたが、宗教によりて縛せらるゝ、彼等に取つては實に重大問題であらう。戀と宗教と孰れが重いか？斯る問題で煩悶考量の餘地を有する印度社會は實に幸福だ。然り戀の前には宗教も親もあつたものでないと云ふやうな社會は餘り有難くない。

印度教徒の增加率

千九百〇一年より千九百十一年まで十箇年間に、印度教徒の數は五分許り增加して居る。然るに回教徒の數は同じ年間に七分增加し、シーク教徒は三割七分、佛教徒は一割三分增加して居る。然らば印度教徒は何故に他教徒に比して增加の割合が少いかといふに、开は彼等が宗教的社會的の習慣風俗となれる早婚と寡婦の再婚禁止との二つの理由に依るのである、印度教徒の女子は大概十二三歳位で結婚する。勿論印度の十二三歳の女子は、日本の十五六歳の女に相當する程熟成して居る。併しそれにしても子孫を繁殖せしめ得るには少し早や過ぎる。而も一度嫁したが最後正統派の印度教徒たる限り、決して再婚してはならぬ。此故に印度には二十歳以下の若後家が澤山居る。子孫繁殖と云ふ方面から眺めたら、最適應の年齡に達せる頃、或は達せない內に寡婦となり、寂しくも空閨を守つて一生を送るものが多いから、印度教徒の人口が他教徒のそれ

に比して增加しないのも無理はない。尤も此早婚の風は印度教徒間に限つた譯ではない、回教徒の間にも矢張り早婚が行はれて居る。されど回教徒は印度教徒の如くに絕對に再婚を禁じないから年若い寡婦は再婚して子孫繁殖の任務を完うする。斯くて印度教徒は其教理の根柢に於て立派な立脚地を有つて居ながら、形式、習慣、風俗等の陋見に囚はれ、終に他教徒に後れを取りつゝある。此ヒンヅーの頑冥固陋な早婚と寡婦の再婚禁止と階級制度の峻別とに反對して起つた宗旨の一つが「ブラフマ・サマージ」或はベンガリー化して「ブラモー・サマージ」とも云ふ——即ち梵教會である。近頃の流行兒たる「タゴール」氏の父は、此の教會の大成者と云はれる程熟心有力な信者であつた。

梵教會

此の教會の御開山は、「Râma Mohan Rai」(一七七四年生)と云ふ人である。渠は其の父がムアールシセダバッドに於いて、回教徒の王公に隨侍して居たも

のだから、アラビヤ語や波斯語を習ひ、また回教の聖典たるコーランの智識も獲得した。又渠の家は正統派の印度教徒にして婆羅門種族だつたものだから、幼少の頃から印度教の神話や傳説や宗義や哲學を修習して居た。而して渠は十六歳の時、家庭の野蠻な行持に反抗せし結果、非常に迫害を加へられ、遂に其の家を飛び出した。然るに渠が二十歳の頃再び父から呼び戻されたものだから、何かの職業にあり附く方便として、英語を學びつゝありしが、間もなく東印度會社に一椅子を得た。千八百十四年に渠はカルカッタに移住して、頻に印度教徒の頑冥と社會的風習の固陋とを罵じり初めた。かくて渠は、公然その父から絶縁勘當を宣告された。渠は其の父の死後愈益大膽になり、種々の言語を以て書き表はした幾多の小冊子を出版して、有志の間に頒與した。千八百二十年に梵教會が出來た。之よりさき千八百十五年頃から、數名の友人が渠の下に集つて居たが、段々仲間が殖えて、特別に一室を借り入るゝとなり、終にカ

ルカッタに於て、梵教會と云ふ名の下に、一神教的教會の創立を見るに到つたのである。千八百三十年頃には、會員の數が益増加し、梵教會の會堂が出來上つた。渠が會堂建設の目的の一節に曰く、

『此の會堂は秩序を守り、眞面目にして宗教的なる敬虔の念に富める人々の有らゆる種類の會合のために建てらる。而して宇宙の創造者たり保護者たる、永久、不滅、不變、不動の實在——神——を崇拜し恭敬せんとするものゝために建てらる』

ラーマ・モハン・ライ氏は此會堂の建設を了へ、開堂式を擧げてから、間もなく歐洲遍歴の旅路に上りしが、不幸にもブリストルの旅舍に於いて、永久不歸の客となられた。印度宗教改革の端緒を開ける教祖已に逝く。萎靡として振はざる印度の思想界に、渠の後を承けて之を大成せしもの、抑何人なるか？。

梵教會の大成者

現代思想界の流行兒の第一人たる、ラビンドラ・ナート・タゴール氏の父、デウェンドラ・ナート・タゴール（Devendra Nath Togore）氏こそは、ラーマ・モハン・ライ氏の後を繼承して立た梵教會の大成者である。渠は千八百十八年を以て呱々の聲をあげ、廿歳の時深刻なる宗教的の靈感にうたれ、永い間沈思冥想に耽つたが、遂に浮雲の如き浮世の富貴名譽の束縛より脱して、自家の心中に神の王國を築きあげ、平和の郷に法喜禪悅の無垢なる生活を營み初めた。而して渠は千八百三十九年即ち二十一歳にして、眞智教會（Tatb tvabodhinsahâ）を組織し、千八百四十三年に梵教會と合同し、大に教會の發展に努めたのである。今此教會の主なる特色を列記すれば、

（一）吠陀經典の權威を認めざること

（二）階級の峻別を認めざること

（三）偶像崇拜を排斥すること

（四）他宗教を誹謗し又は輕蔑するが如き言動をなさゞること

（五）早婚の弊風を打破すること

（六）世には唯一の神がある。而して其の神は萬物の創造者である。渠に對する愛と渠が愛することをなすことのみが渠を崇拜する所以の道なるを信ずること

等である。デウェンドラ・ナート・タゴールと梵教會との關係は、恰も我が日本の曹洞宗と瑩山禪師、若しくは眞宗と蓮如上人との關係に似た所がある。蓋し若しも曹洞宗に瑩山禪師なく、眞宗に蓮如上人なかりせば、是等二宗は今日の盛大を見ることが能きなかつたかも知れない如く、若し印度の梵教會にタゴール氏なかりせば、彼の教會も今日の樣に、堅固な地盤を造ることが能きなかつたかも知れない。今千九百〇一年より同十一年に到る十箇年間に於ける信徒增加の

割合を見るに、十年前よりも三割六分の信者が增えて居る。而して是等信徒の大多數は、ベンゴール州特にカルカッタ市民にして、敎育の最も進歩せる智識ある階級の人々が多いから賴母しい。

アールヤ敎會

梵敎會よりも更に迅速なる發展をなせしものは北方印度に起つたアールヤ・サマージである。此の敎會は、カチアワル（Kathiavar）に生れたダヤーナンダ・サラスワティと云ふ有名な一學者の唱道せるものにして、唯一神敎なる點に於ては、梵敎會と同じだけれども、吠陀經典の權威を信認する點が異なつて居る。今此敎會の主なる特色を列記すれば、

（一）力を極めて偶像崇拜を排斥すること

（二）階級制度の宗敎的根據を承認せざること

（三）女子敎育を奬勵すること

（四）寡婦の再婚を許すのみならず且之を奬勵すること

（五）尙武の精神を鼓吹すること

等である。此の敎會のメムバーも矢張り智識階級の人が大多數で、今や其數實に二萬四千三百人に達して居る。一體我が日本などでは、智識階級の人ほど無信仰なものが多い樣な傾向であるが。印度では、智識階級の人ほど、眞面目な宗敎心に富める人が多い。宗敎心のない人には、永遠の世界を達觀する識見が起らない、永遠の世界を達觀するの明なきものは、一切萬事を彌縫して胡魔化さうとする。彌縫的生活をなす人に、社會の敎化を托し、國事の料理を任すは、甚だ危險千萬である。口先ばかり理想だのヘチマだのと云つて見た所で、自家心中に綻びない無縫塔を建立し、全生活の上に無縫塔の面目を實現しなければ、吐き出す所の千言萬言は皆悉く蛙鳴蟬噪だ！。

今それアールヤ敎會や、梵敎會の信者たる學者先生の多くは、彼等が日々の

行持が、仲々立派であるから、言はず語らずの内に他を感化する底の力がある。統計表の示す所によれば、アールヤ・サマージのメムバーの數は、千九百十一年度に於いては、千八百九十一年度に於ける數に六倍し、千九百一年度に於ける數に二倍して居る。換言せば十年前に二倍し、二十年前に六倍の發展をなして居る。而して是等のメムバーの多くは、印度帝國の合併州、及びパンジャブ州の住民である。斯く迅速の發展をなせる所以は、此の敎會が專ら布敎師の養成に苦心した賜である。即ち敎會が如何にせば布敎師を多くし得るかと云ふ問題よりも、如何にせば眞の布敎師を作り出し得るかと云ふ問題に重きを置き人格中心の布敎師養成に熱中した結果である。ブラント氏の記する所によれば此の敎會の開祖ダヤーナンダが、千八百七十五年、初めて孟買にアールヤ・サマージの支部を立てし以來、千八百八十三年即ち渠が死せし頃には、パンジャブ州及び合併州の諸地方に亙り、三百以上の支部が出來て居た、以て其の布敎

傳道の如何に好成績なりしかを知るべきである。

抑もダヤーナンダの宗敎的運動には、二個の目的を含んで居る。一は印度敎の改革、二は國家の革命即ち之である。然りダヤーナンダ自身が、非常に熱心なる宗敎家なると同時に、極めて熱烈な愛國者であつた。此の故に渠の提唱せる、アールヤ敎會の綱領の一として、從來印度人間に閑却せられたる尙武の精神の重要不可缺なることを鼓吹して居る。其の結果として、アールヤ敎會のメムバーは印度社會で、最も勇敢なる團體となつた。之れ印度政廳が、シーク敎徒と共に、此の敎會を目して、將來最も恐るべき團體なりと見る所以である。極言せば、アールヤ・サマージは、平和なる宗敎の中に、軍隊的精神を吹き込むを以て一の特色として居る。平和と軍隊、これ一見甚だ矛盾せるが如き觀ありと雖も、平和運動の後に、武裝の實彈を以てするのが現代及び近き將來の國社會の採りつゝある、且採らねばならぬ方針なりとせば、印度をして一個の立

派な國社會たらしめんことを目的とする、アールヤ教會が、尙武の精神を鼓吹するのも決して怪しむに足りない。

シーク教

此の教の開祖は、ナーナク（Nânak）と云ふ人である。渠は千四百六十九年ラホール市在のタルワンヂに生れた。渠の父は正統派の印度教徒で、茱種問屋の業に從事せしが、渠は幼少の頃より沈鬱性の人で、長ずるに及び印度在來の諸宗教や種々の哲學を研究するに隨ひ、父の家業に從事することにも滿足が出來ず、又印度教や回々教の教義にも滿足することが出來なかつた。此に於いて か、渠は眞理探究のため家を飛び出し、諸方の學者や宗教家を歷訪したり、古聖先哲の勝躅を巡禮したりした揚句、復び己が家鄕に歸つて、鄕黨の間に積善の生活を勸め、無形の眞神を崇敬すべきを說き、同情の生活を以て一生を送つた。渠が初めて自家所信の教義を發表し、說教せしは千四百九十年であつた。

是れ抑々シーク教の起原である。渠の主義は數年の間に、非常の速度を以て弘まり、當時萎靡衰頽を極め、闇黑なる印度の思想界に於ける一道の新光明を投げ、渠の教への下に走せ參ずるもの頗る多く、新宗教の基礎漸く確立するに到つた。而して此の宗の信者等は、教祖の提唱にかゝる教義の中に含める聖典を熱心に研究し、平靜冥想の生活を營んで居た。又彼等は其の主義信仰の布教傳道を擴張し、パンジャブ州以外の他地方にも多くの信徒を得、南方海邊の都會パトナ市に於てすら、シーク教徒の一大學を設立する機運を迎へたのである。

然るに第十七世紀の初頭に當り、此教の第十祖ゴーウィンド・シンハ（Govind Singh）は、此の教の從來の主義に加ふるに、一つの新しき特質を以てした。渠は生れながら武人的の氣象に富みしかば、冥想平靜の一方に偏せるシーク教徒をして、武勇果敢の氣象を養はしむるに努めた。その結果此の教徒は印度で名

高き勇敢尚武の一團となり、回教徒の王や英國政府をして大分手古摺らしめた。而して今尚印度政廳の恐怖する所となつて居る。これ即ち此の教に一名軍隊的宗教の稱を得せしめたる所以である。

シーク教徒の多くはジャト（Jat）族にしてパンジャブ地方に於ける宗教上の優越權を握つて居る。而して彼等は藍色の衣を着け、鋼鐵製の腕環を嵌め、以てゴーウィンド・シンハによりて吹き込まれたる、尚武勇敢の精神の表彰となして居る。今千九百十一年度に於ける統計表を見るに、此の教の信徒は實に三百萬人を以て數へられて居る。勿論此の宗の信徒の大多數はパンジャブ州に於ける住民で此の州の全人口の一割二分を占めて居る。

佛教

印度に生れたる佛教は、錫蘭、支那、西藏及び日本等の諸國に於いて、今尚人類教化の聖務を盡して居るけれども、そが生國の印度にありては事實上全く滅亡

せりと云つてもよい程衰頽して居る。人或は錫蘭及びバアマを以て、印度本部に屬するものゝ如くに考へて居るけれども、錫蘭は只印度洋中に國をなせる一島國にして、決して昔から印度本部と、政治的にも地理的にも殆ど關係はない。又バアマは政治上の意義に於いてのみ印度と稱することを得れども、古來の歴史及び地理學の上より見るときは、これ亦決して印度本部ではない。故に錫蘭バアマあたりの佛教を以て、所謂印度佛教なりと考ふるは大いなる誤見なりと云はざるを得ない。

純粹の印度佛教として、今尚ほ印度本部に餘命を繼げるは、オリッサ（Orissa）地方に於けるサラーク（Sarâk）と云ふ一小社會に過ぎない。蓋しサラークとは梵語のスラーワカ（Srâvaka）即ち「聲聞」と云へる言葉より轉訛せるもので、此の社會に屬するもの僅に二千人に過ぎない。而して此社會のメムバーは悉く菜食者である。彼等は時に或は印度教の神々を崇拜することもあるが、專ら佛

陀を恭敬頂禮し、ワイサーク月の滿月の日には、毎年盛んなる祭典を營むを以て恆例として居る。蓋し彼の地で傳ふる所によれば、此の月の此の日は釋尊の御誕生遊ばせし日にして、又大涅槃に入り給ひし日であるからである。而して此のサラーク社會の人々は、決して印度敎の祭典は營まず、又婆羅門僧を請し來つて法要を行ふやうなことはない。

バアマ及びセイロンに於ける佛敎の勢力は大したものであるが今此處には詳說する暇がない。最近年に到り、印度本部に起れる佛敎徒の一運動は、聊か吾が徒の注意を惹くに足るものがある。即ち一千九百〇六年に、南方の一藩王國の都會バンカローアに起つた南方印度釋迦佛敎徒敎會（The South India Sakya Buddhist Society）是である。此の敎會の目的とする所は、印度の人民をして再び佛敎徒に化せしめ、昔以上の印度帝國の黃金時代を作り出さうと云ふにある。彼等は千九百〇九年にはコーラに一の支部を設けた。千九百十一年度の統

計表によれば、マイソール王國内のみでも已に六百二十人の會員が出來て居る。吾人は斯る眞面目なる敎會の愈々益々發展して、所期の大目的を達成せんことを希望に堪へないものである。

パーシー

ペルシャの國に起つた Zoroastrianism ——又の名を拜火敎とも云ふ——の信者のことをパーシーと稱するやうになつたのは、彼等がアラビヤの回敎徒に襲はれて、國も奪はれ、家も取られ、而して終に回敎徒に改宗すべく强請せられた結果、昔ながらの國風及敎を棄つるに忍びず、遠く印度の國に逃げ込んで來からである。彼等はもと〳〵、印度アールヤ人種と同文同種の同胞なりしが、西洋紀元前幾千年かの昔、彼等同胞は、東西に分れて移住することゝなつた。而して東せるものは印度アールヤ民族として、世にも稀なる印度文明の花を咲かせ、西せるものは波斯國に入りて、所謂今日のパーシーとなつたのである。

勿論回教徒の侵入掠奪に際し、大多數の波斯人は回教に改宗せしが、意志强く信仰の固いものだけが、自分の國を逃出して、百年ばかりの間 Khorasan と云ふ所に住し、更に Ormuz に移つて、此處に十四五箇年間を費し、終に印度のグジャラト地方に移住したものである。千八百八十一年の調査報告によれば、波斯の國に殘つて、今尙昔ながらの宗教風俗を守れるものが五百戸ばかりある。而して彼等は白い着物を着ること、新たに家を建てること、馬に騎つて外出することは嚴禁せられて居る。つまり波斯の國では、回教徒にあらざれば人にあらずと云ふ有樣であるから、事情境遇の許すものは、皆悉く外國へ逃げ出さゞるを得ないのであらう。今此の宗教の特色を擧ぐれば、

(一)唯一無二の大神 (Hormazd) を信じ渠に祈禱をさゝぐ。

(二)大神の創造にかゝる、天使の存在を信ず。

(三)天使等は、人間を補佐し、利益すべき力を大神より賦與せられ居ることを信ず。

(四)淨意、淨語、淨行これ人類の道德の基本なることを信ず。

(五)大神のシムボルとして火を崇拜す。

バーシーが火を大切にすることは事實を見ないものには丸で虛言と思はれる程である。何せに火を大切にするかとなれば、宇宙の萬物の中で、火ほど神のシムボルとして適當なものはないと云ふ思想から來て居る。彼等は決して火を粗略に取扱はない。又決して火を消さないやうに注意する。既に火を粗略にしないから、彼等の社會では決して喫煙するものがない。此のパーシー社會は第十八世紀の初め頃「Rasami」及び「Kadimi」の二宗派に分れたが、其の原因を詳細に述ぶれば、餘りに學究的になるから此處には遠慮する。只その分派の原因は、一年間の時日の勘定、即ち曆に關し、二種の異論が起つた爲めなることだけ位は知つて貰ひたい。

教義梗概

波斯の聖典を Zend Avesta と云ふ。此書は(一)讃詩——印度の吠陀讃頌に類するもの——(二)法律法規及び(三)聖歌——太陽其他の諸神を讃するもの——の三部より成り立つて居る。而して此の教の主張し信仰する神は、形相もなければ色相もないから、吾々の肉眼を以て觀ることは能きない。渠は三千大千世界の中の、何處に居ると定つた場所はない。渠の德は人類の不完全な言葉を以て讃め盡すことも能きなければ、不十分な文章で說き盡すことも能きない。又渠の榮光は、人類の狹い限りある心を以ては思ひ浮べ、若しくは考へ盡すことすら能きない。若し夫れ渠以外の神を信ずるものは、異端外道の甚だしきものである。『拜火敎問答』は人類の行爲に關し說いて曰く、「若し人が誰かによりて救はるべしとの信仰の下に罪を犯すやうなことが在つたら、斯は大なる誤りである。何せなれば人の救濟者は、彼自身の行爲にして、其れ以外に別に彼の罪

を淨め、惡を打ち消すことを得るものはないからである云々」と。以て此敎徒の神觀及び道德の如何なるものなるかを察することが能きやう。

パーシーの勢力

印度に於けるパーシー社會の美風良俗に關しては、既に印度の敎育界と云ふ題下に之を述べて置いた通りである。今千九百十一年の統計によれば、印度に於けるパーシーの總數は、僅に十萬〇〇九十六人に過ぎない。されば斯る小社會、小團體の勢力は、極めて貧弱なるが如く見えやうけれども、彼等が孟買市及び其の附近の經濟界に於ける勢力は實に大したものである。彼等の總數十萬〇〇九十六人の約九割は、孟買州及び其の附近に住し、其の半數以上は孟買市の市民として、經濟界の重鎭となつて居る。而して殘の一割ばかりの者が、印度各地に散在して居るのである。今千九百十一年の統計と千九百〇一年のそれと比較して見るに、パーシーの人口は十箇年の間に六分三厘增加して居る。更

に千九百〇一年の統計と、千八百九十一年のそれとを比較して見ると、其十年間には約四分七厘の増加を示し、千八百九十一年の統計と、千八百八十一年のそれとを比較し見るに、此十年間には約五分三厘の増加を示して居る。然らば何故にパーシー社會は、他のシーク教徒、又は佛教徒の社會に比し増減の率が少いかと云ふに、パーシーたることも亦印度教徒たると同じく、殆ど既得權の問題なるが如く考へられ、且他宗教の信者に對して、強ひて改宗を勸めもせず、又輕々しく自家所奉の宗教を棄てゝ、他宗教の信者となるが如きこともないからである。

回教徒の死生觀

印度の回教徒は何事に關しても一般に宿命論的信仰を有つて居る。即ち彼等は天災地變の大出來事より苦樂順逆の小出來事に到るまで、皆悉くアッラーなる神樣の命じ給ふ所なれば人力の如何ともすること能はざるものなりと信じ

て居る。換言せば、生るゝも神樣の命じ給ふ所、死するも亦神樣の命じ給ふ所と云ふ、堅い觀念を腦裡に刻み込んで居る。隨つて彼等は極めて諦めのつき易い性質となつて居る。これ醫士先生が、回教徒の社會に於ては、他の社會に於けるよりも、大變に氣樂だと喜ばるゝ所以である。成る程、生るゝも死するも、皆神樣の仕業だと信ずる人は、醫者が聊か筍先生であつた爲めに、死なずにいゝ命を死なしても、醫者に對して太した恨みはないに相違ない。予は曾て筍先生の口から、「醫者するなら回教徒社會の醫者となるに限る。彼等は醫者の方で、少々ばかり遣り損なつても決して恨まない。何せなれば病人が重くなるのも神樣の知ろしめす所、死するも亦神樣の知ろしめす所なりと信じ、死生は人間たる醫者などの知つたことでないと思つて居るからである」と聽いたことがある。斯の如く諦めのつき易い人間は、執拗な人間よりも遙に幸福であるかも知れない。其の代り一歩を誤れば個人としても國家としても、積極的の進歩

發展は望まれない。換言せば人爲を盡して天命をまつと云ふ、穩健の態度まで漕ぎ附けない内に、退歩墮落して了ふ弊害に陷り易い。

回教徒の分布

印度に於ける回教徒の總數は、六千六百萬餘人、即ち印度全體の人口の約五分の一に當るのである。而して彼等の最も優勢なる地方は、西北國境州の全人口の約九割三分と、バルチスタン（Baluthistan）地方の約九割一分を占めて居る所である。今是等二地方以外、各州又は各地に於ける回教徒分布の現狀を示せば、

地方名	回教徒の數
バンジャブ州人口の	五割五分
ベンゴール州人口の	五割三分
アッサム地方人口の	二割八分

ボンベイ州人口の	二割
合併州人口の	一割四分
ビハール及オリッサ地方人口の	一割
中央州及ベラール地方人口の	四分
バアマ人口の	三分五厘

となる。——千九百十一年の統計に依る——又印度の藩王國に於ける回教徒の數は、英領印度に於ける割合よりも餘程少い。こは勿論藩王國全體の上より打算してのことであるが、諸藩王國中回教徒の優勢なる所は、バルチスタン及びカシュミール地方の藩王國にして次は、バンジャブ州ベンゴール州及び合併州内に於ける藩王國等である。

歴史と分布の關係

回教徒の分布地圖を見れば、彼等が印度に侵入し勢力を扶殖せし歴史の大體

を通觀することが出來る。即ち回教徒の數の最大多數を占めて居る西北國境州及びそれに接近せる地方は、パターン種族だのモガル種族だのが、屢侵入し來つて印度を征伏せし根據地の樣になつた所である。之れに反してベラール及び中央州並に印度半島の東海岸には回教徒の數が極めて少いのは、これ明かに彼等の勢力が遠く東方海岸地方にまで及ぶ能はざりし證據である。但しベンゴール州に於いて、二千四百萬の回教徒、即ち印度全體の回教徒總數の三割六分を占めて居るのは、ベンゴール州は數多のパターン族の回教徒王によりて支配せられたからである。而して此の地方に於ける回教徒への改宗者は、多く衰頽期に屬せし佛教徒だつたらしい。由來世界の宗教史上佛教徒ほど容易く他宗へ轉び込むものはない。こは確に吾が佛教徒諸君の考一考せらるべき重大問題の一ではあるまいか？

基督教

千九百十一年の統計によれば、印度帝國に於ける基督教の總數は、三百八十七萬六千二百〇三人である。而して其の内三百五十七萬四千七百七十人が純粹の印度人で、殘りの三十萬一千四百三十三人が歐洲人若くは合ひの子である。今これを基督教各派に配分すれば、印度のクリスチアン全數の五分の二がローマン・カソリック宗徒、九分の一がローモー・シリアン宗徒、十二分の一づゝがアングリカン及びバプテスト宗徒等其の主なるものである。若し夫れメソディスト宗徒、プレスビテリアン宗徒、組合教會のメムバーなどに到りては、全數の五分又は四分の割合に過ぎない。又これを印度の各地方に分布せる上より見るときは、マドラス州、コーチン王國、及びトラワンコール王國に於ける基督教徒が、印度全體の同教徒數の五分の三を占めて居る。其の他は散り〳〵バラバラで殆ど云ふに足らない、由來印度ほど歐米の基督教徒が、力瘤と金とを入

れた國もあるまいが、又印度ほど傳道の惡成績な所もあるまい。こは畢竟印度人が一體に哲學的なるがため、基督教教理の淺薄を學ばぬのと、印度人の階級觀念と基督教の平等主義とが相容れないがためらしく思はれる。尤も實際社會に應用せられつゝある上から見れば、基督教の平等主義や博愛主義も大分怪しいけれども、兎も角も印度人の階級制とは殆ど氷炭相容れないと云つてよからう。

耆那教

印度土着の宗教の中で佛教と殆ど同時代に起つたのが此教である。が、此教は佛教の如く普く印度社會を風靡することもなく、又他國民の間に布教宣傳もせられなかつたものだから、素人筋には其の名前さへ知られずに居る。耆那教を羅馬字で Jainism と書いてあるのを見て、大阪の或る大新聞の記者が禪宗なりと速斷し、金光燦爛たる Jain Temple を禪宗の本山だと書いたのは、今から

六七年前のことだつたと記憶して居る。此教の信徒は僅に百二十五萬人ばかりしか居ないから、其數の上から云へば餘り重要な位置を占めて居ると云ふことは出來ない。併しながら、信徒の大多數は大金持が多く、大概何かの貿易業に從事して居て、印度の實業界に於ける重要の位置を占めて居る。既に金持の多い爲めでもあらうか、印度で御寺の立派なことは諸宗教中此の教の右に出づるものはない。何處に行つて見ても此の教の御寺は實に立派なものばかりだ。

今これを印度宗教地圖の上より大觀するに、一百二十五萬の信徒中、三十五萬三千人ばかりは、ラジプタナ、アジミル及びマルワラ地方に住し、八十一萬五千餘人は、上記地方に接近する藩王國、及び英領印度に住して居る。而してアジミル、マルワラ及び孟買州内に於ける藩王國の耆那教徒は、同地方の全人口の約四分を占め、ラジプタナ地方に於ては其の三分を占め、バロダ王國に於いては二分、孟買市に於いては一分を占めて居る。勿論カルカッタや其他の東

部印度に於ける都會にも此の宗の信徒が居る。併し彼等はマルワリーと稱し、多くはマルワラ其他上記の地方から、商業のために入り込めるものである。パーシーと耆那教徒とは印度に於ける商業的宗教民族と云つてよい。蓋し南方印度に極めて少數の農業に從事する耆那教徒があるのみで、他は皆殆ど何にかの貿易業又は商賣に從事して居るからである。

耆那教の將來

千八百九十一年度の統計と千九百〇一年及び千九百十一年度の統計と、都合三回二十箇年間に於る統計を比較し見るに、耆那教徒は年々歳々確に減少しつつある。即ち千九百〇一年度に於いては、千八百九十一年度に於るよりも五分八厘の減少を示し、千九百十一年度に於ては、千九百〇一年に於るよりも六分四厘の減少を示して居る。これ蓋し耆那教徒の社會にありて生産率よりも死亡率が多いと云ふ譯ではなく、彼等の多くは印度教徒の社會組織に從ひ、印度教徒

と結婚もすれば、印度教の神樣をも祭るものだから、彼等を計算する時に、印度教徒の中に入れて了ふ場合が段々多くなつて來たものらしい。バンジャブ州や合併州及び孟買州に於ける耆那教徒が、印度教徒の風に習ひ、宗教上の儀式祭禮等、少しも印度教徒と異なることなき有樣を見て之を知るべきである。千九百〇一年より同十一年に亘る十箇年間に、合併州の耆那教徒は一割五分の減少を示し、バンジャブ州の耆那教徒は六分四厘、孟買州に於いては八分六厘の減少を來して居る。故に此の趨勢を以てせば彼等は近き將來に於て殆ど全く印度教徒に吸收せらるゝに至るかも知れない。

生氣崇拜教

地球上にはまだ澤山の原始的野蠻種族が棲息して居る。而して生氣崇拜教とは、世界の諸地方に散在する原始的種族の間に行はるゝ種々の迷信を總稱した言葉である。彼等の宗教的觀念は極めて粗雜なもので宇宙の萬物——地にあり

ては山川草木禽獸蟲魚、天にありては日月星辰――皆悉く何等かの威力と害意又は善意を有するものだと信じ、人間の病氣及び不幸災難などとは、皆外界の威力の致す所なりと思料して居る、又彼の原始的民族は魔法や巫術をも信ずるのが常である。所が印度では、是等の原始的信仰と婆羅門教とが接觸した結果、印度教徒だか生氣崇拜者だか區別がつかなくなつて居る場合が多い。日本の佛教などにも可なり此の生氣崇拜の、遺風が這入り込んで、風呂場には風呂の神様、便所には便所の神様など、譯の分らぬ梵語なまりか何かの名前を位牌に書きつけて祭つてる御寺がある。お釋迦様はそんな怪力亂神の御說教は遊ばさなかつた筈だ！

宗教的統一

之を要するに印度には印度教以下生氣崇拜教に至るまで、色々様々の宗教宗派が入り亂れて、宛然世界宗教の展覽會が開催せられて居る如き趣がある。

然らば此等の宗教宗派は何うしても統一せられ得るの望みはないかと云ふに、固より是等の諸宗旨を打して一丸となすことは不可能に相違ないけれども、彼等が思想信仰の根柢に流れつゝある共通の觀念を捉へて宗教的に民心を統一することは必ずしも不可能ではあるまいと思はれる。然り！若し將來印度人の力で、印度を統一しやうとする人あらば、渠は必ず先づ宗教的統一を企つるに相違ない。宗教的統一と云つた所で甚だ漠として分かり兼ぬるとならば、印度三億一千五百萬の生民の最大多數の頭腦には、皆同じく「無限を樂む」と云ふ觀念思想が流れて居るから、此信仰この觀念を捉へて布教傳道さへすれば、必ず印度を宗教的に統一する事が出來る――特に佛教によるがよい――ことを斷言して置く。

十三　印度の文學

近代文學の特徴

印度思想界の產物は、哲學にまれ文學にまれ、皆宗敎的着色を帶びて居ることは今更吾人の喋々を要せざる程有名な事柄である。が、特に印度の近代文學は、宗敎と引き離しては殆ど了解すること能はざる程宗敎的である。

宗敎的信仰(Bhakti)の人生に重要缺く可らざるものなることは、印度敎の聖典として名高きバガワド・ギーター(Bhagavad-gîtâ)の一章に力を極めて主張してある。而して後世のプラーナ(Purâna)書及び特にバーガワター(Bhâgavatâ)書にありては、人格的の神に對する信仰を力說して居る。

泰西の印度學者は近世印度敎の三位一體神としてブラフマ(Brahma)ウィシヌ(Vishnu)及びシワ(Siva)を擧ぐるのが普通であるが、彼等は(一)最高神(二)

其の權化及び(三)其の勢用を以て、三位一體なりと信ずる印度敎徒の眞面目を知らないらしい。こは印度の近代文學を觀れば、直に解らねばならぬ筈だが、何う云ふものか特に此點に注意を拂つた人が少い。

近代印度文學書の多くは、直接に宗敎的見地に立つてものせられて居る。然り！假令その文學の形式は、叙事詩又は抒情詩或は散文の何れかであるにせよ、內容の眼睛となれるものは、必ず神樣に關する事柄である。換言せば宇宙の最高實在たる神の權化が、近代文學書の眼睛となり主人公となつて活動して居る。而して近世の印度社會に最も人氣あるものは、ラーマ(Râma)か、クリシナ(Krishna)か又はシワ(Siva)か或は开が勢用の發現としてヅルガー(Durgâ)の形相をとれる御方かである。之を要するに是等權化の何れかを作中の主人公に擬することが、近世印度文學の第一の特徵である。

次に中世以前の文學書は、その形式は多く韻文、言葉は梵語であるが、近世

のは十八世紀以前までは專ら韻文の形式を採り、それ以後初めて散文をも採用し、言葉は梵語でなく、專ら各地方の言語を用ひて居る。これ即ち近世印度文學の第二の特徴である。

次に梵語文學即ち中世以前の文學家は多く高貴の家に生れて富裕の生活をなせし人々であるが、近代文學者の多くは、生家の系統が下階級に屬するか、又は高級の家に生れても、少くとも餘り富裕ならざる生活をなせし人々かである。勿論多少の除外例は何れの場合にも許されねばならぬ、が、中世以前の梵語文學の作家と近代の地方語文學の作家とを比較し見るに、前者は多く印度の社會で尊ばるゝ家に生れ、後者は多く印度の社會から餘り尊ばれない家に生れて居る。此の意味に於て、予は假りに中世以前のを貴族文學と呼び、近世のを平民文學と名づけて置く。

例せば梵語文學家の泰斗たるカーリダーサ（Kâlidâsa）と云ひバーガワティ

（Bhâgavati）と云ひシャンカラ（Sankara）と云ひ、彼等は皆印度社會に於ける最上階級の婆羅門族の家に生れ、各當時の大王に事へて殿中生活をなせる人々である。然るに近代文學の大家中の大家と呼ばるゝツルシーダース（Tulsi Dâs）は、その生家こそ婆羅門族なれ、生れた許りで兩親に棄てられ、諸方遍歷の一苦行者に救はれ、極めて貧しい生計の中に教育せられた人である。又彼のカビール（Kabîr）は機織り職人で、ダージー（Dhâdû）は貧乏なる一綿打人であつた。

更に眼をマラタ文學に注がんか、マラタ語韻文の開祖と云はるゝナーマデーワ（Nâmadeva）は印度社會に餘り持てない一裁縫師で、その後繼者として名高きツカーラーマ（Tukârâma）は四姓の最下級なる首陀族の小商賣人であつた。又彼の南方印度地方に於て文學界の明星と歌はるゝチルワルワル（Tirvalluvar）は、下級中の最下級族として、普通の人から人間扱ひをされないパリア（Pariah）であつた。終りにテルグ（Telugu）語文學の泰斗たるウエーマナ（Vemana）は無

學文盲なる一百姓の子である。之を要するに近代文學の大家は、概して卑賤の家に生るゝか、若しくは少くとも立派な教育を受くる能はざる家に於いて育てられし人々が多い。是我輩が中世以前に於ける梵語文學者の生活狀態と、近代文學家のそれとを比較對照し、近世文學を平民文學と名け、これを其の特徴の一に數へんと欲する所以である。

韻文と散文

近代の地方語文學は、韻文時代と散文時代との二期に分たれる。十八世紀以前までは近代文學も中世以前の梵語文學と同じく專ら韻文を以て書かれ、散文は韻文の註釋か何かにでなければ全く用ひなかつた。否な！韻文の註釋を書く場合でさへ韻をふくんで、行文を流暢且優美にし音樂的ならしめんことに腐心したものだ。然るに第十八世紀以後、英領印度政廳の確立と共に散文の使用が盛んになつたので、散文文學と云ふ新生面を打開するに到つたのである。彼の

梵教會の開山たるラーマ・モハン・ライ（Râma Mohan Rai）の如きは、實にベンガリー語散文文學の鼻祖として、印度文學史上に異彩を放つて居る。彼は宗教の改革者たると同時に文學の革命家であつた。

三種の對象

印度の近代文學、即ち地方語文學を十分に紹介せんは、限りある紙面と時間とでは到底不可能の事柄である。是故に吾人は印度社會に最もポピュラーなる三種の宗教的對象に關する文學を中心として、而も梗概の梗概を述べて此の篇を結ばねばならぬ。三種の信仰的對象とは、前にも一言せるが如く、ラーマとクリシュナとシワ又は（ヴルガー）である。而して印度の各地方の國語を以て最も多く且廣く、文學的に說明されて居るものは、第一にラーマ、第二にクリシュナ、第三にシワ或は（ヴルガー）である。以下此の順序に隨ひ、彼等に關する各地方語の文學を解說し、最後に宗教以外の文學の特色を考察し紹介しよう。

ラーマ文學

西暦第十二世紀中に南方印度のコンジーワラム（Conjeevaram）に出現した大學者にラーマーヌジャ（Râmânuja）と云ふものがあつた。渠は印度哲學界の花と云はるゝシャンカラ（Sankara）阿闍梨の不二論（Advaitism）に對抗して、二元論（Dvoitism）を唱へ出した吠檀多哲學派一方の驍將である。それと同時に、渠は南方印度に於て、ラーマ文學を創立した一偉人である。渠が學說の要點を擧ぐれば、

（一）宇宙の實在たる最高神は人格的存在なり。

（二）神は渠を崇拜し信仰するものに對し、慈悲同情の念に滿てる屬性を有し給ふ。

（三）神は死者の靈を己が身邊に呼び寄せ、永へに極樂安穩なる生活をなさしめ給ふ。

（四）渠は其の廣大無邊なる慈悲同情を示現し、人類を救濟せんがため、種種樣々の形をとりて此の世に出現し給ふ。

こと等である。而して神の權化の最尊、最貴、最高、最大なるものはラーマチャンドラ（Râma-chandra）である。ラーマーヌジャの創唱にかゝる此宗旨は、北方印度地方には餘り多く弘まらなかつた。蓋し开は此の宗旨の食事沐浴及び着衣等に關する規則が餘りに嚴重に過ぎてる爲であらう。

ラーマーナンダ

第十五世紀の初頭に際し、此の宗旨に於ける拔群の秀才たりしラーマーナンダは、宗旨の規則に違反せりと云ふ嫌疑の下に、宗門擯斥の宣告を受けたものだから、渠は大いに怒つて、恒河流域の地方に入つて一の新宗派を創唱した。而して渠の宗派では印度敎從來の階級に關する頑冥固陋な規則を打破し、如何なる階級の人と雖も自由に敎會の人たることを許した。これ渠が十二使徒と稱

せらるゝ大門弟の中に、革匠だの、理髪職だの、回教徒生れの機織り職工だのと云ふ種々の職業に從事せし人々ある所以である。而して玆に最後に擧げた回教徒の機織り職工こそは、その後カビールパンティー（Kabir-panthî）宗と云ふ一新派を樹立した、有名なるカビールである。

カビール

從來の印度教徒が習慣的に實行せる偶像崇拜や、回教徒學者の詭辯の風習を大膽に攻擊して、殆ど完膚なからしめたのはカビールである。渠の教に從へば、ラーマは神の權化でなく、實に宇宙の創造主である而して心靈的存在である。故にラーマを拜むものは、其形や偶像を拜まず、單刀直入、ラーマの精神を拜まねばならぬ。眞理その物を拜まねばならぬ。カビールには澤山の著書がある。其内最も有名なるは、サーキース（Sâkhîs）とラマイニース（Ramainis）である。前者は五千頌の金言を集めたもので、後者は渠が教義を說明せる短篇の

詩集である。渠の著書は今尙ヒンディー（Hindî）語の話さるゝヒンヅスターン（Hindustân）の全土に亘り、熱心なる愛讀者と賞讃者とを有つて居る。蓋し渠が人道と眞理とに最も力瘤を入れしため、永世不朽の文字として持て囃さるゝ所以であらう。此カビールの教義を土臺として、ラジプタナに於いて一の新宗派を創唱せるものはダーヅーである。

ダーヅー

ダーヅーはグジャラート（Gujarât）の、アマダーバード（Ahmadâbâd）に生れた一綿打職人であつた。渠は凡ての殿堂や偶像崇拜に反對して、單にラーマの名號を返唱すべきを力說した。早い話が、日本の淨土宗で南無阿彌陀佛を繰返し繰返し唱ふるが如く、此の派ではラーマの御名を繰り返し〳〵唱ふるのである。渠も亦西部ヒンディー語で書いた澤山の著書を殘して居るが、今尙東部ラジプタナ地方に多くの愛讀者を有つて居る。カビールの教義より出發せる今一

の宗旨をシーク(Sikh)教と云ふ。シーク教はグル・ナーナク(Guru Nânak)の創立する所にして、其の聖書をアーディグランドと云ふ。

アーディグランド

此の書は、數多の文學者の作にかゝる讃頌を集めたもので、千六百〇一年にアルジユン(Arjun)と云ふ人によりて集成された。讃頌の一小部はパンジャブ語と、マラタ語より成つて居るが、大部分は矢張り西部ヒンディー語で書いてある。上記三種の文學は、同じくラーマーヌジャの教理より發出すと雖も本家本元のラーマーヌジャ宗に似た所は極めて少い、或は寧ろ共通點はないと云つてもいゝ位だ!。

ツルシーダース

ラーマーナンダより七代目の弟子にツルシー・ダース(Tulsi Dâs.1532—1623)と云ふ人があつた。彼は印度宗教の改革者として大成功家の一人である。然り!

釋尊を除けば、印度の社會に未だ曾て彼が如く多くの信者を吸收し得たものはない。彼より前代のカビールと云ひダーヅーと云ひ、數十萬を以て數ふる信徒を得たけれども、而も二十世紀の今日に到るまで、約九千萬の信徒より、聖者恩師として渇仰せらるゝものは、只彼れ一人のみである。彼は啻に宗教改革の大家たるのみならず、今日まで印度社會が生み出せし詩人中の大詩人である。彼は教會の建立を輕視し、只管その知己親戚の間に、如何にせば人類各自の救濟解脱を成就し得べきかを勸說し指教するを以て滿足して居る。「豫言者は鄉黨の間に容れられず」と云ふけれども、彼の場合は此の諺は殆ど全く當つて居ない。有らゆる宗教の形式——汎神教でも一神教でも多神教でも——有らゆる信仰若しくは無信仰の內容など、凡て是等は彼に取りては、一大眞理の副產物たるか、又は其の片影を認むるものに過ぎなかつた。彼が教義の眞髓とも云ふべき點を擧ぐれば

(一)世には最高唯一の實在あり。

(二)罪惡は憎むべし。されど开は罪人を汚すがためにあらずして、最高唯一の實在と兩立すること能はざるがためである。

(三)人は生れながらにして、救濟するに堪ざるほど罪深いものである。

(四)それにも拘はらず、最高の實在は廣大無邊の慈悲心の爲の故に、罪ある世人を救濟せんとて、ラーマの形をとりて世に出現し給ふた。

(五)是故に人類は一つの神なるラーマによりて救はるべし。渠は啻に廣大無邊の慈悲心を有するのみならず、人類の過失及び誘惑の如何に大なるかを實際の經驗によりて知れる御方である。又渠は縱令自ら罪を犯すこと能はずと雖も、常に救ひの御手を擴げて、罪ある人の渴仰信賴し來らんことを待ち受け給ふ。」云々

など其主なるものである。ツルシー・ダースの敎義中吾人の注意せざる可らざる

は、罪惡の性質に對する觀念とラートマの神聖なる人性、この二點が初めて彼によりて明確にせられたことである。ツルシー・ダースの敎義は、最も美しき韻文を以て說破せられて居る。彼は單語に富める東部ヒンディ(Hindi)語を自由自在に使ひ分け、韻文の調子を音樂的にし、又その形式を優美にすることにかけて、特に非凡熟達の手腕を有して居た。試みに彼が作品中の最も名高いラーマ・チャリタ・マーナサ(Râma Charita mânasa)(ラーマの冒險の湖)と云ふ宗敎的叙事詩を繙き見んか、我輩の叙述說明の決して虛妄にあらざることを看破することが能きやう。

ラーマの冒險の湖

此の詩はラーマの冒險譚を歌ひ出せるものなれども、決してワールミキー(Vâlmikî)の梵詩ラーマーヤナの翻譯ではなく、全く一個獨立の創作物である。若し人一たび此書を讀まんか、文學的大天才の寄與する高き感興に醉ひ、深き

印象の腦裡に刻み込まれしを感得せざるを得まい。彼が文體は其の主題の異なるに隨つて意のまゝに變つて居る。例せばラーマが其の生母と離別する光景を叙する場合には、如何にも其の眞光景を讀者の眼前に髣髴たらしめ、そゞろに深刻なる悲哀の感情を動かさしめ、戰場の光景を叙するときは、如何にも勇猛急劇の言葉を用ゐて、讀者をして身親ら戰場にあるが如き感を起さしめぬば止まない。

彼は單に一個の修行者ではなく、實際生活の苦樂を嘗め盡した人である。換言せば彼には妻もあれば子もあつた。即ち彼は一家の主人公として、夫婦生活の妙味をも經驗し、親ら嬰兒を懷いてネンネコ歌を歌ふ喜びも、愛兒を喪へる悲しみの情をも實驗した人である。されば彼は世に在りふれた世間知らずの法師や、人情の機微を解せぬ一人よがりの坊さんとは全く其類を異にして居る。斯くて彼は世の中知らずの學者先生を相手にせず、無辜の民衆を相手にした。

彼は民衆と共に生活し、民衆より布施を受け、民衆のために祈り、民衆のために道を說き、民衆のために法を談じ、民衆の願ひを以て己が願ひとなし、民衆の幸福を以て己が幸福となし、民衆の憂ひを以て己が憂ひとなし、造次にも民衆のためにし、顚沛にも民衆のためにすると云ふ態度であつた。而して彼は又天下を放浪遊歷して當時の大人物とも交はりを結んで居た。

「ラーマの冒險の湖」の外、彼は十一種の名著を出して居る。其の內最も有名なるはギーターワリー(Gîtâvalî)とカヰッターワリー(Kavittâvalî)及びヴヰナヤパッタリカー(Vinaya-pattrikâ)等である。而して彼が文學的著作は凡て東部ヒンディイ語で書いてある。東部ヒンディイの文學が、印度に起りたる諸文學中、最も大にして又最も價値あるものとなつたのは、彼の文學が世に知られてからのことである。吾人が前に彼を呼んで、啻に宗教改革家としての大成功者たりしのみならず、印度屈指の大文豪大文學者であつたと云へるもの、決して過賞の

言ではあるまい。

クリシュナ文學

クリシュナ（Krishna）はマハーバーラタ時代の古から一の神格として承認せられて居た。が、彼の信仰崇拜は特にバーガワタ・プラーナ（Bhâgavata-purâna）の第十卷に力説せられて居る。然り而して此信仰はジャヤデーワ（Jayadeva）のギーター・ゴーキンダ（Gîta-Gôvinda）――印度詩中の詩――に於ける不朽の文字となつて現れた。されどそが通俗的の宗教として組織立てられたのは、十六世紀の始に當りマッラ附近に棲へる一婆羅門ワッラバアーチャールヤの力に歸せなければならぬ。渠の女婿チャイタンニャはベンゴールに於ける所謂チャイタンニャ宗の開祖である。

クリシュナ崇拜の意義とラーマ崇拜のそれとの間には大いなる相異あることを注意せねばならぬ。何せなれば此の意義の相異あるに隨つて文學的述作の內

容及び形式も亦大いなる相異があるからである。ラーマ崇拜の場合にありては――後世發達せる文學中に僅少の除外例はあるけれども――一般に信者の崇拜恭敬の念はラーマ一人否な一神に向けられるのが常である。而してラーマによりて顯示せらるゝ愛は、父の子に對する愛である。

然るにクリシュナ崇拜の場合に於ける愛は、全く陰陽兩性の戀慕相思より起る愛である。

兩性渴仰

此故にクリシュナ宗にては、信仰崇拜の對象が、クリシュナ自身と渠が聖妻たるラーダー（Râdhâ）との二重になつて居る。然り而して個人の靈魂と神との關係は、一婦人が其の戀人に對する性慾的渴仰の念によりて成立すと主張するのである。即ち個人は――恰も一婦人が自己の全生命を戀人のために打ち込み又は投げ込むが如く――その全生命を神に奉獻することによりて救はるゝので

ある。換言せばラーダーが其全生命をクリシュナに投げ込んで自己犧牲を敢てするが如く、個人は我他彼此の小さな量見に執着する小我の全體を擧げて大我の神樣に投入するのが宗教的の救濟である。これ此の派に於て、神に對する信仰を表現するに、ラーダーがクリシュナに對して自己を犧牲にする繪畫を以てする所以である。

印度の詩人は此の情緒を言ひ表すに、宇宙の創造主に對する賞讃又は祈禱の形によりて、彼等獨特の力强き熱血を注いで居る。彼等の言葉を借りて云へば、創造主たる永久無限の神樣は、その溫かい懷の中に信者を受取らんがため、常に廣大無邊なる愛の御手を延ばし、衆生をして生死無明の大海を渡らしめ給ふから、衆生は一人の女が戀人に走り行くが如く、神樣に向ひ燃ゆるが如き熱烈の愛を注ぎ、神樣の溫かい胸に抱かれねばならぬ。

既に男女兩性の相思相戀の觀念を以て宗教的渴仰の情を說明するが故に、其の說明の方法が極めて神秘的で且つ兩性關係の比喩に富んで居る。吾人はクリシュナ文學中に、夫婦間に於ける最も濃厚にしてデリケートなる關係を、最も大膽に且つ最も露骨に說破せるを見て、印度滅亡の原因と此種の文學とは深き關係を有するこゝに着目せざるを得なかつた。然り！、クリシュナ文學者中には、吾人の絕對に翻譯を許されないやうな男女關係の露骨な文字を見出すこと決して稀でない。所謂今日の或る一派の自然主義者をして之を讀ましめば、數百年前已に印度の社會に於いて、彼等よりも一層文才に富み一層宗教的なる自然主義の巨人ありしを見て喜ぶだらう。但し此に注意すべきは、クリシュナ文學の作家は如何に猥褻なる文字を弄しても、彼等自身の心は少しも撞着亂着しなかつたことである。蓋し是れ彼等の出發點が熱烈なる宗教的信念の上にあ

つたがためであらう。

クリシュナ崇拜の意義は上述の通りであるが、斯る神祕的の思想信仰は、決して一般普通の人民間に宣布せらるべきものでない。若し之を無學文盲の社會に弘めんか、社會は忽ちにして醜猥亂行の巷となり、道德も宗教も全く其の權威を失ふに到るに相違ない。而も印度人は此の點に注意せずして、宗教と云ふ美名の下に隱れて、勝手氣儘の醜行を恣にしたものだから、終に國家破滅の運命を招致したのだ。

ラーマ文學の多くは叙事詩であるがクリシュナ文學の多くは抒情詩である。此の抒情詩の泰斗たるワッラバ・アーチャールヤの後繼者として最も有名なるものは、スール・ダース（Sûr Dâs）と云ふアグラ市の盲目詩人である。彼が著述に用ひた言葉は西部ヒンディの方言なるブラジ・バーシャー（Braj-Bhâshâ）である。然り而して彼が著書は、今尙一種の國文規範として、文法や慣用語の用法

上疑義あるときは、必ず彼が著書を引き合ひに出して決定せらるゝ。傳ふる處によれば彼とツルシー・ダースとは韻文の形式に大變骨折つたさうだ。此故に彼等以後の詩人連の手になるものは、單にこの大先輩の模寫又は模倣に過ない。假令之を過賞の言なりとするも、彼が名著の一なるスール・サーガル（Sûr Sâgar）中には、數百の美妙秀麗なる章句を含めることは否まれない事實である。

サトサイヤー

スール・サーガルはクリシュナの傳說を歌へるものにして、此の書の世に公にせられし以來、ブラジ・バーシャー語は、印度敎徒の文學的著作の用語となつた。スール・ダースには、多くの後繼者があつたが、其の內最も卓越せるものはジャイプールのビハーリー・ラールと云ふ人である。彼の手になれるサトサイヤー（Satsaiyâ 七百頌集）は、印度の各地方語によりてものせられたる文藝物中、最も高調優雅なる藝術の一である。韻字法の規則によりて束縛せられ、一頌の字

數四十六綴字以内に制限せらるゝにも拘らず、而かも尙且流暢明快、讀者をして一頌毎に完全美麗なる一幅の繪畫を眺むるが如き感あらしむる非凡の手腕には敬服せざるを得ない。換言せば、其の言廻し方の細やかにして明快なる、自然の妙趣を描寫することの巧妙なる、實に讀むものをして畫境の人たり、詩境の人たらしむる底の奪魂力を有つて居る。加之、彼は其の用ふる所の一字一句を忽かせにせざるがため、一字を增すことも能きねば減ずることも能きない。隨つて冗長散漫に陷つて居る所は一つもない。ツルシー・ダースの著書の用語なる東部ヒンディー語の典籍中には、クリシュナ文學に關するものは殆ど一つも見當らない。が、ビハーリー語の詩人としては、クリシュナ文學に編入せらるべき短篇の抒情詩家として名高き。

キッデヤーパティイ

と云ふ人がある。彼は第十五世紀の後半期に出世し、抒情詩家として大なる

成功を收めた人である。彼のベンゴール州の宗教的詩人にして、一宗派の開祖たるチャイタンニャは、キッデヤーパティの詩を模範としてベンガリー語の詩形を一定した。チャンデイ・ダースは彼と同時代に生れ又彼と交はりを結べる人なりしが、彼も亦ベンガリー語を以てクリシュナ文學に屬する詩を作つて居る。其後ベンガリー語のクリシュナ文學界は、上記二作家の模倣に限られ、少しも進歩發展の跡方を見ることが能きない。蓋し第十六世紀以後は、ベンゴール州に於いて、シワ宗再興の運動が盛になり、隨つて文學的天才も多く此の方面に輩出せしがためであらう。更に眼を

オリッサ地方

に轉せんか、此地はジャガンナート（Jagannâth）——クリシュナの別名——崇拜熱が盛んなるだけ、クリシュナ文學も其の勢力を深く社會の根柢に植付けて居る。これ此の地方が所謂クリシュナ文學者に富める所以である。其内最も有

名なるものはディーナクリシュナ・ダースと云ふ人である。彼は第十六世紀中の人にして、ラサ・カローラ(Rasa-Kallola)――烈情の怒濤――と云ふ詩篇を出して居る。此書は今迄吾人が紹介した何れの文學書よりも、一層宗教の實感的方面に力を注いで居る。若し夫れ

マラタ地方

に注意を拂はんか、クリシュナ文學の泰斗にッカーラームと云ふ詩人がある。彼は千六百八年、印度四姓の最下級たる首陀の家に呱々の聲をあげ、長ずるに及んで極めて貧弱なる小商賣人となつた。然るに彼は其の職業に於ても、亦その家庭生活に於いても失意の境遇に陷り、遂に世を棄てゝ東西に漂泊する修業者の一人となつた。其の著書として有名なるアバンガス(Abhangas)――不滅の讃頌――は、歐洲人の印度學者には餘り賞揚せられないけれども、彼が生國に於いては大いなる賞讃を博して居る。彼の詩は詩としては餘り巧妙な作とも思

はれないが、讀者の道念を向上せしめ、人間の汚穢を淨化せしむる所に價値があるやうに思はれる。されば一篇の詩と見るよりも、寧ろ一種の宗教訓と見る方が妥當かも知れない。彼の外マラタ地方に於けるクリシュナ文學の大家として名高きものにスュリーダルと云ふ人があるが、彼は創作的の詩人としてよりも、寧ろバーガワタ・プラーナ(Bhâgavata Purâna)の翻譯家として有名だと云ふ方が當つて居る。更に眼界を轉じて、

ラジプタナ

地方に於けるクリシュナ文學の狀態を觀察すれば、此の地方には閨秀文學者として名高きミーラー・バーイー女史がある。女史はメーワール國の皇族であるけれども、其の詩は西部ヒンディー語で出來て居るから、寧ろヒンディー文學界の一人に數へた方が妥當かも知れない。兎に角女史の詩は、今尙北方印度地方全體に亘り持て囃されて居る。

以上列擧の外、アッサム地方にもカシュミール地方にも、クリシュナに關する文學的の典籍があると云ふ事實だけを記して、吾人は之より

ドラキディアン

語もて書かれたるクリシュナ文學を一瞥せねばならぬ。ドラキディアン語系中で、最も重要の位置を占むる言葉はタミール語である。タミール語のクリシュナ文學書中で最も大切なるものは聖歌である。が、此の書は印度の他地方の言葉で書かれた文學ほど重要の位置を占めて居ない。又同じ語系に屬するカナリー語の文學書中にも、クリシュナに關するものが少くないけれども、一般の讀者には餘り必要な、且有力な言葉でないから省略する。

宗教的文學

の第三種に屬するものは、シワ（Siva）又は其の配偶と見なさるゝヅルガー（Durga）の崇拜に關するものである。シワの信仰は、南方印度並にベンゴール

州に於て最も盛んである。南方印度地方に於ては、西暦十一世紀中に出世せる、マーニッカ・ワーサガルの『神聖の語』（Tiru-Vâsagam）と云ふ書が、シワ崇拜の文學の最初の試みである。が、此の詩は今尙同地方に多くの讃歎者を有つて居る。ボープ博士の言によれば、其の思想の深遠にして其の感情の高調なる點に於ては、何れの國語よりなる詩と雖も、此詩の右に出るものは殆どないさうである。されどシワ崇拜よりも一層優勢なるは、ベンゴール地方に於ける。

ヅルガー

崇拜である。ヅルガーは、前にも言へるが如く、シワの配偶で、印度の精根崇拜の中心神格となつて居る。彼の印度敎中の眞言秘密の宗派と云ふべきタントラ（Tantra）宗の聖典中に、陰陽兩性の交合を理智妙合だの、涅槃の理想境だのと云へるは、彼の社會が此ヅルガー崇拜の墮落の深淵に沈んだ時である。第十五六世紀の頃までは、ベンゴール州の地方語文學は、專らクリシュナの信

仰に關するものなりしが、其の後約二百五十年間に於ける文學的作品の主なる題目は、カーリー（Kali）若しくはチャンディー（Chandi）の名によりて現さるゝヴルガー女神である。而して當時の文學者中最も有名なるはムクンダ・ラーム・チャックラワルティと云ふ人である。吾人は時人が彼を呼んで『詩人の寶玉』と云へるを見て、如何に彼がベンゴール社會に愛敬せられしかを推察することが能きる。彼が世に殘せし二大名篇も亦ヴルガーの威力と仁愛とを歌ひ出せる創作的物語で、一は貧賤なる一獵師夫妻の運命を描き出せるもの、他はスリーマンタ・サダガル（Srimanta Sadagar）とて一商人ダナパティの一生を中心として人間生活の千變萬化の妙趣を語れるものである。

ムクンダ・ラーム

の詩に描き出さるゝ出來事や人物は、奇蹟的であり超人的であるが、その思想その感情及びその言葉扱ひは全く自然的である。又彼が詩中に現れ出る人物は

印度詩人の好んで描き出せる人物とは違ひ、皇子でもなければ皇女でもなく、下階級の獵師と其の妻及び一小商賣人と其の二妻である。是故に吾人は彼の詩によりて、ベンゴール州民が未だ歐洲文明の影響を蒙らざりし第十七世紀當時の村落生活の眞景と、彼等の國民的性格及び智的道德的眼界の實狀とを髣髴の間に推知することが能きる。之れ蓋しカウエル教授が此二篇の拔萃を英譯して英國の國民に純粹の印度生活を紹介せし所以であらう。政治家でも商賣人でも少しは斯る方面から國民生活の根本思想を考察するやうな心持にならなければ、國家の健全なる膨脹發展は望まれない。

其他の詩人

此外ベンゴール州に輩出せる第十八世紀の詩人中、直接又は間接に、女神ヴルガーを主題背景として、巧に描き出せるものが澤山あるが、其の中最も名高い人はラム・プラサードとバラト・チャンドラの二氏である。前者は讃歌の作者

として秀で、後者は戀歌の作家として有名である。ラム・プラサードが詩人として世に立つに到れる履歴は却々面白い。今その逸話を一つだけ擧げて置く。

彼は十六七歳の頃、カルカッタ市の或る商店の會計課に入り書記となつた。然るに彼は計算の時間を詩作に費し、一冊の會計原簿をノート代りにして、初頁から矢鱈にベンガリー語の詩を書き附けて居た。或日書記長が之を發見して、此の少年詩人と會計原簿を捉へて店主に示し、大いに叱責せられんことを求めた。所が、店主は其の詩を見て大いに驚き、彼が文學的天才を賞揚し、早速店員たることを止めさして、月に大枚二十圓づゝを補助する約束で鄕里に歸らしめた。斯くて生來の詩人は愈その天才を發揮して十八世紀の大文豪となつたのである。惡戯小僧の少年詩人も偉いが、一冊の會計原簿を臺なしにされながら毫も怒つた顏色を見せないで、將來の大天才を鑑定し得た此の店主も偉いではないか？

バラト・チャンドラにも亦一つの逸話がある。彼は家庭の都合上、幼少の時から他家へ難を避けねばならなかつた。或る祭典の日、彼は寄食する家庭の人人から、お祭の詩を吟ずるやうに賴まれた。所が驚く勿れ、僅に十五歳の少年は、昔から祭典の都度吟ずべき一定の詩があるのに之れを取らずして、即坐に自作の詩、而かも其の祭典の意義によく適應する立派な詩を吟じて席に臨める其の家の主人を初め、皆の聽衆を驚愕せしめた。印度の栴檀も矢張り二葉の時から香ばしいものと見える。

吾人は已に近代印度の宗教文學の梗概を紹介したから、之より各地方の國語を基礎として、一つ〳〵の文學を紹介せねばならぬ。されど今日の印度には特殊の文學を有する地方語が十八種ある。十八種の文學を一々紹介せんには、其の梗概の梗概だけを說くにも餘程の紙面と時間とが要る。是故に十八種語の文學中、二三の最も重要なるものゝみを擧げて此の篇を結びたいと思ふ。現代文

學中先づ

西部ヒンディー語

の文學を說かんに、此の語に屬する文學書中、最も古くして且つ最も壽命の長いのが、チャンド・バルダーイ（Chand Bardâi）の手になれるプリチーラージ・ラーサウ（Prithirâj Râsau）である。チャンドは第十二世紀の後半期にラホール市（Lahore）に生れた人で、當時デリー（Delhî）城の主權者たるプリチーラージの朝廷に事へて居た。即ち彼は自己の主君を詩題として歌ひ出したのだ！今現に存する此の詩篇は實に十萬頌の多數を含める浩瀚の書であるが、十萬頌の詩がみな彼の作にかゝるものとは思へない。若し此十萬頌全部が彼の作であつたら、一には彼が主君の生涯に關する詩的編年史として、二には彼の時代に於ける印度のデリー地方を中心とせる歷史の材料として極めて重要なるものである。然し此書も彼の

とも云ふべきマハーバーラタ（Mahâbhârata）と同樣に、後世人の添加や挿入せし部分が大分あるらしい。勿論何れの部分が添加挿入で、何れの部分がチャンド自身のペンになつたものか明確に區別することは出來ない。此詩は初から終り迄、小唄の形式になつて居るが、今でもラジプタナ地方では、天下の漂浪詩人が此詩を誦して歩いて居る。トッド氏のラジャスタン（Tod's Rajasthan）は此の詩篇から多くの例證を取つて居る。又トッドの書は歷史文學として永へに推重せらるべきものである、昔の昔の大昔のことばかりが、印度の研究だと思つて居られる學者先生方には、此の書の名前さへまだ御目通りせずに居られるかも知れない。予は先年級友の遷化を弔ふべく、此の書を母校の曹洞宗大學圖書館に寄贈して置いた。

西部ヒンディー語の文學書は殆ど全部詩ばかりである。其詩人中最も有名な

るは。バンデルカンド（Bundelkhand）のケーサウ・ダース（Kesav Dás）である。彼の詩中特に、詩學界の權威として普く承認せらるゝものは、カキ・プリヤー（Kavi Priyâ）とラクシク・プリヤー（Raksik Priyâ）の二篇である。此に所謂ヒンディー語文學とは文章の組織と云ひ、音律の規則と云ひ、全く梵語の規則の上に成り立てるものであるが、他に今一つペルシャ語の影響を受け波斯語系の音律規則の上に成り立つた言葉がある。其言葉を以て書かれたるものを

ウルヅー文學

と云ふ。ヒンディー文學は主として印度教徒の手になり、ウルヅー（Urdû）文學は主として回教徒の手になつたものである。而して此ウルヅー文學は第十六世紀の末葉に當りデッカン高原地方に起りしが、其の後百餘年にしてワリー（Wali）と云へる人の精力によりて、一種の定まつた形相が出來上つた。彼が又の名を『文章の父』と呼ばるゝのは之がためである。彼の規範的なる文章及

び詩形は、當時の首府たるデリー市に於て直に採用せられ、同時に詩學上の一學派を生み出すに到つた。それより第十八世紀の半に當り、ラクノー（Lucknow）市に於てウルヅー文學、特に詩學に關する他の學派が生れ出た。此ウルヅー語も言語學上から論ずるときは、矢張り印度アールヤ語系のヒンディー語中に編入さるゝけれども、所謂ヒンディー語はデーワナガリーと云ふ文字を以て書き現され、ウルヅー語は多くアラビヤ系の文字を以て書き現さるゝのが普通である。前者は多く印度教徒の間に用ひられ、後者は多く回教徒の間に用ひられて居る。又前者は左から右へ書き、後者は右から左へ書かれる。斯くて文學の上にも、印度教徒文學と回教徒文學と分けられるけれども、有名な詩や小說は兩教徒孰れの社會にも相互に共通に讀まれて居る。例せばウルヅー文學の大成者たるワリー・ムハマッドの著書の如きは、印回兩教徒の間に普く持て囃されて居る。

十九世紀の印度文學界には一新生面が打開された。そは即ち散文文學である。散文文學は英領印度政廳の確立以後、英語及び英文學の影響を受けて起つたものである。此散文文學の初期に屬する著名のウルヅー文學者をミール・アムマン（Mîr Amman）と云ひ、ヒンディー文學者をラルー・ラール（Lallû Lâl）と云ふ。爾來此種の散文文學は非常の發展をなし、最近に於ては寧ろ韻文文學を壓倒するの觀を呈して居る。今現に――一昨年迄生きて居たから、まだ存命中だらうと察する――盛名を恣にしつゝあるウルヅー文學の泰斗はムハマッド・フサイン（Muhammad Husain）とラタン・ナート（Ratan Nâth）の二氏で、ヒンディー文學の驍將はベナレス市のハリスチャンドラ（Harischandra）氏である。但しハ氏は先年物故されたが、其後何人が氏の後を承け繼いでヒンディー文學のために氣焰を擧げて居るかは知らない。

ベンゴール文學

英國の印度征服は啻に政治的革命たりしばかりでなく、宗教其の他社會萬般の思想上に大變革を齎した。印度人の知的生活は、歐洲の歴史及び文學に於ける最も尊く、且最も健全なる凡ての思想と接觸し、其の結果大なる利益を蒙つたのである。第十八世紀の末葉に當り、ワーレン、ヘスチングは裁判の用に供すべく、印度教徒並に回教徒の法典編纂を開始し、歐洲人の判事と印度の學者との間に交際の機會を與へた。これ抑〻英國紳士と印度の學者、特に最も高き教育を受けたベンゴール人との間に行はれたる智的接觸及び智識交換の初めである。千七百九十九年にカレー・ワード及びマーシマンはセランプールに於て、彼等の布教的傳道を初め、又ベンガリー語の印刷所を建てゝマハーバーラタだのラーマーヤナだの、其の他色々の有名なる書籍を出版した。而して終に彼等はベンガリー語の日刊新聞をも發行するに到つたのである。

歐西文化の移入

千八百年には、時の總督ウェレスレー卿はカルカッタにキリアム・コレッヂを建て、英國の青年士官に印度語の研究を奬勵し、その教師として印度の學者を任命した。ダキッド・ヘアー氏はカルカッタ市に於ける一時計製造人に過ぎざりしが極めて當識に富み仁愛の念深く、ベンゴールに於て英語の教育を開始し、千八百七十年にはヒンヅー・コレッヂの設立に盡力した。而して其大學に於けるリッチャードソン及びフェロジオの兩教授は、極めて同情の念厚き人にして、同校の學生間に英文學及び英語教育の重要なる所以を吹き込んだ。最後にマコーレーは、英語によつて印度の人民に高等教育を施すことの急務を說いた。而してウィリアム・ベンチック卿は千八百三十五年以後、彼が獨特の行政を布き、印度に於ける英語教育の確立を大成せしめた。斯くて歐洲の學藝は印度の社會に盛んに輸入し初められた。此の時に當り不世出の天才を抱いて、印度社會の改

良を叫びしものは、

ラーマ・モハン・ライ

氏である、彼は千七百七十四年即ちワーレン・ヘスチングが、始めて印度の總督となつた年に呱々の聲を擧げた。彼の傳記に關する逸話や事業を詳細に記述せんは、到底此の篇の能くする所ではないが、要するに彼の事業は第十九世紀の前半期三十年間に於ける印度教の社會的、道德的、智的進化の促進であつた。又彼は時に或は印度教の學者や、基督教の宣教師と大論爭を試み、印度に於ける新生命の覺醒を促した。之れ即ち彼が唱道せし所の一元論的信仰と、彼が創立せし梵教會とが、最も健全なる宗教として、印度の社會に漸次流布の範圍を廣めつゝある所以である。彼が英語及ベンガリー語を以て講義し演說し文書せし物は、ラーマ・モハン全集として世に公にせられ、今尙ほ多くの愛讀者を吸收して居る。彼の父はラーマ・カンタ・ライと云ひ、ルムシダバッドに於ける

回教徒の王族に事へたる一小地主であつた。而して彼の母はタリニ・デビーと云ひ、思想堅實なる才色雙美の一婦人であつた。想ふに彼は父の性格よりも寧ろ母の好感化の下に成長した人である。

偶像崇拜教

當時ベンゴール人の子弟にして、何か官憲に一椅子を占めやうとの野心を藏する者は、先づ皆ベンガリー語と波斯語とを學んだものである。而してラーマ・モハンも亦幼にして是等の二國語を學びしが、九歳にしてアラビヤ語習得のためバトナ市に遊學せしめられた。群鷄の一鶴たる彼は三年にしてアラビヤ語及び波斯語に熟達したものだから、更に梵語研究の爲めベナレス市に送られた。これ抑も彼が生涯の一轉機に與つて力ある事件である。彼はベナレス市に於て單に梵語に熟達せしのみならず、ウバニシャッド及びウェーダンタ哲學の蘊奥をも究むることが出來た。彼は十六歳にして一通りの修學を卒へ、鄕里に歸つて

『偶像崇拜教』なる一書を著はした。由來ベンゴール文學の典籍は、凡て韻文を以てものせられしが、少年革命家たる彼の處女作は、古今未曾有の美妙なる散文を以てものし、文學社會に一新生面を開拓した。これ彼がベンゴール州に於ける、

散文學の父

と呼ばるゝ所以である。彼の父は若き革命家の著書の出版を好まなかつた。即ち親子の間に新舊思想の衝突が起り、其の結果彼は家を辭して諸方を遊歷する身となつた。傳ふる所によれば彼は三年の間西藏に入り、佛教の研究をも試みたさうである。然るに彼が二十二歳の時、父より召還されたものだから、鄕里に歸つて英語の研究を初めた。傑出せる才能と好學の熱誠とを有する彼は、數年にして單に英文を書き、又は英語を話すことに熟達せしのみならず、佛蘭西語、拉典語、希臘語及びヘブリュー語の智識をも獲得せりと云ふ。彼は其父

の歿後、千八百年より千八百十三年まで、十三年間、印度政廳の官吏生活を營みしが、千八百十四年に其の官職を辭し、カルカッタに移住して、自家の信仰主張の宣傳に努力し初めた。其の後彼はモーガル朝廷より駐英使節に選ばれて赴任せしが、惜い事にはブリストルの客舍で永眠して了つた。彼の事業を承け繼いで、益之が進歩發展のために盡したものが今のタゴールの父親なるデウエーンドラ・ナート・タゴール氏である。氏と梵敎會との關係は、已に宗敎の部に於て略記して置いた通りだが、彼は實に今日のタゴールをしてタゴールたらしめた父らしき父であつた。併し彼は文學者と云ふよりも寧ろ宗敎敎育家と云ふ側の人である。而して十九世紀のベンゴール文學界を代表するものは、マヅ・スダン・ダッタ(Madhu Sudan Datta)とバンキンチャンドラ・チャタルジー(Bankin-chandra Chatterjea)の二氏である。前者は千八百二十四年に生れて千八百七十三年に歿し、後者は千八

百三十八年に生れて千八百九十四年に歿した。前者は十九世紀のベンゴール文學界に於ける詩星にして、後者は同期の散文文學界に一の新文體を作り出した文學上の巨人である。

要するに、印度の文學は、まだ我日本には多く知られて居ないし、漸くこの頃になつて一タゴール氏の名前を聞くに至つた丈だが、其外にタゴールの後繼者と目せらるべき青年文學家もある。然しタゴールの眞髓や青年文學者の紹介は之れを他日に讓つておく。

十四　印度の女子

籠の鳥

印度の女子は、我が國の所謂新らしい女の眼から見れば眠つて居るかも知れない。彼等は女權擴張だの、參政權獲得だの、五色の酒を飲むことだの、何だの彼だの云ふやうな事は、未だ夢にだも考へて居ない。彼等の最大多數は、男女七歳にして席を同うせずと云つた風の、古い觀念によつて育てられ、少しも反抗の氣勢などは見えないやうである。然し乍ら、中等以下の貧乏人の妻君や娘達は、男子と席を同うせない譯には行かない。彼等の家屋――寧ろ小屋と云つた方が妥當かも知れない――は男女別々に隔離して棲ふには餘りに狹小である。又中等以上の家庭の女子達のやうに、女部屋に閉ぢ籠つて居ては、鼻の下の建立が出來ない。そこで彼等は日々の食料品買ひ出しに市場にも行き――

日本のやうに魚屋、肉屋、八百屋などが搶いでも注文取りにも廻はらない――料理もし、水も汲み、又は屋外の勞働にも從事せねばならぬ。然るに中等以上の家庭の女達は、自分勝手に屋外に出たり、他の男子と漫りに口をきいたり、交際したりするやうな事は絶對に不可能である。早い話が、體のい、籠の鳥だ。

地獄行き

印度の女子は、おギャーと母胎を飛び出した刹那から、男子ほど歡迎せられない。此故に印度の妻君達は一人として、男兒の出生を祈願しないものはないけれども、女子の出生を祈願するものは甚だ稀である。併し此の事は必らずしも印度ばかりではない、男兒の出生の方が、女兒のそれよりも歡迎せるゝのは、天下一般の人情のやうだ。されど印度のは普通の人情より來れる女子貶黜でなく、印度教と云ふ宗旨の教條から割り出したものである。印度教の教ゆる所によれば、男兒は兩親の葬儀を營むに必要缺く可らざるものとなつて

居る。若し其の葬儀が如法に營まれ得ない場合は、其の父の生前に積みし善根功德は全く其の効力を失ひ、永い間地獄の苦痛を耐へ忍ばねばならぬ。即ち女兒は其の親を昇天せしむる丈の力がないばかりでなく、却て地獄行きの導きとなるやうなものだ。これに反して、

極樂詣り

の導きとなるものは男兒である。マヌの法典は敎ゆらく、「婆羅門式の婚儀によりて、婆羅門族の家に生れたる男の兒は自分の罪障は勿論十人の祖先及び十人の子孫の罪障をも拂ひ清めて、安穩ならしむることが出來る。ダイウヤ式の婚儀を擧げたる人の男の兒は、七人の祖先及び七人の子孫の罪障を排除し、ブラジャーパッタヤ式の婚儀によりて出生せる男の兒は、六人の祖先と六人の子孫の罪業を消滅せしめ、アルシャ式の結婚によりて出來た男の兒は、三人の祖先と三人の子孫の罪障を拂ひ清める云々」と。要するに男の兒をもたなけれ

ば、極樂往生は出來ないと云ふのが、印度敎の法典たるマヌの敎ゆる所である。隨分馬鹿氣た、いや女に取つては隨分慘酷な敎條であるが、斯る思想信仰の由つて來れる源泉を尋ぬれば、血統相續を重んずる結果、終に宗敎的法典の一ケ條として規定さるゝに到つたものらしい。

出產祝ひ

此を以て男兒出生の家には、大變なお祝ひがあり、其の友達も亦色々の御祝儀を贈るけれども、女兒出生の家には、餘り祝ひの聲も聞えず、友人なども御祝儀を贈らない。隨て子供の出生に關する宗敎上の儀式にも、男兒と女兒の間には著るしい區別がある。

男兒出生の場合には、シャスチとて特殊の女性保護者——宗敎的に規定せらるゝ——を雇ふて、生兒及び產婦の肥立を看護し、幼年時代の成長を保護せしむるのが常である。又男兒出生の第五日目には、其の父親が赤兒の枕邊にペン

やインキや、花や果實などを綺麗に粧り立てる。こは神樣が赤兒の額に幸運隆盛の印を書きつけ下さるやうにと云ふ信仰から來た風習である。然るに女兒出生の場合には、斯る宗教的の儀式は全く省略せらるゝのである。

兒童の教育

印度の社會では、學校教育よりも家庭教育に力を入れる。こは一に公立小學校の不完全な爲めでもあろうが、中以上の家庭には、必らず大學の學生か、學校の教師を雇ふて家庭教師として居る。家庭教師と云つても、其の家庭に棲ふものは極めて稀で、十中の八九は教師の方から朝夕の時間をきめて通ふのである。此の種の家庭教師も。男兒の爲めに雇ふので、女兒の爲めに家庭教師を雇ふ家は、餘程の富豪か特志家である。男兒の教育は學術中心となつて居るが、女兒のそれは技藝中心となつて居る。特に裁縫、音樂、料理の三科に重きを置いて居る樣だ。

男兒には「グル」とて、特殊の印度教教師を賴み、印度教の教理や、種々の儀式を教へ込むが、女兒には此事はない。女兒の家庭に於ける宗教的行持は、先づ第一に將來立派な良人を持つやう、又良人の長命と健康を祈願することである。斯くて女兒のある家庭には色々樣々の宗教的お祭りがある。

シヲ祭

少女の居る家庭には、必らず「シヲ祭」と云ふものが行はれる。此の祭禮の目的は、少女が將來シヲ神のやうな、立派な人を良人に持ち得るやうに祈るためである。此のシヲ祭りに際し、印度の少女達は、二個の小さなシヲ神の土像を作り、それを神壇に安置して、美しい花やベルと云ふ果實などを供へ、齋戒沐浴の後、新らしい衣服を着て、「歸命頂禮シヲ尊、歸命頂禮バッヂャラ尊」と、繰り返し〳〵口唱しつゝ、一心にシヲ神の容貌と屬性とを冥想するのである。

クリシュナ祭

此のクリシュナ神を祭る目的も、亦シヲ神のそれと同一である。然し此の祭禮に當り、女達のお祈りの文句が却々振つて居る。曰く、「一國の皇子を良人にもち得るやう。妾は賢良な七人の好男兒と、美いし二人の女兒をもち得るやう。妾が子の嫁として勤勉で從順な女をめとり得るやう。妾の娘が性質賢明にして、社會に名を揚げ譽を輝かす男子を良人にもち得るやう。又娘の緣付先の五穀が常に豐饒にして、倉庫が何日も充滿するやう。又その近親緣者が、福壽長久にして幸福を享受し得るやう。而して彼女がクリシュナ樣の祝福し給ふ所となりて、聖河ガンヂスの畔にて死し、天國の樂を享受し得るやうに願ひます云々」と。

英雄崇拜

印度では胎教どころか、まだ娘の時から英雄を崇拜して、將來の祝福幸運を

祈願し、良妻賢母たる修養をする。英雄を祭るには、先づ神格化せられたる英雄、及び諸神の像を十枚繪がいて、神壇に貼りつけ、美麗な花を供げ、芳香馥郁たる栴檀の香を燃き、而して後種々のお祈りを上げる。就中印度の社會で理想的英雄と仰ぐラーマ皇子を中心として、彼等が將來作るべき家庭のメムバーを豫想するのである。換言せば、ラーマの家庭を以て、彼等が理想の家庭とする。此故に彼等が英雄を祭るに際して、妾の舅はダシャラタ王——ラーマの父——の如く、妾の姑はカウサッリヤ——ラーマの母——の如く、妾の良人はラーマの如く、妾の弟はラクシュマナの如く、彼女自らはサスチ又はクンチの如くあり得るやうにと祈願するのである。

此の外印度の處女が、營まねばならぬ宗教上のお祭が二つある。一をスジャチ・ウラタと云ひ、他を閻魔王祭と云ふ。前者は一夫多妻の害毒を逃れんことを祈るために、後者は良人が長命して、寡婦たるの悲境に陷らざらんことを祈

るためである。即ち若し良人が妾狂ひをしたり、短命であつた場合には、家庭の不和又は沒落の基となるから、家庭の平和と繁榮とを祈るのがスジャチ・ウラタ及び閻魔王祭の目的なのである。

良人操縱法

印度の處女達の日課の大部分は、嫁入りの準備だと云ふも過言でない。彼等は宗教的信條の上から、必らず嫁入りせねばならぬものと定められて居る。隨て獨身生活などゝ云ふことは、彼等の夢想だもなし能はざる所である。此を以て彼等は幼少の時から、結婚の準備に關する宗教上の儀式を見聞し、其の母親から婚姻に關する諸〳〵の神話を學び、彼等が信心の一目的は、神樣の御惠によりて、良緣を求むるにあることを敎へられる。良緣の第一要件は、良人が品行方正で妾狂ひなどをせず、健康長命ならんことである。が、此の要件の圓滿に成立せらるゝと否とは、半ば妻たるもの〻良人に對する態度如何によること

だから、母親は其の娘をして良妻賢母たらしむべき敎育法に腐心するのである。極言せば妻君の良人操縱法如何によりて、不品行な男も品行よくなり品行よき男も不品行になるのだから、此のデリケイトな問題を敎ゆる母親の苦心は一通りではない。

結婚媒介業

印度の社會にはガタクとて、結婚の媒介を本職とする男女が居る。彼等は未婚女の兩親から賴まれて、適當の相方を探し出し、雙方の兩親を會見せしめて、結婚の成立を計るのである。勿論すべての結婚談に彼等の媒介を必要とする譯ではない。或は雙方の兩親が友人であるとか、又は緣者の間柄であるとか云ふ場合の如きは、彼等媒介業者の運動も何にも要らないで濟む。然し多くの場合に於いては本職のガタクが口をきくのである。早い話が彼等媒介業者は、印度の出雲の神樣たるカーマデーワの使者と云ふ格だから、印度の社會に於ては一

種重寶の職業と見做されて居る。彼等ガタクの口にかくれば、世の中に一人の醜婦もなければ一人の醜男子もない。

ガタクの業は宗教上の法規より云へば、婆羅門族中の僧侶に限られて居るけれども、星移り物代るにつれ、各階級の種族間に、それ〴〵のガタクが出來たのである。彼等の多くは比較的に學問もあり、人を説服するに一種獨特の巧妙な舌をもつて居る。若し彼等が十七八歳の未婚の男子あることを嗅ぎ出せば、早速其の兩親を訪ふて結婚を説き勸める。彼等の得意とする所は、一瞥の下に人間の弱點を看破することである。人は自らの弱點を捉へられて、巧妙に説き勸めらるれば、次第々々に耳を傾けずに居られなくなるものだ。

見合ひ式

ガタクの建言が採用された場合は、新郎の家庭の代表者――多くは其父――が新婦の候補者を見に行き、この娘なら自分の子息に相應はしいと思へば、日

本の拾圓五拾錢程に相當する一枚の金貨を新婦の手に渡す。こはお前を自分の子息の嫁に貰ふと云ふ證印である。此に於いて嫁方の家庭の代表者も亦新郎の家庭を訪ひ、この男になら自分の娘を呉れてもよいと思へば、直に前記同樣の金貨を出して新郎の手に渡す。これ即ちお前に自分の娘を呉れると云ふ證印である。斯くて雙方の間に結婚の約束が成り立つので、これが印度の見合ひ式である。即ち印度では新郎新婦の候補者が見合ひをするのでなく、雙方の兩親が互に往來して見合ふのである。去れば印度の新郎新婦は、結婚式の時初めて相互の顔を知るが如き場合も決して異數でない。見合ひもしない結婚が甘く收まつて行くから妙だ。信仰の力習慣の力と云ふものゝ如何に強いかは之れでも分る。

洗禮の式

婚約が成り立てば結婚式を擧ぐる數日以前に、ガートラ・ハリッドラと云ふ

儀式が行はれる。予はこれを假りに洗禮式と名けて置く。此の式に際し、新郎は先づ沐浴して身を淨め、緋色の縁をとつた新らしい衣服を着て、四本の車前樹もて圍まるゝ砥石の上に立つ、此に於いて四人の有夫の女――内一人は婆羅門族の女――が新郎の周圍を四五回廻つて、薑黄の油を新郎の身體に塗りつけ、又恒河の聖水を其の額に注ぐのである。此の時から新郎は結婚式の日まで、常に銀製の堅果鉗を携帶せねばならぬ。それから新郎の身體に塗つた小量の薑黄を銀のコップに入れ、髪結にもたせて新婦の家に送れば、新婦は直に其の油を身體に塗られるのである。爾來新婦は眼瞼を美しくする黑色の染料を入れた小さな箱を携帶して居らねばならぬ。こは惡星を退散せしむるの力ありと云ふ傳說的信仰から來て居る。

結婚式

印度の結婚式は、日本のそれのやうに、花嫁が花聟の家に來るにしても先づ、

花聟の方が花嫁の家に行くのであるが、此時の道中の行列は大したものだ。――行列は大概夜間ばかり――中等の家庭の結婚式でも、四五十人の瓦斯燈持や樂隊や、二三十臺の馬車が、整然たる列を作つて、道中を練り歩くのである。而して花聟殿は、嬉しさ七分恥しさ三分の面持で、金碧燦爛たる服をつけ、花の御輿か花馬車に乘つて御座る。新婦の家に着くや否や、花聟殿は座敷の中に設けてある緋繻子の座布の上にすわり給へば、數多の客人も年齢や親戚關係遠近の順序に從つて座に着く。それから花聟花嫁兩家の人々が、法の如くに一定の席に坐わる。此に於いて花聟は緋織の絹衣に着替へて、一段高い所に導びかれ、所定の席につけば、花嫁も亦其處に導びかれて、花聟の左側に座を占める。此の時已に檀那寺の和尚樣は、祭壇に上つて御座る。彼は數莖の吉祥草で、花聟の手の指を卷き、又少量の恒河の聖水を花聟の掌に注ぐのである。而して花聟は舅が一の眞言を唱へる間、與へられたる聖水を奉持して居らねばならぬ。

それから花聟が恒河の聖水を容れてある器物の上に片手を差し伸せば、新婦も亦其の手を新郎の手の上に置く。この時檀那寺の和尚さんが、花輪を以て新郎新婦の手を一緒に縛ばらるゝのである。縛ばり了れば、花嫁の父が花聟に向ひ、嚴かな中に溫味を含める調子で、

「われ今御身に此の女を與ふ」

と云へば、花聟も亦、

「われ今正に此の女を領す」

と答ふ。此に於いて花嫁の父は、新郎新婦の手を一緒に振つて、數滴の聖水を兩人の頭上に注ぐのである。それから檀那寺の和尚さんが、新婦に代つて、

「若し御身が幸福ならん時は妾も亦幸福に暮らさしめられよ。若し卿が不幸に陷らんか妾も亦不幸を忍ぶべし。卿は妾を支えざる可らず。よし妾が病むことありとも、卿は終生妾を見棄て給ふ可らず。若し又妾に過ある

ときは直にこれを改むべければ、何卒これを宥恕せられよ。卿は妾を伴はずして、諸神の御祭り巡禮、其他有らゆる宗教上の儀式を營む可らず。卿は夫婦の愛情について妾を欺く可らず。卿は妾が生存する間は他の女子と何事をもなす可らず。ウィシヌ神と火と梵天とは吾等の證人たるべし」と。

此に於いて新郎は、新婦に答へて曰く、

「われ御身の要求を容れ、深く其の誓を守るべし。去れど御身も亦數條の誓約を容れざる可らず。御身は終生予と辛苦艱難を共にすることを忘る可らず。御身は予に對して常に從順ならざる可らず。御身は御身の父上より請求せらるゝ場合の外、勝手に御身の生家に行く可らず。又御身は予よりも一層好ましき境遇の男子を見るとき決して予を賤み輕んず可らず」と。

新婦自ら答へて曰く、

「妾は誓つて卿の要求する所を守らん。ウィシヌ神と火と梵天とは吾等夫

婦の證人たるべし」と。

それから新郎は右手を擧げて新婦の右肩にかけ、二人同道して其の家の女部屋に退くのである。彼は暫時女部屋に休息してから、ホームの式を行ふ爲め、一人で式場に出て來る。ホーム式とは牛乳から精製して作つた油、醍醐味を燃いて神々への御馳走に供へる宗教上の儀式である。この式が濟めば愈々御祝儀の御馳走が初まり、歌舞音樂の歡聲と共に此の一夜を明かすのである。

翌朝新郎新婦は共に新郎の家に導びかれる。此の時は數臺の馬車行列がある丈で、音樂隊も附かなければ、畫間だから瓦斯燈の列車もない。新婦が新郎の家に着し、所定の席につけば、姑が花嫁の手頸に鐵の腕環をはめ、其の額の眞中に赤色の星を入れてやる。これ即ち既婚女と云ふ印なのだ。それから花嫁は復び生家に歸り、夫婦同棲し得る年齢に達するまで、兩親の膝下に於いて將來一家の主婦たるに堪ふべき教育を受くるのである。

早婚？

結婚の儀式は娘の年齢滿七歳以上乃至十一二歳までの內に擧げられる。滿七歳以前又は十二歳以後の結婚式は、宗教上の法規に背くものとなつて居る。一見甚だしき早婚で、此の上なき非人道的の結婚法のやうである。然し乍ら印度の結婚式は、其の實は約婚式であつて、日本其の他諸外國の所謂結婚式ではない。早い話が七八歳の花嫁が結婚式の其の夜から、良人と共に同棲するのではない。矢張り生家に於いて、兩親の周到な監視の下に、學校に通ひ乍ら、良妻賢母たるべき教育を受くるのである。而して母親と共に時々良人の家庭を訪問し、先方の人々にも慣れさせ、家庭の事情境遇をも習熟せしめ、愈々一人前の女になつてから、良人と同棲するのである。彼女が生家に別れて新しい家庭の人となる時にも、檀那寺の和尙さんを賴んで宗教的儀式を營むが、此の時の儀式は所謂結婚時の儀式よりも極めて簡短である。即ち和尙は如法に眞言を唱へ

ながら、新郎新婦の兩手を結び附け、彼等の平和幸福を祈禱するだけである。之れより以後花嫁は、誓約の通り、漫りに生家にも歸らず、勝手に外出するやうなことは決してない。

夫婦の關係

印度人の社會に於ける夫婦の關係を一言する代りに、予は此に印度の某令夫人がカルカッタ評論紙上に寄せられし一篇の大要を摘錄しやう。曰く、

「良人は妻の最愛者である。良人に事へることは、妻の仕事の全體である。妻は其の良人を梵天と心得て居らねばならぬ。良人の命令は、吠陀の敎條と等しき權威をもつて居る。去れば貞淑な妻の信奉すべき神樣は、即ち其良人である。良人を愛するは軈て神を愛する所以である。良人を敬するは、軈て神樣に從順なる所以である。良人を敬する所以である。良人に從順なるは、軈て神樣に從順なる所以である。良人を喜ばしむるは軈て神樣を喜ばしむる所以である。此故に全力を傾注

して良人に捧ぐる妻の愛の功德は、天下の靈場を巡禮する功德に幾倍するかしれない。極言せば良人は妻の本尊樣である」と。

以て印度婦人の夫婦關係の觀念一斑を察すべきである。去り乍ら印度の婦人は是も非も良人の命に從ふものと考ふるは大いなる誤解で、家庭に於ける妻君の勢力も亦大なるものである。

以上は今日の印度社會狀態の大畧を說いたに過ぎなかつたが。偶々予は十日解纜の天洋丸に投じ、日置老師に從ひ、大日本佛敎靑年會の代表者として米國桑港に開催せらるゝ萬國佛敎大會に列席せねばならぬ。これ予が讀者に向つて此の稿の粗雜を謝せねばならぬ所以である。若夫印度の美術等に關する詳細の紹介に到つては歸朝の上他日筆を改めて江湖に見えん事を豫約して置く。

（七月九日夜）

今日の印度 終

附錄 ヒマラヤ記 （附＝達賴喇嘛會見記）

教祖三千年の史跡を究め佛教逆輸入の端緒を開くべく、錫を大聖降誕の地に留むること正に五年有半、這回圖らずも日置老師の佛跡參拜に遭ふ、余は玆に通辯兼案内者として、ヒマラヤ登山を試むることゝなつた。

時は一月十六日午後五時六分、ヒマラヤ見物のため甲谷他市シャルダ停車場から、ダージリン行の汽車に乘つた。汽車は漠々として際涯なき恒河の平原を走り、須臾にして日傾き、暮雲朧々として萬物に休息を促す。村落の家々より吐き出す夕煙は、印度特有の牛糞の焚火にやあらん、一種異樣の匂ひを帶びて居る。

わけて冬期に於ける恒河平原の夜は、これ亦一種異樣の黑霧に蔽はるゝから、

下界は愈々益々闇黑の世となる。我が汽車は、この茫々たる闇黑の世界を、ひたぶるに走ること一百十有六哩にして、午後八時二十四分ダモクデア驛についた。

ダモクデア驛は恒河の北岸に於ける波止場である。雪山見物の旅客は、皆此所に下車して、接續汽船に乘り代へ、恒河の大流を渡らねばならぬ。急ぎ車窓を開けば、闇黑の世界は忽ちにして光明の世界となる。これ則ち同驛に設けられたる數百燈の電光にして、旅客は此所で車中の憂鬱を一掃し、長い〳〵トンネルの中から、廣い〳〵眞晝の世界へでも出たような心地がする。

我が忠僕ナビーは五六人の苦力を呼んで來て自ら一軍の指揮官にでもなつた樣な調子で、手荷物の運搬を命じて居る。

電光の下を數百歩すれば、接續汽船は恒河埠頭に横附せられて、乘客の入り來るを待ち構へ顔である。棧橋の設備は頗る周到を極め、人をして普通の船梯

子を昇るの感じは毫も起さしめない。デッキは上下に分れ、下は三等旅客及び手荷物を載せ、上看板は横に二分せられて、左は一等、右は二等乘客の食堂兼休憩所に充てられて居る。眞白な布で覆はれたる食卓の上には、銀の匙やナイフやコップや皿が、電光に反射してピカ〳〵光つて居る。老師は一等食堂の左側の最右端に、予は其の次の椅子に陣取つた。

これより前甲谷他を發するに當り、二人前の夜食は既に電報で注文してあつたけれど、老師は醇乎たる菜食者であるから、先づ牛乳三合と燒きパンとを命じ置き、何か精進料理は出來ないかと交渉して見たけれど、さう急には何にも出來さうにも見えないので、あとは印度名物のバナヽやカシュミル產の林檎で我慢して貰ふ事とし、予は人間なみに毛唐人の食ふものを喰べ、恒河名產の魚、ヒルサのフライに舌皷を打ちて、ウイスキー・ソーダを呑み初むれば、船も亦大牛の吼えるやうな聲をあげ、名高き恒河の大流を渡り初めた。

ふと見れば船の兩側にはサーチライトを點し、大河の前面を照しつゝ進んで居る。

氣障な言ひ分のやうだけれど、予には探海燈なる日本語が、何うしても口から出て來ないまゝ、老師に向ひ、

「あれ！あの光を御覽なさい！」と云へば、老師、

「あはあ！探海燈をつけてるな！」

さうだ〳〵サーチライトなる言葉は探海燈だつた。然し探海燈てふ飜譯は穩當でない。宜しく探燈とでも改むべきだと、ひとり頭の中で、理屈をこね乍らウィスキーを飲んで居た。

下甲板には、印度語らしい、透りの好い聲で、何か調子よく囃して居る。憐れの底に氣樂な響がこもつて居て、耳を澄ませば澄ますほど、繪に書いた聲としか思はれない。

「あの人聲は何かね？」

「下甲板には、三等乘客や一二等旅客に隨伴せるボーイ共が澤山居ますから、多分彼等の食物でも賣つて居るのでしやう」と。

間に合せの答はしたもゝの、賣り子の聲としては餘りに長閑である。やがて食事をすまし、階段の下り口から下の方を覗き見たところが、先きの聲は印度人の水夫が船の兩側に、呑氣相に腰打ちかけて、水の深淺を量りつゝ、たがひに掛け聲し合つて居るのだと云ふことが分つた。

恒河は夜となく晝となく、大小の船舶が上下し、又水路の變移が劇しいため常に深淺を量る必要もあるし、探燈を照らしておく必要もあるさうな。

恒河河上の探燈と水夫の掛け聲、これ雪山見物の途上に於ける最初の詩題にして又最初の畫題である。予は詩も出來なければ畫も書けない。然しあの廣い廣い恒河の闇夜を照らすサーチライトの光を見、或は夜船一路の夢を破る長

閑けさ、又調子よき水夫の掛け聲を聽いて居る間は、少なくとも詩境に入り、畫境の人となり濟まして居た。

船は遠慮なく進み進んで、一時間餘にして恒河の北岸サラガートに横附せられた。此所から又東ベンゴール國有鐵道の汽車に乘つて、茫々として闇黑なるベンゴールの平原を走らねばならぬ。この平原は米やジュートの名產地で、印度政府に取つては、最大の寶庫ではあるが、それと同時に印度の無政府黨員や秘密結社員の名產地である。

汽車はレザーブしてあるから、周章るには及ばぬのに、我がボーイは、我等の名前が、何の車室に書き附けてあるか見出し得ないで、うろ〳〵して居る。羅馬字が讀めないから無理もない。予は自分で自分等の車室を見附け、老師を案内し、ボーイと二人で、寢具を解き床をのべた。身を寢臺に横へたが最後、汽車は一睡一百八十四哩の行程を走り、翌朝七時少し過ぎシリグリ驛についた。

此の驛は東ベンゴール國有鐵道の最終點であるから、停車場も可なり大きいし、レフレッシュメント・ルームもある。

シリグリ驛から、ダージリン・ヒマラヤ鐵道に乘り代へねばならぬ。此の汽車は、普通の輕便鐵道を一寸立腹さした位の大さだから、寢具だの何だの彼だのと、澤山の手荷物を車室内に持ち込む譯には行かぬ。その代り大きい荷物は特別の貨車に乘せてくれる。又ヒマラヤ連山の麓を紆曲り紆曲つて、勝景絶色を賞し乍ら登るのだから、寢ころぶ樣な無粹も出來ない。

シリグリ驛を發して間もなく、旅客の注意を惹くものは、マハーナッデー河上に架せられたる長さ七百餘尺の大鐵橋である。此の河は海拔七千尺のヒマラヤ山麓に其の源を發し、自然にタライ地方とジャルパイグリ地方との境界線を形成し、ゴーダガリと云ふ處で恒河の大流に合して居る。

シリグリ驛は、海拔僅かに四百尺の平原であるが、此所から七哩程走れば、

海拔五百三十三尺のスークナ驛に達する。此の驛は、ヒマラヤ山麓の最下部に位し、汽車はこれから谷を渡り藪を過ぎ、山又山の半腹を登り初むるのである。鐵道線路の兩側には、我等佛敎徒の忘れんと欲して忘る能はざる、サーラ樹が大森林をなして居る。我等の敎主釋尊は、サーラ樹の下に於いて大涅槃に入り給ふた。予は今このスラリとして堅さうな、灰青色の老木を見、いとも圓滿らしい此の木の葉の下蔭を走りては、轉た三千年の昔を偲ばざるを得ない。

サーラ樹林の間を縫ふて登ること約五哩にしてルントン驛に達する。此邊から既に優雅なヒマラヤ蘭や、桂の花が、線路の兩側に於ける鬱蒼たる老樹古木にぶら下つて居て旅情を慰めてくれる。又種々樣々な珍草奇木が生え繁りて、自然に熱帶地の植物園を形成して居るのも面白い。又此の地方一帶には、有名なタライ雲雀、野象、虎、猿、鹿、山犬、野牛、山鳥、及び孔雀其他大小無數の動物が居るから、宛然天然の動物園を觀るの趣がある。時としては野象群

をして鐵道に立ち塞がり、汽車の逆戻りを餘儀なくせしむることもありと云ふに到つては愈々益々面白い。

シリグリ驛から十七哩半程の所には、本線中最初の彎曲鐵路がある。此所で、旅客は初めて雪山鐵道は流石に違つたものだとの感を深くする。ジグザグを走り登るのは眞に愉快なもので、久しく默然たりし默仙老師も默し兼ねてか、一聲高く、「面白いなー」と云はれた。此の一言は確かに天眞發露の詩だと思つた。

此所から進むこと數分時にして、眼界頓に開け、南の方遙か下界に廣漠たる平原が見える。旅客は誰れしも、此の短時間に、よくもまあ斯んなに高い所まで登つたものだと怪まざるを得まい。鐵道の片側は千仞の幽谷、片側は斷巖絶壁であるから、愉快の感と恐怖の念が同時に湧いて來る。斯くて我が汽車は、海拔二千八百二十二尺のチンダリア驛についた。此所は本線中大驛の一つで、

小さい乍らも機關修繕の工場もあれば、レフレッシュメント・ルームの設備もある。

チンダリア驛を發し、少時にして又彎曲線路がある。我等は今や海拔五千五百七十四尺のシンドンが岳の半腹を登つて居るのだ。此の山は前に記したマハーナッデー河と、テイスタ河の間の平原に聳ゆる雪山山麓中の大山の一つである。やがて汽車は海拔三千五百十六尺のギャバリ停車場につく。此所には昔の酋長共の記念碑が建てられてある。

ギャバリ驛を發すれば、須臾にして本線中最後のジグザグがある。これ又雪山鐵道中の一奇觀だ。此のジグザグを通過し終れば、間もなく汽車に水を呑ませる小驛がある。人間も亦ヒマラヤ山の水を飲んで、下界で汚がした胃袋を洗ふ。此所を去ること遠からずして、線路の右側に高さ一百五十尺の大瀑布がある。雨期中の壯觀は又別だらうと思つた。此所はシリグリ驛とダージリン市と

の中央に位し、海拔四千百二十尺の高地である。

此所まで進めば、吾身こそ人間の匂ひがすれ、周圍の空氣や風は、平原のそれとは全く感觸を異にしてるやうに思はれた。平原の空氣を人間界のそれとすれば、此の邊の空氣は確かに初禪天のそれたる價値がある。

上方を仰げば雲霧に包まれて居るから何があるか分らない。我が身邊には太陽の光りさへ見えないが、遙か下界に開展せるタライの平原は、赫々たる日光に輝らされて居る。乃ち望遠鏡——畑少佐が態々三井まで自ら持參して貸して呉れた——を取り出して、下界の風光を眺むれば、青色と黄色とをもて縱横に織りなせる大毛氈が敷きつめてある。あれは下界の人の子が、汗水たらして耕耘せし數萬頃の田畑で、青きは麥、黄色なるは菜の花だらう。而してその大毛氈の間を貫通せる大小の白布と見ゆるは、麥や菜の花に生氣を與ふる大河小流の水であらう。斯く觀望を縱にして居る間に汽車は早や海拔五千尺のクルセ

オンについた。

クルセオン驛は雪山鐵道線中第一の都會で、可なり整頓したホテルもあれば、學校もある。此所に汽車は半時間停車して、旅客に朝飯をたべさせてくれる。誰れも彼れも印度平原から上つて來たものは、寒さを強く感ずると見え、ストーブの側の食卓につくのを爭ひ氣味である。老師は例によつて牛乳にパンとオートミル、予は獻立表に出て居るものを片端から平げた。

食事をすまして便所に行つたら、手洗鉢の側に、一人の少年が立て居て、手に水をかけ、又清潔なタオールで拭かせてくれた。印度平原でなら、ボックシス(祝儀)を貰ふ手の方が先きに出て居る例なれども、此所の人間は左程乞食根性が強くないと見え、御祝儀下さいとも何とも云はない。こう云ふ場合には、人間の同情心が却て增すものだ。乃ち四安那やつたら丁寧に合掌して居た。なんと實に可愛い少年ではないか。プラットフォームには西藏の小商人が、佛

像や珠數や玉石や其他色々の西藏品と稱するものを賣つて居た。老師は何か買ひたさうな顏附をして居られたけれど、予は唯ヒヤカシたばかりで、何にも買つてあげなかつた。老師は私を小供と思ひ、私は老師を小供と思つて居る。

クルセオン驛を發すれば、汽車は益々上方に向つて走る。旅客をして飽かしめないやう、巧みに天工と人工とを調和せしめてあるから、毫も無聊に苦しむやうな事はない、忽ちにして萬仞の幽谷、これを臨めば眼ためにバクむべく、忽ちにして高々たる峰頂、これを仰げば心ためにバクたるべく、絕景勝色の送迎に忙殺せられて、互に話する餘裕さへない。汽車は遠慮なく進み、海拔五千六百五十尺のツーン驛を過ぐれば、上界も下界も雲霧に包まれ、何にも見えなくなつて來た。此の分では明朝はヒマラヤが、觀らるゝかどうかゞ頗る疑問である。人間くさい心配が吾が心の一部を占領し初めた。

先刻見た下界は、今や下界の下界になつてるから、太陽に輝されて居ても見

えぬのだらう。上界の上界は矢張り太陽が輝りわたつて居るかも知れぬ。心配は無用だ、三萬尺のヒマラヤに、何うして雲が近寄り得やうなどゝ、心氣を轉じて居る中に、身は早や六千五百二十二尺のソーナダ驛についた。

此の邊は家の構造と云ひ、店頭の飾り方と云ひ、子守りの樣子と云ひ、人間の顏貌と云ひ、衣服の仕立方と云ひ、何も彼も印度くさい所は少しもない。然り！此邊は既に西藏人の勢力範圍で、憚りながらおい等は生れてから、入浴などは夢にだもしたことはないんだよと云つた風の、ブータン人がウヨ〳〵して居る。人間は汚れても死はせぬと聞いて居たが、事實の證明は西藏人やブータン人によりてなされて居る。

車窓を襲ふ霧は宛然細雨の如く、前後左右全く雲霧にとざゝれ、雲の海原を潛つて走るやうな心地がする。老師もやはり明日の山見物が心配になつて來たと見え、

「此の頃は毎日こんな天氣かな」。と獨り言のやうに云はれたから。予は

「多分一月のダージリンは、こんなでしやう」と答へた。若し山が見えなければ、ヒマラヤ鐵道の絶景勝色を賞した丈でも、來た價値は少なくないと明らめて、三井物產の田島君ぢやないが、ホテルに寢ころんで、夢に雪山を見るの記でも書かうと想像を逞うして居たら、汽車は既に海拔七千四百七尺のグーム停車場についた。

グーム驛は雪山鐵道線中の最高驛である。行く先のダージリン市は此の驛よりも六百尺程低い。汽車は段々下の方に向つて走り、數分時にして宿泊地なるダージリン市の停車場に着いた。車から降りたら、予の面前に、十八九歲の青年が現はれ出で丁寧に擧手の禮をした。能く見れば成程見覺へのある丸顏である。彼はニポール生れだが常にダージリンに居て、雪山見物者の案内を業とし

て居る男なることを考へ出した。而して先年西本願寺の大法主及び御裏方が、印度旅行の折り、法主に見込まれて甲谷他に呼び寄せられ、通辯兼ボーイの役を仰せ附つた男なることも考へ出した。彼は正直で英語を能くし、市中の案内や買ひ物に連れ歩くには誂へ向の男である。乃ち手荷物のバッスを彼に渡し、客引に導びかれ、爪先上りの坂を登つて、ウッドランド・ホテルに投じた。時に午後一時少し過ぎであつた。

ダージリンは漢譯して金剛寶土と云ふ。然し金剛石が土の代りに、ごろ〳〵ころがつてる譯でも何でもない。今日は此の金剛寶土も、雲と霧とにとざゝれて、太陽の居所が分らぬから、西東の區別もつかない。

「近頃は毎日こんな天氣かい」とガイドに問へば、

「さうです、毎日こんな天氣ですが、朝のうちは一寸ばかり、太陽の顔が見えます」と答ふ

「山は見えるかい」と尋ぬれば、

「昨朝は虎ケ岳から、約五分間ほど見えましたが、今朝は私はお客を持ちませんでしたから存じません」と答へた。豈にそれ心細からざるを得んやである。愈々見えぬとあれば、今夜の夢の見かたをきめねばならぬ。それには當市第一の寫眞屋に行つて、ヒマラヤ山の寫眞を出さして、穴のあく程眺めて置くに限る。晝飯が濟んだから老師を誘ふて、市街の見物がてら寫眞屋に行うと獨り心にきめた。

ダージリンは山の中と云ふよりも寧ろ山の横つ腹を切り開いて建た町と云ふ方が適當である。隨て印度平原で見るような平坦な町でない。向ふ三軒兩隣りへ行くにも屹度坂を上下せねばならぬ。

此市は雪山の中にあるけれども、ベンゴール州政廳の避暑地で有から、諸般の設備は仲々よく行き屆いて居る。——行き屆き過ぎると云つた方が當るかも

知れぬ。――然し、カルカッタあたりで見る樣な大きな建物は一つもない。ダージリン第一と稱する、ウッドランド・ホテルの如きも、地所が狹まくて大きな建物が建てられぬ爲め、坂の上下四ケ所に分けて家を建てゝある。勿論小さな家と云つても、日本の家のやうに小さいものではない。

此の行で予が一番氣にかゝるのは、老師の食物である。甲谷他を出てから、牛乳とパンで我慢して貰つたが、折角ダージリン第一のホテルに投じたのだから、何とか工夫して甘い精進料理を作らせたい。時計を見れば晝食の定刻までもう一時間とはない。早速マネージャーを呼んで、一人前精進料理を注文したら、私も實は菜食論の信者で、私の所の料理人は熱心な佛教信者ですから、日本の高僧の召し喫るものと云へば、喜んで作りますとのことだつたから、ヤット之れで一安心した。

ダージリンの一月は流石に寒い。予は既に滿五ケ年半も暖い氣候の印度平原

に住み慣れたので、寒さが一層身にしみる。老師は赤裸になつてお湯を使はれた。けれど予は顏と手丈洗つて胡魔化した。若いものゝくせに、何だと老師から笑はれても二の句はつげない。晝食も喫べてしまつたから、市街見物がてら寫眞屋に行かねばならぬ。然しストーブの側から離れたくない。昔東京の學校に居た時、授業始めの鐘が鳴つても、教授の顏の見ゆるまで、ストーブの側にかじりついて居たことなど、若い時分の甘い夢をたどつて居たら、やがてガイドもやつて來た。老師も既に外出の用意を整へて居られる。いや〳〵ながらストーブの側を離れた。ホテルの玄關を出て、三十間あまりの坂を上り、又三四丁餘の坂を下り、更に右に折れて坂を上り寫眞屋に入つた。應接に出て來たのは十八九歳の美人で此寫眞屋の御令嬢らしい。

「ヒマラヤ山の寫眞を見せてくれないか？」

「ドーゾこちらに御出下さい」

「大きいのと小さいのとありますが、どちらを御覽に入れませうか？」

「ありつ丈の寫眞をみんな見せてくれ」

娘は予を妙な男だと思つてか「一寸お待ち下さい」と云つて奥の方に行き、父親らしいのを連れて來た。彼は五十恰好のスラリとした寫眞屋的に出來た好男子である。

「ヒマラヤの寫眞を御覽になりたいのですか？」

「ハイ君の内にあるヒマラヤの寫眞を、みんな見せて貰らひたい。」

爺はオーラーと云つて、ボーイを呼び、大きな箱の中から大中小五六十種のヒマラヤの寫眞を取り出して見せてくれた。老師も予も數十分間、寫眞に見とれて、たゞ「イヽナア」實に「イヽデスナア」を繰り返し乍ら、土産用として購入すべきものを選擇し初めた。此の間先刻の娘と爺と二人で頻りに説明してくれて居たのに、予は今夜見るべき夢の見當をつくるに急にして、老師に通辯す

るのを打ち忘れて居た。予は自分の氣に入つたのが額に仕立てゝ壁間に掛つて居るのを見附け、達摩樣ぢやないが、壁の方を見つめて居たから、老師は自分で選擇を了へ、これ丈買ひたいとて、予に數枚の寫眞を渡された。やがて勘定を支拂つて出掛けやうとする刹那、娘さんが一寸こちらに御出下さいと云ふから、云はるゝ儘に導びかれて別室に這入つたら、ヒマラヤ山のパノラマを見せてくれた。予は覺えず「これだ〳〵」と叫んだ。予が今夜夢に見るべきヒマラヤの景色はこれなのである。

寫眞屋を辭して、書店に入り案内記や繪葉書を買ひ、次に皮屋をひやかし、老師用として、アフガニスタンの產物として名高い、白狐の襟卷や西藏產の玉石を買ひ、又三四軒皮屋をひやかした揚げ句、同じ白狐の婦人用の襟卷を買つた。これは阿部夫人かめ子の君へ雪山見物の土產である。

ホテルに戻つたら、直ぐマネージャーが、明朝の虎ケ岳行に關する打合せに

やつて來たから、一切の調度は彼に任かせて、老師は詩を作られ、予は老師の端書を代筆した。

夜に入つて寒氣は益々募つて來た。夕飯の時も一杯やつたけれど、迚も寒くて眠られさうにもないので、ストーブの前で、獨りこつそりブランデーを飲み內外からあたゝめて十時半頃床についた。さて之れから寢ころんで、先刻見た彼の崇高莊嚴なヒマラヤ山の附近を夢に逍遙するのだ。

一月十八日午前三時起床、昨日から見やうとときめて居た、ヒマラヤ山の夢も何にも見ずに、四時間の間一息に寢込で仕舞つた。

ブランデはきこしめしけり徒らに
山も見ぬまに夢は醒めけり。

今朝は多分、夢でなく、本當のが見られるだらう。茶を喫しパンをかじつてる間に、籠の用意も出來たので、老師も予も十分防寒の準備を整へ、籠の上の

人となつた。籠はダンデーと云ひ、日本の籠とは全く趣を異にして居る。安樂椅子を擔ぐやうに仕立てたものと思へば大した相違はない。籠は下に三四枚の毛布を敷き、其の上に乘つて、腰から下部に又二枚の毛布をかけた。籠擔ぎは西藏人若しくはブータン人で、一人を擔ぐに四人がゝりである。然し虎ケ岳に行くには坂が急な計りでなく、一時間半乃至二時間もかゝるから、交代の籠擔ぎ四人合計八名で、往復の籠代印貨五留比、人夫への祝儀はお客の隨意なれど、バラサブ（大檀那）顏を立てるには、一人に付四安那合計三十二安那即ち二留比位をおごるのが普通らしい。

ホテルの玄關から十數歩にして坂を上り初めた。四人の籠擔は、前後から互に掛け聲し合つて、調子よく足なみをそろへて擔ぎ上る。ダージリンの町はまだ靜けく眠つて居る。仰げば雲なき空には無言の星が、閃々として煩惱の巷を照らして居る。あの星の下あたりが甲谷他で、あの方角がアリボールの領事の

舎宅で、あの邊がローワー、ラウダンの三井の社宅だらう。まだ畑、平田、前原三兄も阿部兄夫婦等も、常公も俊ちやんも白河夜船で、僕が今この寒む空の星を便りに親友を偲びつゝあることを夢にも知るまい。登るに隨つて家々の軒燈は愈々小さくなり、宛然中空から下界の螢光を賞するの趣がある。

流石に高い所は夜明けが早い、四時半頃虎ケ岳の手前なる舊兵營の跡を通過する時は、夜の黑幕は既に薄らぎて、左手に近く世界最高の銀山が、魏然として雄姿を現はした。今が今まで、暗さと寒さに縮み上つて、一語も發せなかつた、馬上の美人籠上の男子、何れも急に勢づいて、大聲萬歲を唱ふるもあれば「グドモーニン、キング、オブ、マウンテン」と叫ぶもあり。今朝虎ケ岳先登第一の名譽を荷はんとてか、後になり、前になり、互に相競ひつゝ頂上に攀ぢ上つたのは午前五時十分前であつた。

いちはやくわれのぼらんと皆人の

心に競ふさまぞ見えけり

虎ケ岳頂上の實景は昨夜夢に見そこなつた、あの寫眞の景色よりも一層勝つて居る。世界第一の高嶽エベレストを初め、キンチンジャンガ其他の連山が、清淨無垢の白裝束で、崇絶高絶の英姿を我が面前に横へ、轉た人間の汚穢と弱小とを感ぜしめる。

うつせみの世のなりはひも忘れけり
高嶺にしばし心すまして

脚下は一面渺茫たる白雲の大海原で、悠々浪立てる樣は、靜閑にも亦嚴かで、一氣に飛び込んで泳がばやと思はしめる。麗はしき茜色が浪路の涯を彩り、日の神靜かに駕を回らすよと見る間に、魏峩たる銀山は忽ちにして黃金の峰となる。雲の海原も亦旭日の光に和して、龍吟じ象躍るの狀を畫き出す。滿目の形容莊嚴にして平和、幽寂にして絢爛、豪壯にして優美、崇高にして圓滿である。

無限の神秘を藏しつゝ、而かも宇宙の大藝術大哲學を、一處に開展して居るのだから、其の眞景實色を寫し出さんには、人間の言葉や文字は餘りに貧弱である。詩人も此處に來りては口を緘せざるを得ざるべく、畫家も彼處に到りては筆を投じて恍惚たらざるを得まい。

歌もなく描かれもせず筆おきて
人は山を見、山人を見る

予は明治四十五年一月十八日午前五時、ヒマラヤの朝風に吹かれ、親らヒマラヤの霜を踏んで虎ケ岳の絶頂に上り、ヒマラヤ連峰の前に立つた刹那、忽然として我を忘れ、默然茫然たること良久うして、釋尊が四十九年一字不說の道破も、維摩が默然の高調も、しみ〳〵體認し徹底し得たやうな心地がした、之れ單り予のみではあるまい。誰しも彼處に到れば、天籟の幽妙身心にしみわたつて、浮世の是非得失や、娑婆の憂喜苦樂や人間の迷悟美醜など、相對差別の

小さな量見は、すつかり脫却し忘却すると共に、淨躶々赤灑々の妙境を體現し面前背後、頭上脚下の事々物々が、各自獨特の大光明を放ち、秋毫昧ます處なきを見るであらう。一生涯斯くの如き境界に居て、日々夜々に人間天眞の活動を持續せし人、持續し得るものを指して、吾々は大丈夫の漢とも、大悟徹底の人とも稱するのである。昔から深山大澤龍蛇を生ずと云つてあるが、彼の巍然として犯す可らざる威風と、溫乎として人を吸ひ附けずんば止まざらんとする平和の氣に滿ち充てるヒマラヤの山麓は、果せる哉、我が大聖釋尊の如き偉丈夫の漢を產み出した。

虎ケ岳の附近は雪かとまがふばかり、霜が眞白に降つて居る。予は六十六歲の老僧から、笑はれる程の厚着で出掛けたが、二十八度の寒さには聊か閉口した。然し六年ぶりに雪を見、霜を踏んだ時の感想は又格別であつた。

之よりさき甲谷他を發するに當り、平田領事が態々自分の寫眞器を三井社宅

まで持參して、十五分間寫眞術を敎へて呉れられた。而して三井から停車場まで、領事の馬車に同乘して走り乍ら練習し、それでよしとの證明を得て居たので、虎ケ岳の頂上に於ける、掛け小屋の屋根に上り、先づキンチンジャンガの雄姿を、我がカメラに入れやうと試みたが仲々甘く這入らない。予よりも後から上つて來た毛唐のお婆あさんや、お嬢さん達は何れも盛んにパチ〳〵やつて御座る。これを見た予は聊か急き込まざるを得ない。丁度試驗場で、他は皆答案を書いて仕舞つてるのに、自分一人とり殘された時の樣な心地である。間もなくレーディの一人が予の側に來て、「這入りませんか？」と聲をかけてくれたから、私は「全くの初心ですから、貴女一寸見て下さい」と賴んだら、彼女は一寸覗き見て、「立派に這入つて居るではありませんか」と微笑んだ。予は再び覗いて見たら、馬鹿に小さく寫つて居た。あの雄大莊嚴な銀山が、こんなに小さく寫らうとは今が今まで氣附かなかつたのである、之れ予が此行に於ける

第一のシクジリである。斯く愚圖々々して居る間に、我が手はすつかり凍えて終つた。こんな寒い所では厚い手袋を用ゐねばならぬのだと獨語しながら、同道の諸君の手を見たら、何れも厚い手袋が篏つて居た。

靜かに閑やかなりし雲の海原も、旭日の光に會ふて俄かに勢づき、山なす白浪を漲ぎらして、見る間に二萬九千尺の高嶺を覆ひ隱した。我がヒマラヤは晝は雲の蒲團を着て安らかに眠り、夜は雪の衣の白裝束で、嚴かに下界の眠りを見張つてくれるのであらう。我等は再び籠に乘つて山を下り歸途についた。

虎ケ岳の頂で、今朝の模樣によれば、歸る途中で他の方角から、又山が見えるでしやうと案内者が豫言して居たが、果せる哉、山は幾度となく、莊嚴幽妙の姿を現はした。一月の寒む空にこんなに能く山が見えるのは珍らしいさうな。六十六歳の老僧が、はる〳〵日本から訪れなさつたのだから、天もその元氣に感じ、山また名殘を惜んで、斯くは度び〳〵顏を出すのかも知れぬ。

はる〳〵と登りし人の爲めにとて
雲のとばりも開けわたしけん

午前九時ホテルに歸着、同道の善男善女みな大喜びで食堂に入つた。

今日は之れから、達賴喇嘛と老師との會見時日をきめねばならぬ。否こちらから會見を申込むのだから、先方で承諾するや否やさへ分らぬ。達賴喇嘛自身は無聊に苦しんでは居ようし、日本の高僧が會ひに來たと聞いては、會ひたくて堪まるまいけれど、達賴を警護して居る印度の官憲が、東西兩雄の會見を好まぬかも知れぬ。蓋し達賴喇嘛への會見は、ダージリン市の警務長の手を經て申込まねばならぬからである。ホテルのマネージャーは手紙をお書きなさい、私の方から屆けてあげますからと云つたが、然し手紙なんどで往復して居てはまどろつこい。明日は是非とも歸甲の途につかねばならぬ。直接に警務長を訪問して、會見の眞意を披瀝する方が手つとり速い。去れど訪問するには豫じ

め警務長なるもの丶人柄を聞き合せた上にせやうと思ひ、植物園のマネージャー や、寫眞屋のお爺につき尋ねて見たら、彼はシキム生れで、名をラデンラと云ひ、當市では大變人望があり、又熱心な佛敎信者だとのこと。ラデンラと云へば、予が曾て甲谷他のヘスチング・ハウスで達賴に會ふた時通辯してくれたり、シキム國の皇太子殿下に紹介してくれたりした警部が、二年の間に昇進して警務長となつてるのぢやないか知らと老師に物語り、兎に角眺え向きの好人物らしいから、老師と共にその官舍を訪づれた。

果して豫想通り二ケ年前の知己だつたので萬事好都合に兩雄の會見が出來ることになつた。それから我等は警務長の官舍を辭し徒歩でホテルに歸り道で、

「老師、今朝の山見物の感想は如何です？」

「實に何とも云へない氣持がした。恐らくは世界第一等の絶景だらう！」

「私には迚もヒマラヤ見物の紀行は書けません」

「あの本當の眺めと心持は書けまい！」

「ぢや第二第三の閑文字を併べませうか？」

「ウム、どうせ一切の文字は閑文字さ」

「實際身親ら見たものでなくては、天下の形容詞のありつ丈を併べても、あの活景を納得さする事は出來ますまい」

「恰度悟りの開けない奴に、悟りの境界を話して聞かせると同じ事だ。自分で悟つて見にや、悟つた個中の乾坤は迚も味はれない」

「悟つたものが悟らないものを見る、即ち悟者の迷者觀は何んなものでせう？」

「君一つウント工夫思量して御覽」

「醉はないものが、醉つぱらいを見るようなものでせうかしら？」

と問ひつ答へつして歩いて居たら、既にホテルの玄關についていた。

晝食後は植物園見物に出かくる豫定であるが、まだ時間が大分あるので、老師は日本行の繪葉書を書かれ、予はその表書の横文字を書きながら、讀むとはなしに新聞を見て居た。處が海外電報欄の眞中あたりに「大阪に大火あり、數百の女子家なしの慘狀を窮む」とある。老師に此の事を話したら、大阪には知人や信徒が澤山居るが、大阪の何處と書いてあるかね、ことに由つては見舞狀を出さにやならぬ」。「何區とも何町とも書いてはありませんけれど、數百の女子が家なしになつたとありますから、多分貸座敷が燒けたのでしやう』。

午餐も濟んだから、三人押し引きの人力車に乘つて、植物園見物に出かけた。坂だらけのダージリン市では、日本風の人力車は役に立たぬらしい。即ち三人若しくは四人がゝりで、押したり引いたりするように出來て居る。植物園には日本の杉、松、櫻、桃、梅、藤、竹、躑躅、其他色々のものが移植され、威勢よく榮えて居るのを見て非常に心嬉しく感ずると共に、日本人の海外發展もか

くあれかしと祈つた。

予は海外に出てから、日本の教育機關の不完全な事を痛切に感ずるもの丶一人である。そは植物園などに行つて、珍花奇木を見ても、立派な花は立派だ、妙な木は妙だと感ずる外、何等植物に關する智識、否常識さへ備へて居ないものが、日本人の中には十に八九はあるからだ。博物館や動物園に行つても亦同じ事である。中學で習つた博物や動物學は、いや〳〵乍ら試驗前に暗記したのだから、丸つきり智識となつて居ない。予は生徒の心掛けの足ない爲め計りでなく、又教師其人の教授の下手な爲め計りでなく、教員自ら生徒を引きつれて面白く實物教授をなすべき植物園や博物館や動物園がないからであるやうに思つた。印度の樣な他國の領土になつて居る國ですら、到る處にそれ相應の植物園もあれば、博物館も動物園もある。而して觀覽無料である。殊に甲谷他市の博物館の如きは一週一日は學生日を設け、その日は學生だけを入れて他の觀覽

を許さない仕組になつて居る。蓋し各學校から出て行く、實物教授の妨害を防ぐと共に、大學々生などの研究を便にする爲である。予は印度の學生共から、日本の博物館や動植物園や圖書館なんどは、實に立派なものでしやうねと問はる丶毎に、冷汗を流せしこと幾度なるかを知らない。徒らにハイカラな眞似ばかりするが能ではあるまい。東京とか大阪とか神戸とか廣島とか京都とか云ふ大きな市には、觀覽無料で實質ある圖書館、博物館などの設備をして、人民の常識を高める樣な工夫をこらして貰ひたいものだ。印度のは凡て官立であるが。少しも官臭を帶びて居ないから嬉しい。早い話が僕等が圖書館などに行けば、係り員の方から御辭儀する位で、日本のとは丸で反對の現象を呈して居る。日本では御辭儀はして貰はんでもいゝから、今少し官臭を離れて貰ひたいと思ふ。

午後七時頃警務長ラデンラ君から「先刻は御來訪を忝ふし奉深謝候。

實は自ら參堂敬意を表する積りに御座候處、豫期せざる事件起り候ため、手紙を以て申上候、法王、達賴喇嘛猊下には、明日午前十時半より、日置老師に會見遊ばす事に相成候間、十時まで拙宅に御來駕被下度御待ち申上候」てふ意味の手紙が來た。老師に此の事を話したら、何も彼も好都合にいつて滿足だと喜ばれた。

明日は朝の中に荷物を片付けて、達賴に會見し、午後二時發の汽車で甲谷他に歸へらねばならぬ。

* * * * *

一月十九日。午前六時半起床、甲谷他の阿部兄宛「今日の汽車で歸る」との電報を發し、それ〴〵豫定通り要務を濟まし、午前十時ラデンラ君を訪れた。ラデンラ君は馬で、吾々は籠で達賴喇嘛の處に向ふた。坂を上り又坂を下ること三十分間にして、西藏法王旗の飜へつてる家についた。門には一名の兵士

と一名の巡査とが番して居た。階下に待つこと三分時にして、總理大臣が三名の部下を連れて階下に來り、一應の挨拶をすまして、吾々を階上に導いた。達賴喇嘛はニコ〳〵顔で椅子にかけて待ち構へて居る。吾々はラデンラ君から習つた通り、法王の面前に進み、例の白絹を捧ぐれば、法王は自ら之を受取り、眞言か何か口の中で唱へて、それを吾々の肩にかけてくれた。さあ之れから兩雄の會話だ。予は日本語を英語に又英語を日本語に、ラデンラ君は英語を西藏語に又西藏語を英語に通譯せねばならぬ。時に法王は徐ろに、

「態々御來訪を忝ふし欣喜感謝の至りに堪へません。御見掛け申せば仲々の御老體、長途の御旅行に健康上何の御障りもありませんでしたか?」

「忝ふ存じます。佛天の加護により今日まで、恙なく旅行致して居ます。今日は猊下に拜顏するの光榮を得まして、何より喜ばしく存じます。」

「貴宗師の御寺のある處は、日本の何う云ふ處で御座いますか?」

「日本の現今の首府東京と昔の首府西京との中央に位する地にあります。それで名古屋市のことを一名中京と申します」

「何う云ふ御寺で御座いますか？」

「先年印度で發見せられました佛骨を、英國政府は、暹羅國皇帝陛下に獻上し、暹羅國皇帝陛下は其の一半を日本佛敎徒に御分與遊ばされました、その佛舍利を奉納するために建てられた寺で御座います」

法王は西藏の山奥から御出掛けになつて居るので、佛骨發見地、ピプワラ塔及びその發掘の由來なんどは、少しも御承知ないことを承知せる予は、老師の許を得て、予が知つてる丈委はしく説明した。予が説明の了るや否や、問答の位置を轉換して老師が問者となり、法王は答者となる。

「猊下の敎民は、猊下が久しくラッサの地をお離れ遊ばすので、信仰の中心を失はんことを憂慮に堪へませんが、如何で御座いますか？」

「それは何よりの心配で、一日も早く歸還して敎民を安心せしめ、益々佛法の興隆を計りたいと思つて居ります」

「猊下のお國での僧侶の敎育法は、如何ようになつて居りますか？」

「寺々でやつて居りますが、先年印度大陸に散在する佛蹟を巡拜し、法は人によりて興ることをしみ〳〵感じました。承れば今、貴宗師の隨行員山上氏は、先年から甲谷他大學で佛敎哲學を講じ居らるゝ由、我が國からも立派な學者布敎師を出したいと希望して居ります。貴國に於ける佛敎僧侶の敎育法は如何で御座いますか？」

「我が國では、佛敎各宗中の勢力ある宗派は、各自中學大學を設けて、普通學と專門學を施して居ります。又官立の帝國大學に於いても佛敎哲學の講座が設けてあります。猊下御歸還の上は門下の青年秀才を撰び、弊國に留學生を派遣せられては如何で御座いませう？」

「貴説最も我が意を得ました。一般民衆の智識を高むるには、先づ教導者の智識を弘く且つ高くし、文明の教育を施させねばなりませぬ。自分も近來大に感ずる所がありますから、歸國の上は先づ第一に教導者の教育法を改め、事情の許す限りは貴國に留學生を送りたい考で御座います。其時は何卒宜布御高配を御願ひ申します」

「出來ます丈便宜を計りませう。風俗習慣こそ國々によりて異なつて居ますけれど、吾々が信奉する佛教の精髄に到つては、皆同一で御座いますから、吾々佛教徒は國の東西を問はず、互に助け合ひ一致協力、以て佛陀の光明を世界に輝かしむるのが最大の本務と信じます」

「同感でございます。貴宗師御歸國の上は、互に氣脈を通じて佛法の興隆を計りたいもので御座います。我國でも遠からず、郵便制度を設けやうとして居りますから」

法王は此所で予に向ひ、

「山上さん、あなたは之からまだ長く甲谷他大學に留任なさいますか。先達、ニージャンが來て、頻りに貴君の話をし、日本の僧侶のえらい事を噂して居ました」

「私の擔當致しました講義は、昨年の十一月までに、一應完結致しましたが或は又今年度から新たに『印度佛教史』を講ずることになるかも知れません。實は私の方で決心しかねて居ります」

今云つたニージャンは名義は達賴喇嘛の御用商人なれど、事實は總理大臣に次での勢力家で、達賴及び總理大臣の信用厚く、西藏法王の財政顧問とでも云つた樣な位置の男で僕の友人である。

法王はまた老師に向ひ、

「貴宗師の門下生は幾人位ありますか」

「百五十名程居ます」

此の間一分間ばかり雙方無言なりしが、老師は更に話頭を轉じて、

「拙衲は此の好機會に際し、込み入つた教法上の問答を致したいと思ひますけれど、貴國の言葉を解しませんので、通辯の口を借りては十分に貴説を拜聽し、又愚説を述ぶることが出來ません。之が唯一の遺憾で御座います」

「自分もさう申上げたい所で御座いました。自分が貴國の言葉を解せざるを殘念に思ひます」

「初めて拜顔致しまして、覺えず長話を致し恐縮の至りに堪へません」

「何う致しまして、初めて貴宗師の樣な日本の高僧碩德に會ひ、欣喜の至りで御座いました」

「再會を期したきは、山々で御座いますが、海山數千里を隔て、加ふるに拙衲は餘命幾許もなき老年で御座いますから、別に臨んで、猊下の御法體の御

安康を祈ります」

「有り難う存じます。私も貴宗師の御健康を祈ります」

と云ひ終つて雙方合掌低頭して別れた。歸途には警務長ラデンラ君の發議で暫らく三人共、徒歩で坂を上りながら、互に胸襟を披瀝して話をすることにきめ、馬と籠は前に進めて坂の上に待つて居るように命じた。而してラデンラ君が道中の話題として、各自の達賴喇嘛觀を腹藏なく、然し乍ら簡短に述べませうと云ひ出した。門に入るものは先づ額を見よとも云ふし、人間の眞價を觀るには初相見の刹那に限るとも云ふから、先づ老師の達賴喇嘛觀を拜聽しやうぢやないかと、予が云ひ出せばラデンラ君、それは至極面白いと賛成した。

「ぢや君老師にその事を願ひ給へ」

「然し君等が菩薩の權化として信奉して居る達賴喇嘛の人物批評をしたら、罰が當りはせんか知ら?」

「そんなに、ませつかやしちやいかんよ」
「でも君は老師と僕にだけ、達賴觀を吐かせて置いて、自分はいゝ加減に逃げようと云ふ積りぢやないかね？」
「でも老師の說を聽こうとは、君が云ひ出したぢやないか？」
「僕が云ひ出したにや違ひないが、……實は人物觀など云ふ六ケしいことの通譯は僕には迚も出來そうにもないからね」
など、胡魔化して、とう〳〵坂を上りつめて仕舞ひた。
ラ君と我等は此所で分れねばならぬ。
「突然まゐりまして大變御厄介になりました」
「はる〳〵お訪ね遊ばしましたのに、一向行き屆きませんで　：不行屆の段は惡しからず御容赦を願ひます。初對面で甚だ失禮ですが、記念の爲め老師の御寫眞を一枚頂戴出來ますまいか」

「甲谷他から送つてあげませう……色々御親切に御配慮下さつて難有存じます。左樣なら」
「左樣なら」
溫き握手をなして分れたのは正午少し前であつた。

附錄　ヒマラヤ記　終

大正四年九月十日印刷
大正四年九月十三日發行

今日の印度
正價金八拾五錢

著作者　山上曹源
發行者　鶴田久作　東京市本郷區西片町十番地
印刷者　中島藤太郎　東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷所　神田印刷所　東京市神田區錦町三丁目一番地

著作權所有

發行所　東京市本郷區西片町十番地
玄黄社
（電話下谷一三九番）
（振替東京七九九五番）

玄黃社發行書目

印度タゴール著　三浦關造先生譯（第十版）

森林哲學 生の實現

四六版上製
全一冊
正價八拾錢
郵税八錢

▼本書を見ずして新思潮を語る勿れ

本書は現代東洋第一の文豪として世界的名聲高きタゴールの名著で、タゴールは實に英文で書いた本書の爲めに世界的名譽の月桂冠たるノベル賞金を贈られ、又歐米の識者をして「今後はタゴールの時代也」とまで驚嘆せしめたのである。これ實に東洋精神の美妙雄大なる詩的表現、西洋文明の根本的批判、東洋思想勝利の熱烈なる大文字である。オイケン、ベルアソンの未成品と異り、渾然たる眞理の奥底より出づる新しき生の叫びである。其思想に天涯無窮の平和があり、人類の永遠な秘義が解決されてある。文學、倫理、宗教に心ある人、新生に憧がるゝ人の熱讀を要する經典はこれである。

トルストイ著　三浦關造先生譯

人生

新刊　初版即日賣切　再版出來

四六判上製
全一冊
正價壹圓十錢
郵税十二錢

本書は人類の大恩人たる杜翁が六十歳より八十歳に至る即ち彼れの最も權威ある時代の人生に關する諸論文を集めたものである。今や杜翁の名は一般に知られてゐるが、翁の偉大なる胸に萬人の生命の呼吸が托されて居ることを知る者は尠ない。本書は實に巨人の至誠より出でたる世界大の獅子吼で、人間の眞生命、眞生活、眞の科學、藝術、宗教、文明は皆茲に其根底を置かなければならぬ。即ち有ゆる人心に巣くつた癈疾を一掃し、天朗かに地聖き處に永久の喜びを呼吸して徹底の眞生活に入らむとする者の必讀すべき最大最强の文字である。

慶應大學講師 戸川秋骨先生譯

エマーソン論文集

▲總クロース、文字入高雅美本

◉上卷 正價一圓四十錢 郵税十四錢

◉下卷 正價一圓二十錢 郵税十二錢

近代に於ける最も幽玄にして最も健全なる思想家はエマーソンなり。加之其文辭最も簡潔にして又最も雄勁に、句々みな座右の銘とするに足る。本書の譯文又精確、忠實と懇切とを盡し、恰も原作に接するの感あらむ。苟も思想界の事に留意するもの必ず一讀しべき也。

上卷（七版）

◎歴史論
◎戀愛論
◎大靈論
◎自恃論
◎友情論
◎圓環論
◎報償論
◎細慮論
◎智力論
◎藝術論
◎勇壯論
◎人格論

下卷（三版）

◎詩人論
◎作法論
◎政治論
◎經驗論
◎進物論
◎名目論
◎自然論
◎改革論
◎靈法論

高橋五郎先生譯

ベーコン論説集

（十三版）

世界論文集中の王として三百年來學者の爭て愛誦する全編五十八の名什、句々金玉『之を讀む廿回、讀む毎に新意味を發見し來る』とは眞なり、以て處世經たるべし、以て思想辭典たるべし、いま斯學大家の逐字譯成る。

總クロース 全一冊
定價壹圓貳拾錢
郵税拾貳錢

要目

◎眞理を論ず
◎死を論ず
◎富を論ず
◎美を論ず
◎復讐を論ず
◎逆運を論ず
◎迷信を論ず
◎秘滑を論ず
◎自愛を論ず
◎交友を論ず
◎商議を論ず
◎猜疑を論ず
◎攝生を論ず
◎談話を論ず
◎幸運を論ず
◎親子を論ず
◎然怒を論ず
◎熱愛を論ず
◎旅行を論ず
◎貴族を論ず
◎豪膽を論ず
◎園囿を論ず
◎統治を論ず
◎忠告を論ず
◎運疑を論ず
◎智を論ず
◎高地位を論ず
◎無神説を論ず
◎功名心を論ず
◎習慣と教育を論ず
◎青年と老年を論ず
◎結婚と獨身を論ず
◎農場と假扮を論ず
◎學問及讀書を論ず
◎名譽と聲聞を論ず
◎邦國の眞像を論ず
◎人に於ける天性を論ず
◎事物の變遷を論ず
◎姻族及羨望を論ず
◎畸形愛を論ず
◎癒疾を論ず
◎禮式と遵儀を論ず
◎者及朋友を論ず
◎從外十四章を論ず

時事新報評

『……ベーコン論説集は我國譯界の重鎮と稱せらるゝ高橋五郎氏の妙腕により、遺憾なく邦語に飜譯せられたり。余は之を原文に對照して實に寸毫の老熟せる手腕に敬服せり……高橋氏の「ベーコン論説集」は飜譯書として最も成功せるものゝ一ならん……』

漢學老人　樋口銅牛先生著　（再版）

碑碣法帖談

附　孫過庭書譜
和漢歷代法書

書道の旺なること今日の如きは稀なり、

隨て其根源たる碑碣法帖類の研究日を逐ふて益々盛ならんとす。然るに之が津筏たるべき書籍の一も之れある無きは豈昭代の恨事にあらずや。碑碣法帖談は先頃來東京朝日新聞紙上に連載せられて江湖の愛誦措く能はざるものなりしを、此度多數讀者の懇望に應じて集めて一卷となし、更に評註を增したるもの、又卷末に孫過庭書譜の譯文並に**和漢名家の筆蹟三十二葉**（本文中亦別に寫眞版數十個を挿入す）を加へたり。字を說くの銅牛先生が書學に於て亦其識見の該博精透なるは既に公論あり。世に字を書かざる人なし、乃ち滿天下の人皆此書を一讀せざるべからず。古來の書に於ける問題は此書悉く之を解決せり。隨つて書の將來に於ける針路も此書また能く之を明かにせり。書の藝術的價値の如きも、此書之を闡發し得て餘蘊なし。

總クロース金文字入高雅美本　全一冊
正價壹圓五拾錢　郵稅拾貳錢

中村不折先生　小鹿青雲先生　共著　（再版）

支那繪畫史

不折畫伯裝釘意匠
菊判總クロース製美本　全一冊
正價壹圓五拾錢　郵稅拾貳錢

▼我國に於ける始めての新著

支那繪畫は日本繪畫の父母也、支那繪畫を知らずして日本繪畫を語るは妄なり、本書は斯道のオーソリチーたる著者が多年の蘊蓄を傾盡して着手以來實に三年餘の星霜を經て完成せられ、添ふるに支那各時代代表畫の頁大アート刷**寫眞版二十九葉**と詳細なる**人名索引**とを以てせるものなれば、本書は即ち兼ては**支那代表畫の畫帖**とも見るべく或は**支那畫家人名辭書**とも見るべく美術に志あるもの、必ず一本を缺く可らざるもの也。

◉時事新報評「吾人は本書を目して本邦唯一の支那繪畫史とし深く推賞する者也」。

永平寺貫首 勅特賜性海慈船禪師 森田悟由題辭
總持寺貫首 勅特賜大圓玄致禪師 石川素童題辭
前北京大學堂教授 小鹿青雲譯註

和譯詳註 碧巖集

◉禪門第一の書、懇切未曾有の和譯詳註

古來禪門第一の書として玄奥の妙致、絶倫の文章を以て江湖に喧傳せらるゝ碧巖集の和譯詳註にして、卷末附するに原文の全部を以てす、著者亦斯道の碩學也。これ煩瑣不徹底なる講義に非ず、一知半解の和譯に非ず、通讀の間、玄旨釋然、恐らく手の舞ひ足の踐む所を知らざらん。敢て一讀をすゝむ。

中村不折書伯
口繪及び裝幀

菊判上製極美本
本文八百十頁
全一冊
正價金貳圓五拾錢
小包料內地十二錢
臺、樺、朝、清四十錢

田岡嶺雲先生譯註

和譯維摩經
附和譯般若心經

(三版)

總クロース
金文字入
全一冊
正價金七拾錢
郵稅金八錢

佛經八萬四千卷、就中啻に方外緇衣の人に重んぜらるゝのみならず、亦其所說の幽緲と其文字の古奥とを以て古より詩人文人の間に喜ばるゝもの、維摩及般若心經の右に出づる者なし、今此二書をとりて逐字譯を施し且つ簡明親切なる挿註を加へ、別に卷末に原文をも添へて一冊となしたる者即ち此書なり、佛教の眞諦を味はんとするもの及び苟くも文章に志ある者は一冊を座右に備へ、明窓の下、淨几の上、爽晨靜夜香を焚いて之を讀め。

露國メレジュコーフスキー原著
文學士 森田草平 文學士 安倍能成共譯

人及藝術家としての トルストイ

並にドストイエフスキー

此書は文明批評家として當今世界第一人者と言はるるメレジュコーフスキーが靈肉一致を唱導する象徴主義の立場からトルストイとドストイエフスキーを評傳したものである。即ち文豪の評傳である。一度此書を繙かば、其人の人生觀なり藝術觀なりを一變せずには止むまい。譯者は始終興奮を以て此書を譯了した。小說よりも面白い論文である。尙此書の英譯は誤譯と脫漏とに充つ。英譯を讀む程ならば、獨逸譯に據れる此書を讀まれんことを乞ふ。

◉人としての部(上卷)森田
◉藝術家としての部(下卷)安倍

橋本邦助氏裝釘
中判上製美本
肖像三葉入
◉全一冊
正價壹圓五十錢
小包料內地十二錢

東北學院教授 增富平藏先生譯

ショーペンハウエル隨想錄

▼厭世悲觀の哀調——再生解脫の福音▲

本書は、將來に於ける一切の精神的又道德的文明の根底とすべき者(ワグネル評語)と云はれ、或は形而上學の完成者(ドイツセン教授評語)とたゝへらるゝショーペンハウエルが弱年の頃より晩年に至る迄隨時に書留め置けるものをグリーセッバ博士が秩序的に編纂せるものにて、上は倫理宗教の眞理、處世の指南より、下は男女の情事、交接等に至るまで忌憚なく論議して一流の人生觀を吐露せる短文實に四百餘章、譯筆亦ショ氏の私淑者增富先生が三たび稿を更へたりと言はるゝほど極度の苦心を重ねたるものにて、警拔の想、明快の文、相俟つて近來の好譯本たるを疑はず。

橋本邦助氏裝
四六版總クロース
正價壹圓貳拾錢
郵稅拾貳錢

◉時事新報評「譯筆の正確にして力强さは原著の面影を髣髴せしめて遺憾なく、近來出色の譯書と謂ふべし」

故田岡嶺雲譯註

和譯漢文叢書

◎全部見本は往復端書にて申込あれ

中村不折畫伯意匠裝釘
四六版總クロース美本
全十二冊
正價計金拾參圓八拾錢
全部一時に注文は郵税を要せず

復古は即ち維新なり、ルネーサンスは希臘古學の研究より新らしき歐洲の文明を生めるに非ずや、所謂漢學の復興なる者も亦豈に守舊思想の發動としてのみ見る可けんや、進歩に資せざる復興は無用也。漢學復興にして若し新らしき何物をも我が人文の發達の上に加ふること無からしめば、骨董の玩弄以上に果して何の意義ありや。

既に漢學の復興にして骨董的翫弄に終る可からずとせば、其研究は新らしき方法によらざる可からず、新らしき時代は新らしき樣式を要求す、今日は即ち漢學研究の方法に一革命を見ざるべからざる秋に非ず耶。我が漢文和譯叢書は實に此の漢學新研究の爲めに新時代の要求に應じて生れたる者也。

夫れ新時代が漢學の上に要求する所は、其外形に非ずして、其內容にあり、其修辭に非ずして、其思想にあり、今日は漢文として漢支を讀修するを要するの時代に非ず、否繁劇なる今の時代は、漢文のまゝに漢文を讀むが如き迂濶なる方法を容さず。

且つ漢文は之を時文に飜譯するが爲めに甚しく原文の妙味を損する者に非ず、既に往時に於ても邦人の漢文を讀むは反點乘假名の法によりて飜譯して之を讀みたりし也、今之を假名交り文に書き下したりとて漢文の妙味を咀嚼する上に於て何の逕庭かあらんや、必ず漢文のまゝに非ずんば漢文の妙趣を味ひ得ずとするが如きは一種の迷信のみ。

既に甚しく原文の妙趣を破らずして而して時勢の新要求に應ずべき唯一の漢學新研究の方法は即ち漢文和譯の上に存す。我が漢文和譯叢書は實に諸他和譯叢書に先だちて出で、漢文研究の上に破天荒の試をなして一新紀元を開きたる者也。其譯文の正確と挿註の簡淨とは世既に定評あり、必ずしも贅せず。

本叢書は原文の一字を換へずして明瞭なる假名交り文に書き下し、且つ故事熟語及稍難解の句には皆懇切明晰なる註解を挿入したるものなれば、之を通讀する者は些の遺憾なく千古の名文を味ひ得ると共に其中の成語成句等を學び得べく、之を原文と對照する者には無上の好案內たるべし。書目左の如し。

故田岡嶺雲譯並註

和譯漢文叢書

◉全拾貳册　正價金拾參圓八拾錢　一時に御注文は郵税不要

不折書伯裝釘意匠
總クロース高雅堅牢美本

第一編　和譯老子莊子　全一册　正價金壹圓　郵税金拾貳錢

虛無主義自然主義は必ずしも近代の產物に非ず、二千載の前、天既に絶高の才を支那に下し、絶奇の文によつて虛無自然の哲學を說かしむ、老莊是れ也。今の世の名利に焦燥し、死生に煩悶し、小是非小僅疑の岐路に彷徨する者は、須らく來て此書に參すべし。汝を挈げて現實の枉梏より脫し窈冥惝怳の無礙自由に遊ばしめん。

第二編　和譯韓非子（地圖附）全一册　正價金壹圓貳拾錢　郵税金拾貳錢

韓非子は東洋のマキアヴェリー也。慘礉なる其說、冷峭なる其文、觸るゝ所皆血を見る。人情輕浮刻忍に、譎詐陰險、誣陷擠排是れ事とする今の時に當りては、韓非が權謀術數の論も、亦處世の要訣たらん。

第三編　和譯戰國策（地圖附）全一册　正價金壹圓貳拾錢　郵税金拾貳錢

戰國の時策士說客雲の如し、旁午として列國の間に馳騁し、其智を竭くし、其辯を窮めて以て縱談橫論す、舌頭火あり晝咖烟を噴く。戰國時代は實に支那に於ける思想の最高潮時代たると共に、又辯論に於ける最華麗時代也。一部の戰國策は即ち人間智辯の結晶にして而して又險仄なる處世上の要訣たり。

第四編　和譯荀子　全一册　正價金壹圓　郵税金拾錢

荀子は孔孟と相並んで亦儒教の一大オーソリチー也。而して其性惡論は正に近世の西洋倫理說と一致す。本書依例譯文暢達註釋明透の外に卷頭に四十頁に涉る荀子評論を揭ぐ。荀子を中心として縱橫に支那思想を論破せる者、是れ一部の先秦哲學小史なり、壓搾せられたる支那思想史なり。

第五編　第六編　和譯史記列傳　上下二册　正價各金壹圓貳拾錢　郵税各金拾貳錢

史記は二十二史の冠冕にして、其文は千古の絶稱たり。就中列傳七十、英雄の風雲、兒女の柔情、正邪忠奸、賢愚淑慝、各人各樣の態を盡して、筆鳴り、鬚躍る。荀も漢文をいふ者は即ち此書を讀まざる可らず。

第七編　和譯七書　附鬼谷子　全一册　正價金壹圓　郵税金拾錢

◉武經七書、即ち孫子、吳子、司馬法、尉繚子、三略、六韜、唐太宗李衞公問對と鬼谷子とを收む。甲兵を陳れ矛戟を列ねて而る後之を械と云ふのみに非ざる也。宇宙は一大戰場也、何れの處何れの時か戰にあらざらん。武經七書之を兵法といふと雖も、亦一種の處世術也。人に克ち、人を服し、人を制する秘訣自ら備はる。鬼谷子に至つては縱橫家の祖、揣摩捭闔の權謀を說いて微に入り妙に通ず。

第八編　和譯淮南子　全一册　正價金壹圓貳拾錢　郵税金拾貳錢

淮南子（ゑなんじ）は漢代に於ける一種のエンサイクロペヂヤなり。儒と云はず墨と云はず道と云はず先秦諸子百家の成句荀くも益ある者は盡く收めざるなく、上は三皇五帝より下周秦に至る迄の故事荀くも傳はる者は盡く載せざるなし。而して人事百般に涉りて此が應用を說く、淮南子一部は實に一種の處世訣、道德訓たるのみならず、亦一種の金言集なり、格言集なり、將た又一種の文章辭典なり、故事辭典也。

第九編 和譯墨子列子 全一冊 正價金壹圓拾錢 郵税金拾貳錢

戰爭を非とする平和論者たり、奢侈を非とする勤儉論者たり、而して又有神論者たり博愛論者たる墨子の說は、周末諸子中の一異彩也。其說亦現代の時弊に中る者多し。但其書錯簡誤脫頗る多く、先秦諸子中最も難解と稱せらる。嶺雲先生其一家の見に據り傍ら古今の諸註を參酌して之を校訂し、渾然として復舊瑕を留めず、本文既に讀易きを致し挿註また叮嚀を極む、墨子寛に難解を憂へず。列子は即ち道家中別に一家を樹つる者、其說は虛泊寥淵、其文は簡勁宏妙、老莊と併せ讀むべき者也。

第十編 第十一編 和譯春秋左傳（地圖年表附）上下二冊 正價各金壹圓貳拾錢 郵税各金拾貳錢

孔子春秋を作りて亂臣賊子懼る、左氏乃ち經に因りて史實を敷衍す所謂左氏傳是れ也。春秋に三傳ありと雖ども敍事の詳贍なると文章の艶富なるとに於ては即ち獨り左傳を推すべし、其の敍事は即ち周末の歷史に於ける唯一のオーソリチーにして其の文章は或は之を莊子と並稱して先秦文中の白眉なりと絕稱せらる。但動もすれば行文奇古にして讀み難きを憂ふ。本書譯し得て極めて平明、以て讀書子座右の好侶とするに足らん。

第十二編 和譯東萊博議 全一冊 正價金壹圓參拾錢 郵税金拾四錢

東萊博議は左傳の史論集たるに過ぎずと雖ども、呂東萊が識見學問文章を傾倒して盡く此の中に在り。立論切實、筆端縱橫、言は必ず肺腑に入り、說は必ず情僞を決す。左傳を讀む者は併せ看んことを要するのみならず、苟くも文章に志ある者此書に熟せば、庶幾くは筆を執つて窒滯なく想を遣る自在を悔むるを得んか。

和譯漢文叢書に對する諸批評文中の寸言の拔粹

◉東京朝日新聞評 譯文の簡淨と註解の明晰とは此書の特色也（明治四十四年三月二十四日） ◉萬朝報評 つくづくこの式の最も進步せる形式なるを思ふ也（明治四十四年七月三十一日） ◉報知新聞評 譯文註釋共に嶺雲氏獨特の異彩を放つ（明治四十四年十月二十八日） ◉讀賣新聞評 多くは譯者其人を得ず加ふるに杜撰粗漏の譏りあるを免れざるに獨り本叢書の嶄然一頭地を拔ける所以のものは云々（明治四十五年四月二十日） ◉二六新聞評 近時出版せられたる此の種の著譯書中、本書に比肩すべきものあるを見ず（明治四十三年七月二十一日） ◉日本及日本人評 眞に漢文和譯書中の魁とす（明治四十四年八月一日號） ◉大阪毎日新聞評 近時續出の漢文和譯物中の白眉となす（明治四十四年五月二十九日） ◉東京毎日新聞評 吾人は未だ嘗て此の如く氣の利きたる思付に接せざる也（明治四十三年八月六日） ◉時事新報評 印刷製幀も亦其姉妹篇にゆづらず頗る善美を盡したるは何よりだ（明治四十四年三月二十一日）

韓非子見本

しぬ。文子、其御に謂つて曰く、曾子は愚人なるかな。我を以て君子となさば、君子安んぞ敬することなかるべけんや。我を以て暴人となさば、暴人安んぞ侮るべけんや。曾子、僇（リク）せられざれば、幸なりと。

鳥に翮（カク）々といふものあり。重首（首重キナリ）にして屈尾（マカレルナリ）なり。將さに河に飲まんと欲すれば、則ち必ず顚（コロ）す。乃ち他ノ一鳥其羽を銜（ブク）みて之を飲ましむ。一人の飲むに足らざる有る所のもの（自ラ飲ム能ハザル者ノ意）は、其羽（モト）を索めざるべからざるなり（其羽ヲ銜ム者ヲ求メザルベカラズ。即チ衆助ヲ待チテ事成ルニ喩フ）。

鱣（セン）は蛇に似、蠶（シヨク）は蝎に似たり。人、蛇を見れば、則ち驚駭し、蝎を見れば則ち毛起す（身ノ毛ヨダツ。然ルニ）。漁者（クヤシ）は鱣を持ち、婦人は蠶を拾ふ、利のあるところは、皆賁諸（ホンショ）（古ノ勇士孟賁專諸）となる。

伯樂、其の憎む所の者に、千里の馬を相（サウ）するを教へ、其の愛する所の者に、駑馬（ドバ）を相するを教ふ。千里の馬は時に一にして、其利緩く、駑馬は日に售られ、其利急（ラウマ）なればなり。此れ周書に所謂下言にして上用するものなり（卑下ノ言却テ高上ノ用アリ、即チ駑馬ヲ相スルノ却テ利アルニ當ル）。

高橋五郎先生譯

セネカ論說集

羅馬の大哲ルシアス、セネカの全集たる **世界屈指の論文集** にして毎篇 **人間處世上の絶高教訓** たらざるなく古來 **智慧の總持** と呼ばれて、歐米讀書家の愛重措かざるものなり、今や **此種飜譯界の權威** たる高橋五郎先生苦心の譯文成りて **明快暢達を極む**。苟もペーコン、エマーソン等の論文に興味を有する人は、之が源泉 **大哲の人生觀** たるの如何に深遠博大なるかを見よ。

◉日本及日本人評『千載不朽の大文字として日月と光輝を爭ふといふも溢美ならず又行文の自在にして譯筆の流麗なる、洵に譯者其人を得たりと云ふべし』。

總クロース美本
全一冊
本文七百二十頁
正價壹圓六拾錢
郵稅拾四錢

序文　三宅雪嶺、戸張竹風、藤井紫影、大町桂月、河東碧梧桐、堺枯川、國府犀東、笹川臨風、泉鏡花、徳田秋聲、藤田銀峰、千葉秀甫、白河經洋、佐々醒雪、鹿島穀菴、正岡藝陽。
故田岡嶺雲著　◉挿畫　未醒、芋錢、月村三先生（計七枚）（四　版）

數　奇　傳

四六版總クロース
美本　全一冊
正價九十錢
郵税十錢

著者自ら序して曰ふ『數奇傳一編、是れ予が生きながら屍の上に建てた自撰の墓誌也』と。著者病臥五年三尺の牀上を天地として、輒軻數奇の半生を追懷して即ち此録を成す、戀あり、貧あり、病あり、放浪あり、下獄あり、戰戰あり多恨善愁の著者が運命に沈き、運命と闘ひ、遂に運命に安ずる波瀾曲折の閲歴は正に詩よりも多趣に小説よりも多奇也。

要目

◉即ち凡人傳也　◉記憶に遺れる幼時　◉虚病なりし少時　◉無言無形の伴侶
◉郷關を出づ　◉病蓐の五年　◉水産傳習生　◉初戀
◉鎖魂記　◉自業自得の落魄　◉混上の一年　◉從軍
◉獄に下る　◉生のひこばへ　◉死の滅び　◉戰爭と新聞
◉姑蘇の二年　◉病の衰えへ　◉足のなえ　◉病を養ふ
◉自由民權論の感化　◉平凡な學校生活　◉始めて家あり　◉天數亂打
◉終に病む

（三　版）

エマーソン原著
高橋五郎先生譯

處　世　論

總クロース美本
全一冊
特價金壹圓
郵税拾貳錢

目次

◎運命。　◎勢力。　◎富有。　◎修養。　◎禮儀。
◎禮拜。　◎餘論。　◎美。　◎迷想。

米文豪エマーソンの「コンダクト、オブ、ライフ」を飜譯したる所謂思想に富膽なる想像を加へ、有り觸れたる成功談の如く淺薄なるものにあらず、譯筆又精嚴にして其跌宕奥妙なる文章思想を解釋するに遺憾なし、一編深高なる處世經として凡て九章句々悉く深邃なる何人も一讀すべし』——國民新聞評

高橋五郎先生譯

ラロシフコー

寸鐵 又名 人生裏面觀

ラ公(佛國貴族)の皮肉觀と云へば歐米の文藝界並に社交界に之を知らざる人なしらるゝに非ず、中に千古不磨の眞理を含みて深く人心の機微を捕ふるが故なり、各文短きは一二行天來の箴言ならざるなく、一度誦すれば生涯腦底に遺りて忘れんと欲して忘る能はざるもの尠なからず、いまや全譯成り、添ふるに原書英文の全部を以てす。然れば學者と云はず、實業家と云はず、苟も人情の機微に通せんとする者は必ず一本を座右に備へざる可らず、本書は實は人間學の奥傳なれば也。

◉時事新報評「言々珠玉、光彩陸離として更に言辭を加ふ事を容さず、譯筆亦忠實にして能く原文の風味を髣髴せしむ」。

橋本邦助書伯裝釘
意匠中判總クロース製函入極美本
全一冊
正價八拾五錢
郵税拾錢

ゲーテ作　東北學院教授　增富平藏先生譯

悲劇 イフヰゲニエ

◉不朽の文星ゲーテが、アガメノンの姫イフヰゲニエを主人公として、運命の重壓、情實の葛藤、良心の苦悶を寫せる名曲にして、既に ファウスト のゲーテを知れる人は、重ねてイフヰゲニエのゲーテを知らざる可らず。

◉一千七百七十九年、此劇がワイマルの帝室劇場に於て公演せられたる時、ゲーテ自ら篇中の人物 オレストに扮して 舞臺に立ちたりと云ふ。以て作者の此篇に對する自信と熱愛とを窺ふに足らん。譯筆亦謹嚴明快を極む。

橋本邦助氏裝釘
意匠四六判上製函入
美本全一冊
原本挿畫二葉入
正價八拾錢
郵税八錢

高橋五郎先生譯

エピクテタス遺訓

日本及日本人評『エピクテタスの遺訓は、マーカス・アウレリアス皇帝の瞑想錄と相並びて、**不朽の教訓**として崇視せられ、特に其の教訓中に聖書に見ゆる訓誨と符節を合はす如きものありとして泰西の國人に尊重せらる。今高橋五郎氏の手に依りて譯せられたるは**譯者其人を得**たりと謂ふべし。』

總クロース美本
全一冊
正價金壹圓
郵稅金拾錢

アウレリアス皇帝著 瞑想錄

萬朝報評「**ルナンが絶對宗教と評せる**者これ也エピクテタス遺訓を讀める者は又此書を讀まざる可らず。」

總クロース美本
全一冊
正價金壹圓拾錢
郵稅金拾錢

文學士 生田長江先生譯

トルストイ語錄

◉東京朝日新聞評『思想家としてのトルストイが如何なる人物なるかを知らむと欲するものは此書を讀まざるべからず、彼の思想は既に露西亞を動かせり全歐に影響せり吾人東洋人亦豈彼の思想に負ふ所なからんや』。

◉東京日々新聞評『曩きにニイチエ語錄を譯して好評嘖々たりし著者今又本書を譯了せり、本書はトルストイの著書中より抄錄せる短言寸句數千項を輯めたるものにして其文莊重謹嚴奇警高遠なる以て偉人の面影を覗ふべし』。

袖珍總クロース
全一冊
紙數四百三十頁
正價金七拾錢
郵稅金八錢

笛川漁郎譯　（八版）

社交談話法

袖珍總クロース
全壹冊
正價金四拾錢
郵税四錢

目次

◎第一章　寧ろ傾聽者たれ
◎第二章　相手の信用を獲るに就て
◎第三章　諷刺冷罵嘲弄に就て
◎第四章　非難、攻擊に就て
◎第五章　世辭に就て
◎第六章　虚榮心に就て
◎第七章　慇懃に就て
◎第八章　物語奇聞及地口に就て
◎第九章　質問に就て
◎第十章　無遠慮厚顔に就て
◎第十一章　議論に就て
◎第十二章　婦人との談話に就て
◎第十三章　逃くべき話題に就て
◎第十四章　奇言に就て
◎第十五章　小自我心小機性に就て
◎第十六章　晩餐會上の談話に就て
◎第十七章　沈默の人、怯懦、及其矯正に就て
◎第十八章　用語に就て

▲東京朝日新聞評『……社交的談話法に關する一切の秘訣を網羅せり……』國民新聞評『……を說く豁切犀利にして譯文亦極めて明快、全編十八章皆有益有趣味の文字……』報知新聞評『……所說剴切痛快にして此種著書中の白眉に屬す』

もと時事新報記者
もと一葉茶屋女將

一葉草紙

下山京子女史著　（再版）

（コロタイプ版及邦助畫伯挿畫五枚入）

邦助畫伯裝釘意匠
四六版總クロース
極美本全一冊
正價九拾錢
郵税拾錢

新聞記者となりては竦腕才筆有髯男子をして後へに瞠若たらしめ、茶亭の女主として時に喧傳し、才女と呼ばれ妖婦と罵られ、世評は世評を生じつゝも、兎に角疑が放膽忌憚は收めて此の中に在り、怪か、奇むなきの告白及び感想か、邪か、正か、一種の女性が人生觀等、亦是時代研究の一資料なれ戀愛觀、乃至一種の男性からんや。

目次

◉男道樂　紳士の好きな赤ん坊主の上方の妾はん◉もみぢの三千院◉お鹽の道行……等九章　◉男の市場◉戀人としての男◉お染やお七の初戀◉戀の梯子となる男◉戀人から聞きたい言葉◉戀人の風采◉戀人の趣味と酒◉戀人の型と現代の男◉ビール樽が仁王尊◉まがいもの〻男◉亭主の情婦大明神……等十八章　◉木屋町物語　◉東京のお妾生活◉東西浮名◉大阪の住居◉婦人記者◉お妾新道◉一萬五千圓◉一葉茶屋……等十八章　◉色戀の沙汰（上）（下）◉田螺の親方◉勝鬨さんの落船……等十章　◉色懺悔　女蝶男蝶◉許嫁◉水のまに〻◉大阪の住居◉ぬもりの黑塊◉可愛い付き師◉お妾新道◉一萬五千圓◉一葉茶屋……等十八章　◉一葉小話（上）（下）◉新字治川先陣◉當世奴の小萬◉藝者鉦賣◉奉公はじめ◉大阪のお客樣……等廿一章　◉仲居變裝記

テト 1F-27

マクス、オーレル著
藤井白雲子譯　徳富蘆花先生跋　（四版）

『女』殿　下

裝訂雅美
全壹冊
正價六拾錢
郵税八錢

◀目次▶

◎解し難き女性
◎結婚せる男子へ
◎結婚せる婦人へ
◎結婚せんとする男子へ
◎嫉妬は眞の愛情より生ずるか
◎姑氣質
◎結婚は男女を助くるか
◎藝術と戀愛
◎母親氣質と祖母氣質
◎戀する男子へ
◎善き女の缺點

◎女性の興ふる感化
◎佛蘭西の戀と英吉利の戀
◎自分の好な女
◎世界第一の美人
◎女性は男子の如何なる點　好むか
◎蓮葉女と弄媚女
◎英吉利の紳君氣質
◎佛蘭西の母親氣質
◎戀する人の恐しき誘惑
◎自分の嫌ひな女
◎感謝は愛情を生ずるか

◎老處女
◎看護婦氣質
◎寡婦の氣質
◎夫婦の選擇
◎夫の操縦法
◎女嫌ひの戀と女子の戀
◎女は男の意を迎る爲に製ふか
◎圓滿なる貴女
◎再婚の可否
◎佛蘭西細君氣質
◎外十二章

▲東京朝日新聞評『……世界の婦人研究中最も面白く最も意味深き者にて世に行はる譯書三四樣あり中にも本書はオーソリチーたるもの也……』

終